

〈2020年3月撮影〉

関西大学
人間健康学部
学部創設10周年記念誌
10年のあゆみ

KANSAI UNIVERSITY
Faculty of Health and Well-being

10th
Sakai Campus

目次

ご挨拶

人間健康学部長	村川 治彦	1
関西大学学長	前田 裕	3
関西大学理事長	芝井 敬司	4
関西大学教育後援会会長	吹田 康雄	5
関西大学校友会会長	寺内俊太郎	6

ご祝辞

堺市長	永藤 英機	7
堺商工会議所会頭	葛村 和正	8
和歌山県田辺市長	真砂 充敏	9
「国際健康福祉実習」受け入れ先		
ハワイ大学 マノア校	Dr. Lloyd I. Hisaka	10
ウィディア・アシ・バリ・セジャテラ財団	Ni Gusti Ayu Stiti Sudastri, SE	11

歴代学部長からのメッセージ

初代 学部長	関西大学 名誉教授	竹内 洋	13
第2代 学部長	人間健康学部 教授	狭間香代子	15
第3代 学部長	人間健康学部 教授	森下 伸也	15
第4代 学部長	人間健康学部 教授	山縣 文治	16
第5代 学部長	人間健康学部 教授	涌井 忠昭	16

座談会「人間健康学部創設時をふりかえって」	19
-----------------------	----

人間健康学部の教育・研究・社会貢献（地域連携）

◆教育

三つのポリシー（教育に関する三つの方針）	29
カリキュラムの変遷	31
ゼミ活動紹介	
・地域でとりくむ福祉「共育」	人間健康学部 教授 所 めぐみ 33
・舞踊不選人	人間健康学部 教授 原田 純子 34
・実践的視点から福祉問題を読み解く	人間健康学部 准教授 福田 公教 35
・グローバルな視点とローカルな活動で実践知を育む	人間健康学部 教授 村川 治彦 36
・合言葉はイノベーション！	人間健康学部 教授 森 仁志 37
・体験を基盤とした学びの場づくり	人間健康学部 教授 安田 忠典 38

◆研究

健康グッズの産学共同開発	人間健康学部 教授 小田 伸午	39
動く故に我アリ；moto ergo sum	人間健康学部 教授 河端 隆志	41
持続可能な部活動に向けた企業との共同研究	人間健康学部 教授 神谷 拓	42
企業からのサポートを受けて・・・	人間健康学部 教授 弘原海 剛	43

◆社会貢献（地域連携）

地域連携にご協力いただいている皆様からのご祝辞	44
地域連携事業10年のあゆみ	45
地域連携事業の活動紹介	46

各界で活躍する人間健康学部生・卒業生	61
--------------------	----

資料

人間健康学部・大学院人間健康研究科・堺キャンパスのあゆみ	69
〔キャンパスの風景、オリエンテーション・キャンプ、堺キャンパス祭、ボランティア活動・地域連携事業など〕	
キャンパスマップ	73
キャンパス見取り図	75
基礎データ	77
〔志願者数・合格者数・入学者数、在籍者数、卒業生数・就職者数・就職率、進路内訳、資格の取得状況	
歴代執行部一覧、人間健康学部専任教員一覧、歴代客員教授一覧〕	
卒業式集合写真	81
基本協定書、基本協定書の一部を変更する協定書、堺市と関西大学との地域連携協議会に関する覚書	83
地域連携協議会日程・歴代委員一覧	85

ご 挨拶

ご 祝 辞



人間健康学部のさらなる成長へ

人間健康学部長

村川 治彦

関西大学人間健康学部は、スポーツと福祉の二つのコースを柱に「健康（health）」と「健幸（well-being）」を探究する学部として、2010年4月堺市立商業高等学校・第二商業高等学校跡地に創設されました。この10年間に3,800人以上の学生が入学し、2020年4月に創設10周年を迎えることができました。卒業生の就職先は様々な業種の一般企業から教員、公務員と多種多様で、毎年99%を超える高い就職率を誇っています。なかでも社会福祉士養成では全国的にトップクラスの国家試験合格率を維持してきました。これも一重に関西大学ならびに堺市の関係者、地域の方々をはじめとする皆様の温かいご支援、ご協力のお陰と、心より御礼申し上げます。

思い返せば、この学部の誕生までにはいろいろと紆余曲折がありました。設置担当副学長の安部誠治先生にはひとかたならぬご尽力を賜り、ここにあらためて感謝の意を表したいと思います。また開設時にはエバーグリーンや現在食堂、図書館、大教室があるB棟が建設途中で、キャンパスはまさに工事現場であり、学生たちは教室以外に居場所がありませんでした。そうしたなかでも一期生は、自分たちで新しい学部の伝統を創るという強い意気込みのもと、堺キャンパス独自の課外活動団体やキャンパス祭を立ち上げ、仲間との絆を強めていきました。また教員、事務職員も学生たちと一緒に汗を流し、現在まで続く新入生のオリエンテーション合宿や、キャンパスのシンボルであるプロジェクトアドベンチャー施設を使った体験学習メソッドの構築に取り組みました。スポーツと福祉を軸とする本学部には多様な学生が入学しますが、学部独自の体験学習メソッドによる初年次教育では「誰ひとり取り残さない」を意識し、自分とは違った考えや感じ方の人と関わりながら、他者を尊重し互いに支え合い学びあう体験を積んでいます。こうした努力により初代学部長の竹内洋先生がメッセージで述べてくださっている本学部の明朗闊達な学生気質が醸成され、今も脈々と受け継がれています。

またこの10年間、学部をあげて「堺市と関西大学との地域連携事業」に取り組み、現在50を超える多彩なプロジェクトを実施しています。その多くに学生が参加していますが、福祉を目指して入学してきた学生はもちろんのこと、スポーツ経験を通して他者への感謝や気遣いを育んできた学生たちも、地域社会の高齢者や子供たち、障がい者の方々との関わりを通して、明朗闊達な学生気質と他者を思いやるケア（Care）の心を育み、より良いコミュニティのあり方を学んでいます。

学部開設時の逆境にも関わらず、本学部が堺の地に強く深い根を張ることができたのも、教育学の泰斗である竹内先生が学部長を引き受け、この学部の根幹に学生の教育を置く方針を示して

くださったお陰でした。明朗闊達でケアの心を育んだ学生たちが、病気やストレスを抱えず「健康 (health)」で「健幸 (well-being)」に暮らせる社会を実現するために、「からだ、こころ、くらし」のあらゆる面で「より良い生き方」とは何かを追求する、そうした学びの場を提供することが私たち人間健康学部の存在意義であることを、この1年を振り返りあらためて確認できたと思います。

さて、本学部創設10周年である2020年は、またウィズ・コロナの時代の始まりとなりました。新型コロナウイルスによる社会の変化だけでなく、これからの時代はデジタル化、気候変動、人工知能の発達とともにVUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) と称される複雑で不確実な社会になっていきます。2021年1月の中央教育審議会では、国連が2015年に採択した「SDGs (持続可能な開発目標)」や2019年にOECDが提示した「学びの羅針盤ラーニング・コンパス2030」を踏まえ、劇的に変化する「Society5.0時代」に育むべき資質・能力に関する「令和の日本型学校教育」についての答申を発表しました。その冒頭には「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」と述べられています。これまで本学部が取り組んできた教育はまさに時代のニーズを先取りしており、これからこうした資質・能力を備えて入学してくる学生の力をさらに磨きあげ社会で活躍する人材に育てることが、本学部の重要な役割となるでしょう。また新型コロナウイルスで明らかになったように、今や「健幸 (well-being)」に暮らせる社会は、地球全体を抜きに考えることはできません。これまで人間健康学部では、ハワイやインドネシアで現地の人々と交流する独自の「国際健康福祉実習」を提供してきました。今後はこうした交流をさらに拡大し、SDGsを軸に学生たちがグローバルなつながりのなかで学びを深める機会を増やしていきたいと思います。

竹内先生のエールに応えるなら、本学部は創設10周年を一区切りとして10歳の澁刺たる少年時代を終え、これから成人となり25歳で一人前の学部となることを目指していかなければなりません。「からだ」「こころ」「くらし」の「健康 (health)」を総合的にとらえ多様な「健幸 (well-being)」のあり方を追求する「人間健康学」とはいかなる学問であるか、アイデンティティを確立することが求められています。そのためにも、明朗闊達な学生気質と他者を思いやるケア (Care) の心を育むという学生教育を学部の土台としながら、これまで以上に地域に根ざした絆を強めグローバルなつながりを拡げて参りたいと思います。皆様からの更なる、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



人間健康学部創設10周年を祝して

—「こころ」「からだ」「くらし」を支えて10年—

関西大学学長

前田 裕

2010年に大阪府堺市に開設した人間健康学部が、創設10周年を迎えることとなりました。当時の資料には、設置認可の手続きに際し担当者が何度も文部科学省を訪れた記録が残されており、多くの教職員のご尽力と堺市のご協力により創設されたことをうかがうことができます。10年という記念の年を迎えられ、設置に携わられた関係者の皆様にあらためてお祝い申し上げます。

人間健康学部はこれまで2,355名の卒業生を輩出しており、卒業生たちは、第一線で活躍するアスリート、地域に貢献する社会福祉士等の福祉専門職、教育現場を担う教師から、企業を支える構成員や自ら起業する者など多様な場で活躍されています。

日本は超高齢社会を迎えています。「人間健康学」という分野が、「健康寿命」、「人生100年時代」という創設10年後の現在の、そして、さらに、これからの10年後の社会のキーワードをも先取りした学問であることが分かります。私たちの生活になくてはならない「からだ」と「くらし」を支える「スポーツ」と「福祉」を「健康」をキーワードにして繋げるとき、健康で幸福に生きる「健康」を目的とする人間健康学部の学びは、これからの時代になくてはならない考え方となります。

また、人間健康学部は開設当初より堺市との連携を密にし「堺市と関西大学との地域連携事業」を実施しておりますが、近年学部学生が企画立案、実施を行う事業が増えております。学部の学びを堺市のフィールドで実施するこれらの取り組みは、本学の学是である「学の実化（じつげ）」を正に実現したものであります。このような多彩な取り組みと、これまでの堺市のご協力に感謝申し上げます。

これまでの学部の取り組みをより発展させ、次の10年に伝統を継承していかれる学部のあゆみを、学長として精一杯支援させていただくことをお約束し、お祝いとさせていただきます。



人間健康学部の設置をめぐるって

関西大学理事長

芝井 敬司

人間健康学部を擁する堺キャンパスは、2010年に本学2010プロジェクトの一貫として、高槻ミューズキャンパス（社会安全学部、大学院社会安全研究科、高等部、中等部、初等部）および北陽キャンパス（高校と中学）と、時を同じくして開設いたしました。この度、開設10周年を迎えるに当たり、開設当初よりご尽力頂きましたすべての教職員の皆様に、心より感謝とお祝いを申し上げます。

さて、人間健康学部の設置は、私たち関西大学にとって大阪南部での新しい学部の開設でした。その準備作業は決して生易しいものではありません。設置の理念、カリキュラムの策定、スタッフの人事、施設設備の整備を遅滞なく進めながら、設置申請書類を仕上げなくてはなりません。当時、人間健康学部設置を主担していた安部誠治副学長は、同じく2010年4月に高槻ミューズキャンパスに新設する予定の社会安全学部、大学院社会安全研究科の設置申請作業も担当していました。一方で、私も副学長として、高槻ミューズの初等・中等・高等部の設置と大阪医大、大阪薬大、本学の3大学連携構想を担当して忙しくしておりましたが、堺キャンパスの一部作業にも参加していました。それだけに、この度は学部創設10周年を祝うこととなり、私個人としても、まことに喜ばしく感激一入です。

ところで、関西大学が堺市浅香山にキャンパスを開設することになったきっかけは、もう少し前のことになります。それは、ご存じのように、堺市が実施した大学誘致の公募でした。市は、堺市立商業高等学校の跡地に大学院、大学、専門学校など高等教育機関を誘致するために、2007年8月から公募に踏み切ります。2007年12月までに本学を含む4法人が応募しました。市は4法人の提案を審査して、最終的に2008年2月4日になって、堺市の「大学等高等教育機関選定審査委員会」は審査会を開き、入学定員300名の「健康文化学部」を提案した関大が、優先交渉権者に決まったと発表しました。

少し驚かれたでしょうか。最初は「健康文化学部」として構想されていた新学部が、どのような経緯で人間健康学部になったのか。この話はまたの機会に譲るとして、堺市をはじめ地域と深く豊かな交流・連携を大事にする人間健康学部の腰の入った意欲的取組が、次の10年に向けてますます発展していくことを心から期待しつつ、お祝いの言葉とさせていただきます。



関西大学人間健康学部 創設10周年を祝う

関西大学教育後援会会長

吹田 康雄

人間健康学部創設10周年を迎えられるにあたり、心からお慶び申し上げます。

貴学部は、創設時から現在に至るまで、「こころ」「からだ」「くらし」を総合的にとらえ、健やかでおおらかな生き方をめざす教育と研究を行うことにより、多くの有為な人材を育み、また、専門研究の成果を社会に発信し続けてこられました。

特に人材育成については目を見張るものがあり、貴学部の在学生及び卒業生がオリンピック級の選手としてスポーツの世界で多く活躍されております。こうした人材を輩出し得たのも、貴学部の創設理念の正しさとそれを実践されてきたことによるものでありましょう。

また、人間健康学部の先生方も、堺市との地域連携事業を通じて様々な社会貢献を果たされています。多くの先生方の支援により、堺市における「子どもの生活・福祉課題」に関する教員研修事業や地域における福祉・介護専門職のリカレント教育事業などが実施され、成果を上げられています。

この他にも、学生ボランティアの支援など、貴学部の先生方のご活躍は枚挙にいとまがなく、そのような環境のもと学修の機会を与えてくださいますことに深謝する次第です。

さて、私ども教育後援会は関西大学在学生の父母が集まり、終戦直後の荒廃した学園の再建を支援しようという情熱から誕生し、その熱い情熱は、連綿と役員の皆様へと受け継がれ、今日の発展を遂げることができました。その具体的な事業の一つに学生支援事業がありますが、例えば、昨年末には教育後援会からの贈り物として、堺キャンパス食堂で食事をされる学生へおかず一品を差し上げる「ippin+」キャンペーンに支援させていただいています。

貴学部におかれましても、情熱ある教職員の皆様や学生のみなさんのますますのご活躍によって、その歴史を紡ぎ、今後更なる発展を遂げられますよう、心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



人間健康学部創設10周年を祝して

関西大学校友会会長
(2020年12月現在)

寺内 俊太郎

2010年4月に設置された人間健康学部が、創設10周年を迎えることにつきましては、これまで人間健康学部ならびに人間健康研究科の充実と発展に尽力されました法人と関係のみなさまに対しまして、あらためて深い敬意と感謝を申し上げます。

人間健康学部は、「スポーツ」「福祉」をキーワードに、人間の「健康 (health)」と「健幸 (well-being)」の探究を教育研究の目的とし、あわせて地域の人びとが健康で豊かな生活を享受するのに役立つ知見を提供するため、堺市をはじめとする地方自治体と連携して事業を展開し、2010年度の9事業から2019年度には56事業に拡大するなど、地域と社会に深い関わりをもった実績を重ねておられます。

人の健康を考えると、2020年のパンデミックは、社会と個人にさまざまな深刻な問いを投げかけました。また、世界的にはSDGsという共通目標があり、関西大学でもターゲットを意識した取り組みがなされています。

人間健康学部と同研究科は、主たる領域だけでも、心理、社会学、スポーツ、運動生理、レクリエーション、ユーモア、地域福祉、社会的養育、子ども、公的扶助、社会福祉政策などさまざまな観点からのアプローチがあります。社会と個人の問いに対して、いかなる答えを考え用意するか、その真価が問われていると思います。

創立10周年を迎えた人間健康学部が、これからの社会で果すべき役割は大きいものがあります。学部創設の理念が、今後10年、20年後の社会の要請と次代を担う学生の期待に応えうるものであることを祈念して、創設10周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

ご祝辞

関西大学人間健康学部創設10周年に寄せて

堺市長

永藤 英機

創設10周年という節目の年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

この間、人間の幸福を実現するための健康に関わる諸問題について、地域社会との連携による実習・実践を特色とした「理論と実践の融合を図る教育」を行い、社会から高く評価される学生を多数輩出しています。芝井理事長はじめ大学関係者の皆様の努力に対して改めて敬意を表します。

また、「堺鉄砲鍛冶屋敷の史料研究と公開」をはじめ、各種講座やイベントの開催など様々な分野で地域連携事業を実施いただいていることに感謝いたします。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、私たちの日常生活や働き方も大きく変わりました。

今年の春には、時代の変化を的確に捉え市政運営の方向性を示す「(仮称)堺市基本計画2025」や「堺市SDGs未来都市計画」など多くの計画がスタートします。堺が持つ可能性を最大限に引き出すよう様々な取組に挑戦しながら、コロナを乗り越えたその先に、市民の皆様が夢と希望を感じられる堺であるように邁進します。実現に向けては、市民、企業、大学など様々な主体が思いを共有しながら、堺の未来をともに創造していきたいと考えています。

関西大学におかれましても、堺キャンパスが有するスポーツ・健康・福祉の学びの拠点などの強みを生かしながら本市との連携を強化し、堺の成長に向けた取組を進めていただくことをお願い申し上げます。

結びに、関西大学のさらなる発展と、大学関係者や学生の皆様のご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉といたします。

次代を牽引する人材育成に一層の期待

堺商工会議所会頭

葛村 和正

このたび、母校である関西大学の人間健康学部がめでたく創設10周年を迎えられ、その輝かしい足跡を記す記念誌を発刊されますことは、誠に意義深く、学校法人関西大学理事を務めさせていただいております私にとりましても、大変喜ばしく誇らしいことであります。

また、堺キャンパス開設により、歴史と伝統ある貴大学と堺市との関係強化が図られ、まちの賑わいが一層創出されましたことをお礼申し上げます。

貴学部におかれましては、次代を牽引する有為な人材の輩出はもとより、昨年7月に世界遺産登録されました「百舌鳥古墳群」における環境課題等の調査研究に傾注される等、優れた教育・研究実績等を通じ、地域社会の発展に大きく貢献されてこられました。

この間、貴学部の運営に尽力されました歴代の学部長をはじめ教職員及び学生の皆様方に対し、衷心より敬意を表する次第でございます。

当所といたしましても、コロナ禍の長期化により、一層厳しい経営環境を強いられております中小・小規模事業者への伴走型支援の強化、急速に進展するDXへの対応をはじめとする時代に即した活動等を通じて、地域経済の振興を図ってまいります。

最後に、関西大学人間健康学部がめでたく創設10周年を契機とされ、更なる飛躍を遂げられますことをご期待申し上げますとともに、皆様の益々のご活躍とご健勝を心からお祈り申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

関西大学人間健康学部創設10周年に寄せて

和歌山県 田辺市長

真砂 充敏

このたび、関西大学人間健康学部が創設10周年を迎えられましたことに、心よりお祝い申し上げます。

さて、これまで貴学とは、平成24（2012）年にはじまりました「熊野本宮子どもエコツアー」をはじめ、田辺扇ヶ浜海水浴場での「海の家」の運営事業など、数多くの連携事業に取り組んでまいりました。

そして、これらの事業を機に、様々な分野での交流が広がり、卒業後、本市に移住・定住し、若さ溢れるバイタリティと新たな視点をもって起業されるなど、地域の一員として活躍いただいている方もいらっしゃいます。

また、貴学が構える堺市とも更なる交流が深まり、平成26（2014）年には、友好都市提携を締結するに至りました。

このように、貴学と本市との連携は、様々な形で実を結んできておりますし、貴学が掲げるミッションである「健康で笑いのある、こころ豊かな暮らしを実現する」と、本市のまちづくりの将来像である「人と地域が輝き、未来へつながるまち田辺」とが絶妙にブレンドされ、本市の活性化に大きく寄与いただいております。

結びに、10周年の節目にあたり、貴学と本市との関係の継続・発展と、学生の皆様の益々のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

◆「国際健康福祉実習」受け入れ先からのご祝辞

Director, Student Recreation Services (Retired)
University of Hawaii @ Manoa

Dr. Lloyd I. Hisaka

Congratulation to the Kansai University Faculty of Health and Well-Being on the celebration of your tenth anniversary. I have been fortunate to assist Dr. Tadakatsu Okada and Mr. Tadanori Yasuda in arranging educational experiences for the Kansai University students during their study trip to Hawaii. As the Director, Student Recreation Services at the University of Hawaii at Manoa, I have been able to assist the Kansai group annually with the arrangement of cultural, educational and recreational experiences during their study tour. The students were able to participate in body-boarding and other ocean activities as part of our Outdoor Recreation program. They also received a lecture on the University's Student Recreation program along with a tour of the Warrior Recreation Center, the center of student recreation on the Manoa campus. In addition, students also experienced many of the cultural programs offered by the City of Honolulu. The students had an opportunity to travel to the beautiful North Shore of Oahu and participate in a high ropes course at the YMCA's Camp Erdman.

Dr. Okada and Mr. Yasuda have done an outstanding job of exposing their students to many of the cultural, educational and recreational opportunities here in Hawaii. It is my hope that these opportunities for the Kansai University students will continue for years to come.

【日本語訳】

関西大学人間健康学部創設10周年、おめでとうございます。

私は幸せなことに、貴学部学生たちのハワイ実習における学習体験を提供するというかたちで、岡田忠克先生と安田忠典先生のお手伝いをさせていただいています。ハワイ大学マノア校の学生レクリエーション局のディレクターであった私は、毎年、貴学部のスタディツアーにおける文化、教育、レクリエーション等の体験学習のお手伝いをさせていただくことができたのです。

学生たちには、私たちのアウトドア・レクリエーション・プログラムの一環であるボディボードやその他の海洋スポーツに参加してもらいました。また、マノア校の学生レクリエーションの拠点であるウォリアー・レクリエーションセンターの見学ツアーや、ハワイ大学の学生レクリエーション・プログラムに関する講義を受講してもらっています。

さらに、学生たちはホノルル市が提供する多彩な文化プログラムも体験しました。そして、オアフ島の美しいノースショアに行き、YMCAのキャンプ・アードマンでロープスコースを体験することもできました。

岡田先生と安田先生は、学生をここハワイで多彩な文化、教育、レクリエーション等に触れさせるという素晴らしい仕事をしてくれました。関西大学の学生にとって、このような機会が今後も続くことを願っています。

ハワイ大学マノア校学生レクリエーション局
前局長
ロイド・ヒサカ

◆「国際健康福祉実習」受け入れ先からのご祝辞

Widhya Asih Bali Sejahtera Foundation
Director

Ni Gusti Ayu Stiti Sudastri, SE

Herewith on behalf of Widhya Asih Bali Sejahtera Foundation, we wish the Faculty of Health and Well-being of Kansai University congratulations for the 10th anniversary.

It's an honor that Widhya Asih Bali Sejahtera as partner that always been supported by the faculty witnessing such a historic moment. And We believe this milestone has been achieved through many great work that has been done by the great people of the faculty.

Once again, congratulation for this great milestone and may this success of your faculty continues in the upcoming year.

Best regards,

【日本語訳】

ここにウィディア・アシ・バリ・セジャテラ財団を代表して、お慶びを申し上げます。関西大学人間健康学部の皆様、10周年おめでとうございます。ウィディア・アシ・バリ・セジャテラ財団がパートナーとして、このような歴史的な瞬間を目の当たりにしている人間健康学部から常にサポートされていることを光榮に思います。そして、この記念すべき節目は、素晴らしい教員によって行われた多くの素晴らしい仕事を通じて達成されたと信じています。

あらためて、この素晴らしい節目を祝福し、この学部の成功が来年以降も続くことを祈っています。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

ウィディア・アシ・バリ・セジャテラ財団
ディレクター
ステイティ・スダストリ



歴代学部長からのメッセージ

初代	学部長	竹内	洋
第2代	学部長	狭間	香代子
第3代	学部長	森下	伸也
第4代	学部長	山縣	文治
第5代	学部長	涌井	忠昭



創設前後の思い出

初代 学部長
関西大学 名誉教授

竹内 洋

創設10周年おめでとうございます。

本学部が創設される前、私は文学部の教育学専修の教員でした。堺市にできる新キャンパスに新学部設置の話が進んでいることは知ってはいましたが、私の専門からは遠い学部だったので、他人事でした。そんな2008年のある日、わが家に河田悌一学長（当時）から電話があって、お願いしたいことがあるから近日、伺いたいといわれました。しかし、この時は何の話か見当がつかないほどでした。

河田学長からのお話は、新設予定学部の学部長（予定者）になってほしいというもの。私にとっては晴天の霹靂。私はといえば、福祉関係の研究については素人だし、スポーツにいたっては、大学生のころ「運動はなにかやっていますか」と尋ねられるたびに「学生運動」と答えたくらいなので、これも縁がない。そんなわけで、不適任でしょうと言いました。さらに、「私もそもそも喫煙者です（ちなみに今は喫煙者ではありません）から健康関係の学部に向きですよ」とケムに巻いた気になったりしていました。それでも学長に拙宅までご足労いただいたので、こう返事させていただきました。考えさせてもらいますが、多分、無理。その場合は、適任者を責任をもって推薦させていただきます、と。実は河田先生には私が某国立大学を定年退職するときには是非、関大に戻ってほしい（若い時に社会学部教員をしていた）と招聘していただいた経緯があります。妻からはそんな恩ある学長に懇願されたらうけるべきでしょうとぴしゃりと言われました。また長いつきあいの社会学部の木村洋二教授からも是非頼みます、一緒にやりましょうよ、と誘われました。森本靖一郎理事長（当時）からも着任をうながされました。そんな複合戦力に推されて私では不十分ですが、やらせていただきますということになりました。そのあと、「学部長予定者」というのはじめて見る妙な肩書が入った名刺を渡されました。新設学部だけに、文部科学省でのヒアリングや関係者との面談の際に肩書の入った名刺が必要だったからです。

一方、文部科学省への書類提出などの関係で、就任予定の教職員の間で着々と準備がおこなわれていました。それを束ねていたのが当時副学長の安部誠治教授（現社会安全学部教授）でした。そういう意味では、河田学長とならんで安部先生は本学部の礎を築く上で大きな尽力を払った方で、私のほうは、安部先生の後を引き継ぐ形になりました。安部先生にはその後もなにかとご助言をいただきました。また河田学長には新設の際に新たに必要となった採用ポストの増員など、苦しいときの学長頼みでしたが、全面的にご支援とご尽力をいただきました。

就任予定の教職員の方々の名前や顔は一部知っている人もいましたが、実際に一緒に仕事をするのははじめての人が多かったのですが、新学部をつくるんだという熱い思いで、みんながひとつになっているのに胸が打たれました。この人たちと一緒にやらっていけると思ったものです。カリキュラムや学部編成の問題、そして大学設置・学校法人審議会への提出書類の作成など、大変な作業が必要でしたが、みんなでひとつひとつ課題をこなしていったあのころのことは記憶につよく残っています。それだけに当時の教職員の方々が戦友のように思えてしまうのです。

意欲的な新しい教員の方々も多数迎えることができました。こうして2010年4月1日に新学部がスタートしました。新学部だけに、あらたにつくらなければならない制度や規定など多かったのですが、副学部長の狭間香代子教授はじめ学部執行部の先生方と教員の皆さん、そして小上廣之事務局長、木村明彦事務長をはじめとする職員の皆さんが一丸となって新しい学部づくりに文字通り粉骨砕身していただきました。新設学部で新しいキャンパスにもかかわらず多くの志願者があつまり、幸運な出発をすることができました。ただ、木村洋二教授が開講の前年に亡くなられてともにこの日を迎えられなかったことが残念でなりません。

はじめての学生がどのように育っていくかは、以後の学生たちのモデル（隠れたカリキュラム＝教え込みなき教育）となるので大変重要ですが、教職員もそれを意識して教育やイベントなどに工夫をこらしました。そうした努力と一学部だけのキャンパスというキャンパス効果とがあいまって、教員・事務職員・学生の間の一つのファミリーのような連帯意識が生まれました。教職員が指導したわけでもないのに、学生たちは、キャンパス内では、訪問者を含めて「今日は」と元気な挨拶をかわすようになりました。些細なこととはいえ、明朗闊達な本学部の学生気質をあらわしていると思ったものです。課外スポーツの指導で週一回堺キャンパスにきていた他キャンパスの事務職員がこうっていました。「堺キャンパスにくるのが楽しみだ。気持ちがいい学生が多い」と。響きあう所作と心がキャンパス文化となったのです。就職率も大変よく、教員合格者が多いのも誇れることです。

本学部は創設から10年たち澁刺たる少年時代を迎えました。しかし、学部が一人前になるのは25年かかるともいわれます。なぜ25年という説が生まれたか、定かではありませんが、卒業生が社会の中堅として活躍することをふまえたことによるのではないかと推測します。10周年を節目に、25周年の成人期の本学部を見据えた教職員・在学生・卒業生の方々のさらなるご健闘を祈りたいと思います。



学部創成期の思い出

第2代 学部長
人間健康学部 教授

狭間 香代子

学部創設から10年が経過した。まさに、光陰矢の如しである。学部長職には、初代学部長である竹内洋先生の残り任期を含めて、2年半の期間を務めた。学年が順次揃っていき、少しずつ大学のキャンパスらしくなっていく時期になる。また、全学年が揃うことに併せて、学部の上の受け皿としての大学院を設置する必要もあった。

新しい学部を創ることは、一から創り上げることであり、関係者の苦労は並大抵ではない。さらに設立後も、学部として運営、機能していくためには、都度ごとに規定を作成するなど、既存の学部にはない大変さがあった。学部の創成期を教職員が一丸となって邁進してきた時期ということができる。

人間健康学という新しい学際的な学を掲げ、学の体系化が本学部には問われている。これまで、多くの先生方が試行錯誤しながら、学の体系化に貢献してこられた。これからも、学際的な研究と教育を展開させて、人間健康学部がますます発展することを祈念している。



快男児の思い出

第3代 学部長
人間健康学部 教授

森下 伸也

むかし社会学部に、いかにも縄文人直系を思わせる髯もじゃの、天衣無縫の快男児がいた。名を木村洋二という。つねに明朗闊達、丁々発止の談論風発を無上の快とし、常套陳腐を嫌い、奇想天外の逆説で周囲を仰天させ、意味不明の真理で会堂を湧かせた。長らくソシオン理論なる難解なシステム論の構築に没入していたが、あるとき若き日に培った笑い学への関心がただならぬ密度でよみがえり、日々、その頭脳から新奇な発想がめまぐるしく噴き出した。いわく、関大笑い講の開催、国際シンポジウム開催、吉本の寄附講座「笑いの総合科学」、笑いの単位aH（アッハ）の確定、笑いの測定器アッハ・メーターの開発、等々。そしてなんと言っても笑い学部の創設！ 紆余曲折、予想もしない形式とはいえ、この「笑い学部」は人間健康学部の重要な礎石となり、快男児は人間健康学部開設の大恩人となったのである。ところが運命のいたずら、残念ながら快男児は開学の前年にガンで亡くなられてしまった。諸般の事情からいわば後継者となった私は、木村プロジェクトをなんとか本学部に根づかせるべく努力するにはしてきたが、なにしろスケールが大きすぎた。申し訳ないことに、力及ばず、ほとんどのプロジェクトが頓挫して今日に至っている。けれども、ここに確実に一粒の麦がまかれたわけである。長い年月のうちには、幸運な偶然が積み積み「笑い学部」が力強く開花するときもあろうと、無力な後継者は幸福な未来を夢想するのである。



積極的に時代を乗り切る

第4代 学部長
人間健康学部 教授

山縣 文治

人間健康学部の10周年に関わることができたことは大きな喜びである。前任校の所属学部は生活科学部であり、生活を科学することを目的としていた。本学部は、生活をさらに具体化し、こころ、からだ、くらし、という3つの側面から探求するものであり、私には連続性を感じる内容であった。学部長時代に、何度か学生や保護者を前に話す機会を与えられたが、その多くは、この3つのキーワードと、学部の英語表記に使われている、well-beingを絡めた内容であった。

開拓的な研究を志向する学部であるが、今後の大学は、人口減少により、大きな試練を迎える。開学部時（2010年）の18歳人口は122万人であった。2020年にはこれが117万人となり、2030年には105万人になると予想されている。18歳人口は、18年前の出生数と相関関係にあるが、出生数の動向を考えると、これは今後さらに減少し、2040年には90万人を割り込むはずである。

このような状況での大学は、学生数確保、研究の質、大学経営、いずれにおいても非常に厳しい状況となる。学生数確保を旨とすると学力は低下する。一方、学力を維持しようとする学生数を減らす必要が生じる。学生本位の大学、研究者本位の大学、法人（経営）本位の大学、多くの大学はこの3つの間で揺れることになる。保守的な戦略は萎縮するのみである。如何にこれを積極的戦略で乗り切るか。教員自身が自らの課題として考えていく必要がある。



2年間で振り返って

第5代 学部長
人間健康学部 教授

涌井 忠昭

2018年10月から2020年9月までの2年間、人間健康学部長・人間健康研究科長の重職を仰せつかった。浅学菲才の身にとっては大役であった。

2020年1月、日本で初めて新型コロナウイルス感染者が確認された。その後、新型コロナウイルスは日本、いや世界中に蔓延した。そのため、予定していた国際健康福祉実習（インドネシア）は中止とした。また、3月の卒業式、4月の入学式は中止となった。

4月8日、4月20日以降は当面、原則として「インターネットを活用した遠隔授業（以下、「遠隔授業」という。）」を行うことが通知された。また、成績評価の方法も「定期試験は行わず、平常試験（小テスト・レポート等）で総合評価する。」に変更となった。初めての遠隔授業に学生も教員も困惑し、疲弊した。一方、遠隔授業にもメリットがあることから、今後は適正な運用が求められる。秋学期は新型コロナウイルスの感染対策を講じたうえで原則として対面授業となったが、大人数の授業では今も遠隔授業が行われている。

他方、2020年は学部創設10周年記念事業として、6月にホームカミングデー、9月に記念式典・記念講演会および祝賀交流会を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止とした。

任期の後半は新型コロナウイルス感染拡大防止対策に追われる日々であった。1月現在、新型コロナウイルスの収束の兆しは見えないが、今後も学生の健康と安全、安心を最優先課題として、コロナ禍における新たな学習環境の創出に取り組むたい。

座 談 会
「人間健康学部創設時をふりかえって」

「人間健康学部創設時をふりかえって」

初代学部長

竹内 洋

(任期2010.4.1～2012.3.31)

初代執行部 (任期2010.4.1～2012.9.30)

副学部長 **狭間香代子** (2012.4.1より学部長)

教学主任 **岡田 忠克**

入試主任 **村川 治彦**

学生主任 **安田 忠典**

学生相談主事 **三浦 敏弘**

※役職は当時のもの
※初代執行部のうち現職の方のみ

岡田 それでは、人間健康学部創設10周年記念の座談会を始めさせていただきます。本日は初代学部長の竹内洋先生にお越しいただき、文部科学省への設置申請までのご苦勞、創設当初の学部の状況についてもお話をいただきたいと思います。併せて当時、第1期の学部執行部であった副学部長の狭間先生、入試主任の村川先生、学生主任の安田先生と教学主任の私、学生相談主事の三浦先生にお越しをいただいております。学部ができてもう10年経つかという感じですが、まずは、竹内先生から当時のご苦勞等を含めたお話をお願いします。

▶学部創設当時について

竹内 学部の歴史となると、どこまでさかのぼるかという問題があります。最初の学部長は僕なのですが、たぶん今日の皆さんは、設置準備のときの委員だったと思うので、人間健康学部への初代の移住者は、私を除いた皆さんのほうです。僕がかかわったのは2008年ごろですが、委員会のようなものはもうできていたと思うんです。

当時、僕は堺のキャンパスにスポーツと福祉を中心とした新しい学部ができるということはどうさで知っていました。そのときは文学部の教育学専修に在籍していましたが、僕の研究領域とそれほど近くなかったもので、他人事みたいにずっと思っていました。そうしたらある日、当時の学長の河田（悌一）先生がわざわざ拙宅にこられて、「新学部の学部長予定者になってくれませんか」とおっしゃいました。さらに亡く



写真左より岡田先生、安田先生、三浦先生、竹内先生、狭間先生、村川先生

なった木村（洋二）先生からも「一緒にやりましょうよ」と言われました。そのうちに当時理事長だった森本（靖一郎）さんからも電話が来て、「先生、運命共同体でやりましょうよ」などと言われて、だんだん引込みがなくなりまして、2008年だったと思うんですが、「それじゃあ」ということになったんです。

僕が初代学部長でしたが、実際は学長の河田先生が中心で話が進んでいましたし、それまでの委員会のリーダーは、当時の副学長の安部（誠治）先生でした。実質的には安部先生が最初にこの学部を始動させた方だと思います。僕は安部先生から引き継いだ感じです。

岡田 本学部が認可申請を経て設置されたわけですが、当初は施設・設備上の課題であるとか、教育を動かしていくなかでいろいろ課題があったかと思います。学部長としてご苦勞されたことは何でしょうか。

竹内 当初はうれしか知らない方も多かったもので、「うまくやれるのかな」と思って心配しました。でも、皆さんが新しい学部をつくっていく

という、そういう気持ちを非常に強くお持ちで、さらにいい人が非常に多かったので、そういう心配はすぐなくなりました。それにみんなが丸となっていました。例えば、事務職員の人も、いろいろな準備をされていて大変だったのですが、もう本当に一生懸命やっていました。大学教員って、個人プレーヤーじゃないですか。あまりみんなでやるということに慣れていないんです。いい意味でも悪い意味でも何か個人主義みたいな。何かを一緒にやるという経験は非常に強いものがあるし、大げさに言うと戦友みたいな感じもあります。それこそ、岡田先生と文部科学省に何回も行ったときの光景がリアルに思い出されるとかね、そういうのがたくさんあって、戦争体験みたいな感じがしています。

岡田 これまでご経験された学部、学問と、われわれのような学際的に人間の健康を追究するという学問との違いを教えてくださいと思います。

竹内 まず福祉については、まったく無関心というわけではありませんでした。僕は大学を卒業してから保険会社に入りましたが、その当時、日本でもスウェーデンとか北欧の福祉国家が目指すべき国家だと言われていました。それで上司から、国内でも海外でも留学に行かせるから、北欧の社会福祉について、一般的な社会福祉や政策の面から勉強しておきなさいと言われたことがあったんで、少し勉強したことがあります。だからまったく接点がないわけではなかったんです。それからスポーツについても、関西大学へ赴任する以前に、教え子と一緒にパブリックスクールのスポーツと旧制高校のスポーツという論文を書いたことがありました。本学部でもスポーツ系の方を採用していますが、ちょうど教育社会学と同じように、社会学的な方が結構多いんです。スポーツっていうのは対象であって、方法じゃないので、社会学って名乗らなくても、スポーツを研究している方は、意外と社会学的なんです。なかには心理学的な方もいるかもしれない。そういうわけで、だんだん違和感がなくなってきましたね。

岡田 ありがとうございます。堺キャンパスと千里山キャンパスの文化の違いみたいなものが

あれば、お聞かせいただきたいと思います。

竹内 学生気質（がくせいかたぎ）っていうのは、何を専攻するかというのもある程度は関係ありますよね。それから、僕は一学部一キャンパスっていうのはすごく大きな効果があると思うんです。学生も事務職員もすごく帰属意識が強くなるんじゃないかと思うんですよ。僕はかねてから、私学はやはり授業料収入への依存度が高いわけだし、学生を大切にするという意味では、事務室をまとめて多少合理化して経費は節約できても、そうすると良さをなくしてしまうんじゃないかと思うんです。学部ごとに事務職員の担当者がいると、学生の顔も分かるし、担当者も「自分たちは何学部の人間だ」という意識ができると思うんです。そういう意味では、一学部一キャンパスっていうのは、ものすごく大きな意味があります。一キャンパスとしての仲間意識というか、「ファミリー」ですよ。

それから、学生も福祉やスポーツの専攻だから、明朗で人柄が非常に柔らかくてすごくいい感じがしました。ひとつ事例を挙げると、課外活動で、千里山の事務職員がコーチとして週に何回か堺に来ていて、駅で僕に会ったら、「この学部の学生はいい」って絶賛していたんですよ。そして「自分はここにるのが楽しみだ」と言っていました。もちろん先生方の教育もいいと思いますが、僕は一学部一キャンパスというのは、非常に大きいんじゃないかなと思います。そして、あいさつをきちんとするという伝統はすごく大切で、それが後輩に伝わっていくんだと思うんです。

岡田 当時の先生方について教授会の雰囲気など、具体的に何か思い出みたいなのはございますでしょうか。

竹内 僕が年長だったせいで、皆さんが「まあ仕方がないな」と思ってくれたんだと思います。新しい学部をみんなでつくっていくかといけないという、そういう気持ちが大きかったんじゃないかなと。

岡田 それでは、先生方から学部開設当時のお話を聞かせていただきたいと思います。

早速ですが、村川先生、当時入試主任をされていましたが、いかがでしょうか。

村川 僕は大学教員をそもそもやったことがないのに、いきなり入試担当だったので、全然分からないなか、事務職員の方々に本当に助けていただきました。

岡田 安田先生は何かございますか。本学部は、全学の教養体育の推薦母体でもあるので、当時千里山から離れたところから、三浦先生と安田先生に、文学部時代から継続してその中枢を担っていただいていたと思います。当時、大変だったことを教えていただきたいと思います。

安田 実は文学部のときに担当いただいていた先生方がまだ残っていちゃったので、当初は教養体育をその先生方で担当してもらえたというのが、滑り出しとしてはすごくやりやすかったです。その先生方が退職されていかれると、三浦先生が一手に引き受けてくださったので、少し甘えさせていただいたところはあったと思います。当初は思ったほど千里山の方は大変じゃなくて、むしろ堺の方が学生が増えてくるにつれて、いろいろ課題も出てくるようになったように記憶しています。

岡田 堺キャンパスで出てきた課題ということについてお話をしたいんですが、本学部では、他学部と違って学生がFD委員会を組織して、自らが課題解決のために動いたりであるとか、提案をおこなったりという、特徴的なことをしていて、とても面白い取り組みだなという印象がありました。

安田 そこは学生主任の担当範囲でした。FD委員会もそうですし、最初ということでサークルや、さらにはキャンパス祭と統一学園祭の実行委員会など、全てゼロスタートで立ち上げないといけませんでした。最初の1年間は1年次生しかいないから、全部1年次生がやるわけです。単独キャンパスのため先輩がいないから、1年次生はそのロールモデルがなくて、高校4年生みたいな感じで、全部高等学校のときの経験に基づいてしか動けませんでした。それを「大学ってこういう感じや」とか、「こういう感じでちょっと視野を広げて考えましょう」とかっていうことをいっぱいやったのを覚えています。特に、事務局の皆さんに奔走していただいて、新設団体をいきなり準登録団体に登録してもらってこ

とになりました。千里山の準登録団体は、活動実績があって、申請して認めてもらう形なんです。堺の場合は立ち上げのときから準登録団体にしようという特例をつくってもらえたりしたことで、新しい学部ができるんだということを実感させられました。学生たちは自ら動かないので、「自分らで学校をつくるんやで」「新しい学校をつくってんねんで」というのを、何十回、何百回となく言いました。それでみんな結構熱くなっていろいろやりました。J-GREEN堺（堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター。以下「J-GREEN堺」）を借りて運動会をやったりしました。伝統にはなりませんが、いろんな新しいチャレンジをやったのを覚えています。やんちゃくれな学生がいっぱいいて、運動会でも大いに盛り上げてくれたのを覚えています。

岡田 本当に立て看板を1つ作るにしても、事務職員の方が手取り足取り、学生に塗る方や木の立て方などを一から教えてくださっていて、本当にゼロから、学生と教職員が一体となっている感じでした。最初の1、2年の頃だったと思うんですが、先生方からカンパというか、寄付をもらってTシャツを作ったりとか、クリスマスツリーを買いに行ったりしたことがありました。

三浦 僕も学生と一緒に買いに行きました。

岡田 千里山とか、ほかのキャンパスに比べて少し見劣りするところを「みんなで盛り上げよう」としていたことが思い出として残ってます。

2代目学部長として狭間先生に就任をいただいたわけですが、竹内先生から引き継がれて、いいところも悪いところもいろいろとあったと思いますが、いかがでしょうか。

狭間 それは大変でしたよ。大学院を設置するというのがミッションだと思っていましたから、どうやってそれを設置していくのかということです。いぶん苦労いたしました。ただ、今から思えば、それはそれなりに充実していた時期だったのかなと思います。

▶キャンパスについて

岡田 本学部は体育会活動をしている学生、スポーツに関心のある学生が3分の2はいるわけで

す。しかし、堺キャンパスでは競技場が少ないということで、開設当初から本当に苦労したと思います。その一例としてJ-GREEN堺に1限と2限とを続けて体育の授業を配置し、朝早くから学生を集めて2コマ連続で授業を行って、またキャンパスに帰って来るとか、さまざまな工夫をしながらスポーツ活動ができるように環境を整備してきました。学生は千里山で体育会や課外活動があるので、事務局とも相談しながら、キャンパス間にバスの定期便を運行していたりとか、法人にも理解いただいて支援をしていただいているものはあるものの、学生に負担をかけているところもあったかと思います。そのあたりで何かご苦労というか、思い出も含めて教えていただきたいと思います。

安田 最初は、千里山で土曜日に実技の授業を開講させてもらい、移動の交通費を精算する方法をとっていて、これは1人ずつの交通費計算がとんでもなく煩雑だったので、その後、貸し切りバスを使って堺浜にあるJ-GREEN堺に行き授業を行う形に移行したと思います。

岡田 最初はそうでしたね。

安田 土曜日に実技の授業を集中させて、学生には自分たちで千里山へ行って授業を受けてもらうという形で1年目はやってみたんですが、交通費をみんなに返金する手続きが本当に大変でした。J-GREEN堺に、行って帰ってくる学生は大変でしたが、それはそれで運用できていたと思っていたんですけどね、どうしてやめてしまったんでしょうか。

三浦 当初のカリキュラムでは、「実技は全部千里山で」という想定で科目を構成していましたが、交通費や電車利用での移動時間に課題があり無理だということで、結局それができなくなって、今の堺にある施設で何とかしようという方法に変わってきたというのが大きな流れでした。そのなかでJ-GREEN堺の利用という案が出てきました。当初、堺キャンパスのEvergreen（広場）は、ただの憩いの場という位置づけでしたが、それを教場にするというような方向づけに変わってきたということです。開学の際も工事をやりながら授業を進めていたので、大変苦労したのは、皆さんご存じだ

と思うのですが、カリキュラムの面でも、種々不具合が出てきて、何年か後にまでいろんなことを修正していかなければならないという課題が、開学当初からありましたね。

岡田 Evergreenもマークを付けるようにして、狭いながらも何とか体を動かしながら、教員を目指す学生が指導法について理解が進められるようにと、先生方にいろいろ工夫していただきながら、授業を行ってきました。また、プロジェクトアドベンチャー（プロジェクトアドベンチャー社製の体験学習施設。以下「PA」）の傍らにもフィールドを取っていますが、あれは何メートル走が取れるんですでしたか。

安田 50mです。

三浦 50mですか。でも、トラックがなくて、リレーをするのにカーブを描けないという、そんな課題がいまだにあるんです。PAについては、開学するときに「千里山で全部実技をするんだから、千里山にないものをつくろう」という感覚でした。僕は文学部で在外研究に1年間行かせてもらったときに、PAについてのビデオや論文資料をたくさん持っていたんですよ。それを安部先生に「こんな施設なんですよ」と見せたところ、「これは単なるフィールドアスレチックスじゃないのか」と言われたんですが、「まあこの論文とこのビデオを見てくれ」と見てもらったら、2、3日して電話がかかってきて「いいじゃないか」という話になったことを覚えています。

狭間 結局、開学当初からのグラウンド問題がおそらく今も続いていると思うんですが、やはり本学部の最大の課題でしょう。どうすればいいか、こうすればいいかと、その都度ごとにいろんなアイデアは出てくるのですが、根本的に解決していないというのが現状だと思うんです。これを何とかしたいですね。

安田 そうですね。

三浦 将来構想検討委員会で検討していただきたいですね。

岡田 もともと堺市立の商業高校の跡地をそのまま活用して第1学年を迎えたので、工事も終了していないところで、食堂もありませんでした。

竹内 あのときはそれは大変でした。偽装マン

ション事件とかいうのが社会問題になっている中、それこそ4月に開学して、キャンパスが予定地の堺キャンパスではなくて、仮住まいで天六キャンパスを使用することになるのはまずいんじゃないかと思っていました。そうしたら、突貫工事でとにかく堺で開学することになった。そんなことで本当にちゃんとキャンパスができるかなと心配していたら、工事にものすごい人数を投入したみたいで、本当に限られた時間で整備が進みました。

岡田 完成年に向けて整備をしていくなかで、学生のためのアメニティも整備をしていったという状況でしたね。

▶地域連携事業について

岡田 話題を変えたいと思いますが、本学部は開学当初から堺市との地域連携事業を進めており、先生方はそれぞれに堺市との協働連携事業に取り組んでいただいていると思いますが、思い出等あれば、お話いただきたいと思います。

安田 「大和川水辺の楽校」っていうのがあって、これは浅香山校区自治連合会の会長さんのところへあいさつに行った時に、向こうからお話を聞いたのがきっかけで、私が「水辺の楽校」の運営委員会へ行くようになりました。そこからものすごく人脈が広がって、学生たちが勉強させてもらえるフィールドが増えたんです。色々なつながりができて、いまだにそこからのつながりが続いています。

岡田 今年はコロナ禍でできませんでしたが、地域連携事業の一環で、8月1日におこなわれる

住吉大社の神輿渡御でおみこしを学生が担ぐんです。堺市役所の方からも堺市民の方からもこうした取り組みに対して一定の評価をいただいていると感じています。なかなか体育会の学生は、学部の事業としての取り組みに参加する機会が無いなかで、地域連携事業という位置づけで行事に参加するというのは、他学部ではない取り組みで、うちの学部らしい、いい取り組みだと思います。

安田 私もいい取り組みだと思います。おみこしを学生が担いで、堺のなかの古い街をずっと歩いていくでしょう。沿道のおうちやお店の人たちはおみこしを通る間、みんな表へ出るんです。お接待を出してくれるおうちとかもあって。普段はおうちへ引っ込んでいるような超高齢のおじいちゃん、おばあちゃんたちも沿道へ出てきて、学生たちが担いでのおみこしをみんな拝むんですよ。ご神体ですからね。運動部の学生たちはそうやって、最初はこう「力が強いから担いでんねん」みたいな感じで担いでいるんですが、沿道で拝まれているとね、だんだん、「ああ、神さん担いでるんや」というふうに気持ちが変わっていく。一生懸命やろうっていう感じに変わっていくのが、それがもう手に取るように分かって、とてもいいと思いますね。

岡田 ほかに地域連携事業についてご披露いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

村川 最初はそれほど事業も活発ではなかったのですが、安田先生の「水辺の楽校」から、「田辺のエコツアー（熊野本宮子どもエコツアー）」は、今までずっと続いていて、それだけ発展してきたという実感はとてもあります。地域とかかわりながら学ぶことを重視していて、学部としても学生も教員もみんなが考えてるから続けられているんだと思います。

岡田 そうですね。堺の先生方が、学生も含めて本当にその連携事業のミッションを時間も関係なしに一生懸命やってくださるところは、本当に千里山とか高槻とかミューズとは違った教員文化があるなとつくづく思います。最初に竹内先生がおっしゃったような、



「みんなで一緒につくろう」みたいなところが根本にあって、それがそれぞれの活動、取り組みにももちろん大きく反映されていて、そこが他のキャンパスと色が違うなとものすごく感じる場所ではあります。

安田 今学生が学ぶべきことが、地域社会にはたくさんあるということだと思います。いい場所を提供してもらっていることで、いろいろな方々と関係が広がっていきませんが、地域連携を目的、目標にしてやったことはおそらく一度もありません。結果として、地域の方々と関係性がよくなっていくということで学生の学ぶ場が広がっていったらいいと思います。だから、どうしても手狭なキャンパスでは教員も自分の還元すべき内容が学生たちに伝授しきれないから、熱心に学生との活動の場を外へ広げているんだと思います。

▶「こころ」「からだ」「くらし」について

岡田 人間健康学部の教育内容についてですが、スポーツと福祉とそれをつなぐユーモアというかたちで、それは他学部とはまた変わったというか、違いというか、持ち味というか、特長であると思います。開学当初、一生懸命に理念の実現に向けて先生方が教育活動に取り組んでこられたと思うんですが、今後についても含めてお話ししたいと思っています。

村川 開学当初、オープンキャンパスなどで入試説明をしているときに、客員教授をしていたホスピタル・クラウン（病院などで心のケアをするために、専門の教育を受けた道化師）の大棟（耕介）（日本ホスピタルクラウン協会理事長）さんの映像を毎回流していたんです。あれは学生以上に親御さんにインパクトが大きくて、道化師というユーモアを福祉やスポーツとつなぐというかたちでやっているのが良かったと思ったことがあります。一回、僕自身が何かほろっときて竹内先生に「泣いてるやろ」って言われたことがあったんですが、何かそういう温かいものが真ん中にあって、スポーツと福祉をつなぐようなものが開学当初からできたのは、「ユーモア」という存在が大きかったですね。木村先生が途中で亡くなられてしまったこ

とで、逆に僕らのなかでは大事にしていけないといけないとしっかり認識しました。また、当時の学部長のユーモアも大きかったと思います。教授会でもユーモアをきかせた話をされていて、あのユーモアに僕は学ばせていただいたのかなと思います。

岡田 健康というキーワードを置くなかで、その健康というのが単に身体的な健康というだけではなくて、当時「こころ」「からだ」「くらし」というキーワードを使いながら理念を掲げて、その下にカリキュラムをぶら下げていくというかたちで出発しました。10年経った今、将来構想検討委員会が村川現学部長のもとで立ち上げられましたが、ビジョンやこれまで培ってきた教育内容を踏まえて、これからの未来をイメージするものがあれば、教えてください。

村川 10年、正直言って成功というか、うまくやってきたと思います。最初、2008年に着任していきなり何も分からないところで学部の立ち上げという仕事に取り組みました。そのなかで竹内先生が学部長としていらっしゃったおかげで、その大きな保護のなかで僕は与えられた役割を自由にさせていただくことができました。その自由のなかで「こういうことをやりたい」ということをこの10年育んできたと思います。それを具現化できた部分もあるし、できていない部分もある。この10年をやってきたからこそ、今かたちにできるものがだいたい見えてきたというふうにも思います。メンバーもだんだん変わってきて、次のメンバーになっていったときにそれをうまく形にしていくことで、あと10年だけではなく、もっと先に何かこの学部がやっていけるものがつくれる、そういう実感があります。その土台を最初に築いていただいたことは、今振り返って、すごくありがたかったと思います。

狭間 「こころ」「からだ」「くらし」という、本学部のキーワードというか、キー概念は、つないでいってほしいと本当に思います。私は英文表記で人間健康学部を何というかというのを毎年、「テストで出すから」と言って学生に聞いているんです。「Health and Well-being」というその言葉ですが、理念としてすごくいい言葉を

選んだと思います。

安田 本当に当時はそれほどじっくりきてなかったのですが、育ってきた感じがしますね。

狭間 そう、すごくいい言葉だなんて今は思っています。そういうところでこれからの将来構想を考えてもらえたらうれしいなと思います。

最初のころにスポーツの先生方がね、「うちにはアスリートを養成する学部じゃない」とおっしゃっていて、私もそれを聞いていたので、高校生対象のオープンキャンパスの相談コーナーでも、そういう話をしていました。「じゃあ、アスリートを養成する学部じゃないんだったら、どういう学部なの。」っていうところが、きっちり説明できるようにならないといけないと思うんです。だから、ある意味、安田先生たちがされていることから言うと、「地域に根付いた何とか何とか」や「コミュニティベース何とか何とか」とか、そういう学部を目指しておられるのかなと思っているんですが、先生方はどのようにお考えでしょうか。アスリートを養成する学部じゃないけれども、スポーツコースとして、何を養成する、誰を養成する学部というふうに考えられているのかというのは、改めてお聞きしたいですね。

村川 本学部に入學するような学生たちは、竹内先生も最初におっしゃったように、みんなあいさつしてくれるし、いい子たちなのです。それはスポーツを通して、そういう所作を身に付けてきているんだと思うんです。いろんな人たちとコミュニケーションをとったり、一緒に何かをしたりするための下地ができている学生たちが来てくれる。その学生たちが、スポーツじゃない分野でどう今まで培ってきた力を役立てていけるのか、社会に出て何をするのかを考えたときに、頑張っってスポーツをするのは高校までで十分やりきったと、そこからどうするかというときの、その活躍できる場のいろんな材料というか、可能性を、特に地域での活動のなかに見いだしていこうというのをこの10年、僕らはやってきたと思うんです。

狭間 それを、キャッチフレーズみたいに言える言葉があると、すごく分かりやすくなると思います。だから、先生たちはそういうことに

ずっと取り組んでこられたのではないかなと思うんです。

村川 PAとかああいうツールを使いながら、それらを行ってきました。社会人基礎力や、SDGs、そういうある程度社会的に認められているようなものに結び付けようと、これまでいろいろ行ってきました。でも先生がおっしゃるように、何か本学部独自のフレーズというのがまだ見いだせていないんです。

狭間 それができると、対外的にアピールができますね。

岡田 開設当時、同時期に他大学でもスポーツ系の学部ができる中で、どう差別化するのかという話は学部の設置準備のなかでも議論されたと思います。健康というものをキーワードに保健体育科の教員免許も出しながら、どう教育内容をつくり上げていくかというのは確かにずっと課題としてあって、さらに、それをどう実現するかというところが一番の課題でもあるんですが、そのあたりを安田先生お願いします。

安田 他大学と比べたら、本学部の特殊性がとてもよくわかると思うんです。やはりスポーツ科学の専門家が集まってつくったスポーツ科学系の学部っていうのは、やれることは大変シンプルで、どうやったら上手になるのかとか、どうやったら強くなるのかということに集約されます。また、健康科学系では、身体的な健康がどういうふうに増進できるかを探究します。しかし本学部は身体的健康というよりは、社会的なものであったり、何かそういうところを向いているんです。ちょうど自分の子どもがそれぐらいの年代で、受験の話がたくさん入ってくるんですが、スポーツを高校で頑張っていた人たちが私立文系の大学を目指すようになったときに、関西学院と同志社と立命館、3つの大学は並べて検討するけど、関大は入らないんだそうです。そういう人たちは関大には行かないって言うんです。逆に関大しか受けないっていう人と、どちらかに分かれるんですよ。

結局、自分がプレーヤーを続けたいとか、トレーナーになりたいとか、狭い意味でのスポーツの世界を想像している高校生は、うち以外の3つの大学を選ぶんです。関大に行きたい高校生

はなぜ行きたいかという、「むっちゃ楽しそうやから」というんです。スポーツを続けるとか、スポーツの世界に就職したいとかというのはない人たちはうちを目指すみたいですね。それで狭間先生がおっしゃるように、そこでプラス「あそこへ行ったらこんなになれるで」というのがあったら、また違う層が掘り起こせるんだろうなと思います。とにかく学生が若者らしいというか、生き生きしているというのは、同じタイプのよその大学の学部にはおそらくないことだと思います。

岡田 スポーツ系学部といえば、クリエイティブな学びが少ない印象ですが、本学部は地域連携事業のおかげもあって、「自分たちが何か考えて、動いて、学ぶ」というところが教育内容に入っていて、それが「楽しそう」というイメージにつながるのだと思います。実際、学生が活発に動きますからね。また、それが彼らにとっての主体的な楽しみというか、そういうところの理解につながるのかなと思います。それが本学部の強みであるのであれば、やはりこれからの10年に向けて将来構想を考えるとときにも、何か生かしたかたちでいろんな制度設計ができればいいと思います。

岡田 それでは、最後に竹内先生に人間健康学部に関心を持っていただくことを伝えていただきたいと思います。

竹内 10周年は確かにおめでたいし、これまでの成果の一定の証明になったと思います。「ひとつの学部が一人前になるのは25年経たないといけない」という説を、僕が社会学部に在籍していたときに年配の先生が言ったことがあるんです。その時にその理由は聞いてはいないけど、たぶん卒業生が社会的に中堅になった年回りじゃないですか。社会的に染み渡っていくという感じを意味しているのかなと思います。だから、10周年は確かにおめでたいのですが、これを契機に次は25周年あたりを目指して、これからやるべきことを考えていく。この10周年をその契機にしたらいんじゃないかなと思います。

岡田 ありがとうございます。またこれを機

に、竹内先生のお言葉にもありましたが、村川学部長の主導のもと、25周年に向けて、学部の教育内容のみならず、さまざまな改革に向けて将来構想の検討を進めていながら、教員と事務職員が一致団結して新しいことに取り組んでいきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

<於：校友・父母会館3階 理事会議室 2020年11月6日>

人間健康学部の教育・研究・社会貢献 (地域連携)

◆教育

三つのポリシー（教育に関する三つの方針）

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

人間健康学部では、学位授与の方針および教育課程編成・実施の方針に基づく教育を受けることのできる者として、様々な入試制度を通じて、次に掲げる知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力および主体的な態度を備えた入学者を広く受け入れます。

- 1 人間の心身の健康に関する積極的関心およびそれを科学的に展開するための基礎学力を有している。
- 2 社会に関心をもち、幅広い教養と実践能力を兼ね備えた関西大学が推奨する判断力と行動力を融合した「考動力」の基盤を有している。
- 3 「スポーツと健康コース」では、スポーツや健康に興味関心をもち、スポーツ活動を通しての人間形成やコミュニティの再生、あるいは新たな人間の健康のあり方を探り、地域において活躍したいという意欲がある。
- 4 「福祉と健康コース」では、福祉と健康に興味関心をもち、これまでの社会福祉のあり方や実践を、人間の生活環境と健康の関係からとらえることができるとともに、地域コミュニティにおける福祉文化の構築および醸成に、積極的に貢献したいという意欲がある。

教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

人間健康学部（以下、「本学部」という）では、「学の実化（学理と実際との調和）」の理念のもと、学位授与の方針に掲げる目標を達成するために次の点を踏まえた教育課程を編成します。

1 教育内容

（1）教養教育

- ア 体験学習を取り入れた少人数教育（「スタディスキルゼミ」）を用いて、学習態度の醸成とコミュニケーションスキルの獲得を目指す。
- イ 社会で活躍するために必要な広い知識・視野と柔軟な思考を育成するために、共通教養教育として自己形成科目群や実践科目群等を配置し、総合的な人間力を養う。
- ウ 異文化を理解し、異なる意見を持つ人々の立場に立って考えることができる能力、および外国語によるコミュニケーション力を育成する。

（2）専門教育

- ア 人間健康学の体系的な知識を幅広く学ぶ「基礎科目」を通して、専門的な学びへの転換を図る。
- イ 2年次からは「スポーツと健康コース」または「福祉と健康コース」に所属し、さらに専門性を深め、総合的なアプローチの視点を身につけるための「応用科目」（各コース共通、各コース別）を置く。また2コースを有機的に連携させることを目的とした「連携科目」を置き、実践的な学びを深める。
- ウ 健康と「笑い」の関係について、学際的にアプローチする「ユーモア学プログラム」を置き、人間の健康を多角的にとらえることを学ぶ。
- エ 上記科目で学び得たものを実際の研究テーマとして設定し、少人数指導によりきめ細かい指導のもとに課題を探究する「演習科目」、専門資格取得のための「選択科目」および「自由科目」に分けられ、基礎から応用への学びが連続する段階的な教育体系としている。

オ 本学部の教育の要であり、必修となっている「演習科目」では、導入演習（1年次）、基礎演習（2年次）、専門演習（3年次）、卒業演習（4年次）を設置し、アカデミックスキルの獲得から専門性の応用まで、一貫した少人数指導を行っている。4年次の卒業演習においては、卒業論文もしくは卒業研究のいずれかを課題とし、学生の個別の研究テーマにもとづく論文指導や卒業制作、研究発表のための指導を行う。

2 教育評価

- （1）専門演習および卒業演習への円滑な移行を図ることを目的とし、各セメスター終了時には必修科目および語学教育の科目を中心に単位修得状況を確認する。
- （2）4年間の学修成果は、卒業演習および卒業論文または卒業研究によって行う。本学の評価基準を満たしたものを合格とする。

卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

人間健康学部では、人間が幸福かつ豊かに生活できるよう、健康の維持や増進を図るために人間の健康（health）と健幸（well-being）にかかわる基礎理論と実践的なアプローチを学び、それを基盤として、地域コミュニティにおいて健康支援や生活支援の実践に携わることができる人材養成教育を推進します。すなわち、実際の社会とのつながりを密にした、総合的な人間の健康と健幸に関する高い専門性を持つ人材として、下記の力を身につけた人物に対して学位（健康学）を授与します。

1（知識・技能）

広い知識・視野と柔軟な思考を基盤に、健康の維持や増進を図る人間健康学に関する専門知識・技能を習得し、それを実践することができる。

2（思考力・判断力・表現力等の能力）

円滑なコミュニケーション能力と将来を構想する力を持ち、関西大学が推奨する判断力と行動力を融合した「考動力」全般を身につけ、社会や他者のために、人間健康学にかかる専門性を基盤とした責任ある行動をとることができる。

3（主体的な態度）

社会とのつながりのなかで自ら課題を探究し、実践において他者と共感しながら協働することができる。

カリキュラムの変遷

2010年度

健康に関する幅広い知識を地域と連携しながら実践的に学びます。

人間健康学部では、人間健康学の体系的なカリキュラムのもと、各コースがそれぞれの特色に合わせた学びを提供します。また、コース共通科目を設定することにより、健康に関する多様なアプローチをもち、「基本構想力」「課題探究力」「協調力」「専門応用力」の調和する総合的な人間力を兼ね備え、社会の幅広い分野において活躍できる人材を育成します。

1年次

学部に通ずる基礎的な科目、およびさまざまな専門領域の教員がリレー方式で行う人間健康学に関する授業を受講して、基本的知識の習得ができます。

2年次

2年次秋学期に各コースに分属*

スポーツと健康コース 福祉と健康コース

体系的に人間健康学を学ぶための応用科目を受講するとともに、興味関心に沿ったコースを選択し、少人数制による指導を受けることにより、実践的な能力が習得できます。

3年次

自分の興味に合わせて研究テーマを設定し、卒業研究でしっかり掘り下げることができます。さらに学際性、実践性の高い専門科目、資格取得をめざすための科目も受講することができます。

4年次

卒業・大学院進学

* 人間健康学部の入学定員は300名となっており、学部一括で入学し、2年次秋学期に各コースに分かれることになります。ただし、「福祉と健康コース」については最大受け入れ人数が80名のため、希望者が受け入れ人数を上回る場合は、2年次春学期に1年次の全科目の成績をもとにコース選択を行う可能性があります。

	1年次	2年次	3年次	4年次
全学共通科目 （総合的な人間力を養うための基盤となる教養を身につける科目）	スタディスキルを身につける 基礎体育学Ⅰ・Ⅱ 哲学を学ぶ 日本文学を学ぶ 心理学を学ぶ 社会学入門 日本国憲法 基礎からの情報処理 食べ物を科学する 日本の文化と人間を考える キャリアデザインⅠ（働くこと） インターンシップ（ビジネス） 学校インターンシップ（ステージ1）・（ステージ2）・（ステージ3）	スポーツ研究理論 スポーツ実習 キャリアデザインⅡ（仕事の世界）・Ⅲ（私の仕事）		
外国語科目 （外国語文献の読解やコミュニケーションスキルを身につける科目）	英語Ⅰa・Ⅰb 上級外国語（英語Ⅰa・Ⅰb） ドイツ語Ⅰa・Ⅰb フランス語Ⅰa・Ⅰb ロシア語Ⅰa・Ⅰb スペイン語Ⅰa・Ⅰb 中国語Ⅰa・Ⅰb 朝鮮語Ⅰa・Ⅰb 海外研修（各セミナー）	英語Ⅱa・Ⅱb 上級外国語（英語Ⅱa・Ⅱb） ドイツ語Ⅱa・Ⅱb フランス語Ⅱa・Ⅱb ロシア語Ⅱa・Ⅱb スペイン語Ⅱa・Ⅱb 中国語Ⅱa・Ⅱb 朝鮮語Ⅱa・Ⅱb 英語Ⅲa・Ⅲb 英語Ⅳa・Ⅳb 上級外国語（英語Ⅲa・Ⅲb） 上級外国語（英語Ⅳa・Ⅳb）		
外国人留学生科目	日本事情Ⅰ・Ⅱ			
導入科目 （人間健康学に関する知識の最初の学びとなる科目）	学びの扉Ⅰ・Ⅱ			
基礎科目 （人間健康学の体系的な知識を幅広く学ぶ科目）	人間健康論 スポーツと健康 健康支援の社会システム 身体文化と健康 身体表現と健康 健康の文化史 こころと健康 健康福祉論 衛生学及び公衆衛生学 臨床死生学 精神生理学 レジャー・レクリエーション論 教育社会学 文化社会学 文化共生学 社会福祉概論 医学一般 社会調査法 コミュニティ論			
応用科目 （専門性を深め、総合的なアプローチの視点を身につけるための科目）		【各コース共通】 〈からだと健康を考える〉 スポーツ原理 スポーツ教育学 スポーツ社会学 スポーツ心理学 スポーツ生理学 スポーツ行政論 運動処方論 スポーツと安全教育 体力科学 〈こころと健康を考える〉 身体教育学 子どもの発達と心理学 身心相関論 身体表現論 現代スポーツとオリンピズム 武道論 身体文化の人類学 学びの身体技法 ユーモアの思想史 ユーモア科学 笑いの文明史 笑いの人類学 ユーモアコミュニケーション論 ユーモアの社会学 精神医学 心身医学 行動進化論 〈くらしと健康を考える〉 ボランティア活動論 リハビリテーション論 ホスピスケア フィールド調査法 子育て支援論 福祉レクリエーション論 【スポーツと健康コース】 スポーツ運動学 スポーツ経営学 学校保健 救急安全法 コーチング論 スポーツ文化論 スポーツ動作の仕組みと制御 【福祉と健康コース】 社会福祉政策Ⅰ 社会福祉政策Ⅱ ソーシャルワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 高齢者福祉論 子ども家庭福祉論 福祉行政と福祉計画 社会福祉経営論 障害者福祉論 公的扶助論 【連携科目】 テーマ研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	【各コース共通】 〈からだと健康を考える〉 スポーツ栄養学 臨床バイオフィードバック 〈こころと健康を考える〉 身体文化論 舞踊文化論 【スポーツと健康コース】 スポーツ方法学 スポーツ医学 生涯スポーツ論 スポーツと感性 地域スポーツデザイン論 レクリエーション支援論 【福祉と健康コース】 地域福祉論Ⅰ・Ⅱ 社会福祉協議会活動論 社会福祉調査法	
演習科目	講義科目で学び得たものを実際の研究として設定し、少人数指導によりきめ細かい指導のもとにテーマを探究する科目	基礎演習	専門演習Ⅱ 専門演習Ⅲ	卒業演習Ⅱ 卒業論文 卒業演習Ⅲ 卒業研究
選択科目 （専門資格取得のための科目）	スポーツ方法実習Ⅰ（陸上競技） スポーツ方法実習Ⅱ（水泳） スポーツ方法実習Ⅲ（器械体操） スポーツ方法実習Ⅳ（武道1） スポーツ方法実習Ⅴ（武道2） スポーツ方法実習Ⅵ（格技） スポーツ方法実習Ⅶ（ダンス） スポーツ方法実習Ⅷ（球技1） スポーツ方法実習Ⅷ（球技2） スポーツ方法実習Ⅸ（野外活動1） スポーツ方法実習Ⅹ（野外活動2） 健康運動実習	トレーニング演習 コンディショニング演習 地域スポーツ演習 エコソリズム演習 相談援助演習Ⅰa 相談援助演習Ⅰb 福祉実習指導Ⅰa 福祉実習指導Ⅰb	医療福祉 雇用政策 司法福祉 ソーシャルワークⅤ・Ⅵ 社会保障論Ⅰ・Ⅱ 権利擁護と成年後見制度 介護概論 相談援助演習Ⅱ 福祉実習指導Ⅱ 相談援助実習Ⅰ・Ⅱ	相談援助演習Ⅲ
自由科目 （専門資格取得のための科目）	教職概説 教育原理	教育制度論 人権教育論一部落解放教育を中心として 教育心理学 特別活動論 道徳教育の研究 教育方法・技術論 教育相談論 保健体育科教育法（一） 保健体育科教育法（二） 福祉科教育法（一） 福祉科教育法（二） 学校経営と学校図書館 資料組織概説 図書館資料論 学習指導と学校図書館 読書と豊かな人間性 情報メディアの活用	教育実習（一） カリキュラム開発論 生徒・進路指導論 保健体育科教育法（三） 保健体育科教育法（四）	教育実習（二） 教職実践演習（中等）

2020年度

授業科目での知識の習得を土台に、実践的なフィールドワークを通じて人間の幸福を学びます。

人間健康学部では、人間健康学の体系的なカリキュラムのもと、各コースがそれぞれの特色に合わせた学びを提供します。また、コース共通科目を設定することにより、健康に関する多様なアプローチをもち、「基本構想力」「課題探究力」「協調力」「専門応用力」の調和する総合的な人間力を兼ね備え、社会の幅広い分野において活躍できる人材を育成します。

1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		
基本的知識の習得。		体系的に応用科目を受講。		個人の研究テーマを設定・研究し、卒業論文・卒業研究に取り組む。				
共通教養科目・外国語科目								
専門教育科目	基礎科目							
	応用科目							
	各コース共通科目・連携科目							
	スポーツと健康コース 科目							
	福祉と健康コース 科目							
	ユーモア学プログラム 科目							
	演習科目							
	選択科目・自由科目							
卒業・大学院進学								
共通教養科目	スタディスキルゼミ(各テーマ) プロジェクト学習Ⅰ(各テーマ) 健康・スポーツ科学実習a+b+c 健康・スポーツ科学論 関西大学スポーツ文化論 スポーツ運動学概論 スポーツ社会学概論	スポーツ心理学概論 スポーツ栄養学概論 コーチングの科学 トレーニング科学概論 コンディショニング科学概論 キャリアデザインⅠ (働くこと、生きること)	キャリアデザインⅡ(仕事の世界) キャリアデザインⅢ(私の仕事)	インターンシップ(ビジネス)	プロジェクト学習Ⅱ(各テーマ)			
外国語科目	哲学を学ぶ 日本文学を学ぶ 心理学を学ぶ 社会学入門	日本国憲法 基礎からの情報処理 食を知る 日本の文化と人間を考える	法学を学ぶ 政治学のすすめ 日本の歴史を学ぶ 西洋の歴史を学ぶ	基礎からのマクロ経済学 基礎からのミクロ経済学 確率・統計でものを考える 労働と雇用を考える	ビジネスを学ぶ 数学を学ぶ(各テーマ) 身体運動の人間学 共生社会のライフデザイン	笑いとユーモアを科学する 少子高齢化社会を考える オリンピックの共生思想 堺市と関西大学	学校インターンシップ (学校1)・(学校2)・(学校3) チャレンジ科目(各テーマ)	
外国人留学生科目	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	日本語Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa・Ⅳb	
専門教育科目	基礎科目	人間健康論 スポーツ生理学 スポーツと健康	社会福祉概論 健康支援の社会システム 身体文化と健康	身体表現と健康 健康の文化史 体育史	こころと健康 衛生学及び公衆衛生学 医学一般	社会調査法 当事者福祉論 精神保健福祉論	臨床心理学 救急安全法 社会福祉政策Ⅰ	社会福祉政策Ⅱ 介護概論 ソーシャルワークⅠ
	各コース共通	人間健康論 スポーツ生理学 スポーツと健康	社会福祉概論 健康支援の社会システム 身体文化と健康	身体表現と健康 健康の文化史 体育史	こころと健康 衛生学及び公衆衛生学 医学一般	社会調査法 当事者福祉論 精神保健福祉論	臨床心理学 救急安全法 社会福祉政策Ⅰ	社会福祉政策Ⅱ 介護概論 ソーシャルワークⅠ
	各コース共通	人間健康論 スポーツ生理学 スポーツと健康	社会福祉概論 健康支援の社会システム 身体文化と健康	身体表現と健康 健康の文化史 体育史	こころと健康 衛生学及び公衆衛生学 医学一般	社会調査法 当事者福祉論 精神保健福祉論	臨床心理学 救急安全法 社会福祉政策Ⅰ	社会福祉政策Ⅱ 介護概論 ソーシャルワークⅠ
	健康コースと	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学
	健康福祉と	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学	スポーツ運動学 スポーツ社会学 スポーツ経営学 学校保健 スポーツ感性学
	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム
	連携科目	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム	ユーモア学プログラム
	演習科目	導入演習	基礎演習	基礎演習	基礎演習	基礎演習	基礎演習	基礎演習
	選択科目	スポーツ方法実習Ⅸ(球技2) 寄附講座(各テーマ) 国際健康福祉実習(各テーマ)	スポーツ方法実習Ⅸ(陸上競技) スポーツ方法実習Ⅹ(器械体操) スポーツ方法実習Ⅶ(ダンス) スポーツ方法実習Ⅷ(球技1) 野外教育実習(野外活動) トレーニング実習Ⅰ トレーニング実習Ⅱ 地域スポーツ演習 健康運動実習Ⅰ 健康運動実習Ⅱ	高齢者福祉論 子ども家庭福祉論 福祉行財政と福祉計画 障害者福祉論	公的扶助論 地域福祉論Ⅰ 地域福祉論Ⅱ 医療福祉論	スポーツ方法実習Ⅱ(水泳) スポーツ方法実習Ⅳ(武道1) スポーツ方法実習Ⅴ(武道2) スポーツ方法実習Ⅷ(球技3) スポーツ方法実習Ⅹ(球技4) 実技研究 健康運動指導演習 増健科学演習	相談援助実習Ⅰ 相談援助実習Ⅱ 社会福祉制度研究Ⅰ 相談援助演習Ⅱ 福祉実習指導Ⅱ	相談援助演習Ⅲ 社会福祉制度研究Ⅱ
	自由科目	教職概説 教育原理	教育制度論 人権教育論 教育心理学 特別活動論 連帯教育の理論と方法 教育方法・技術論	教育相談論 保健体育科教育法(一)・(二) 学校経営と学校図書館 情報資源組織論 図書館情報資源概論 学習指導と学校図書館	読書と豊かな人間性 情報メディアの活用	特別支援教育論 カリキュラム開発論 総合的な学習の時間の指導法 生徒・進路指導論 教育実習事前指導 保健体育科教育法(三)・(四)	教育実習(一)・(二) 教職実践演習(中等)	
その他の共通教養科目(グローバル科目群)								

ゼミ活動紹介

地域でとりくむ福祉「共育」

人間健康学部 教授
所 めぐみ

経験することでの学び・ともに学ぶこと

ゼミでは、「地域福祉」をテーマとして、子どもからお年寄りまで、様々な主体が地域課題等に関わる活動を通じてともに学びあい育ちあう地域活動を基盤とした教育・学習について、フィールドワーク、アクションリサーチとしてとりくんでいる。

フィールドワークで継続してお世話になっている地域が和歌山県有田市である。地元の宮原小学校は、かつて大水害により小学生20名を含む多くの尊い命が奪われた経験をした地域にあり、ふるさと教育、防災教育、福祉教育を、地域の力を借りながら丁寧にとりくんでいる。有田市社会福祉協議会がつないで、学校と地域は様々な交流や取り組みを重ねておられる。私たちは、6年生が行う高齢者宅訪問と子どもカフェのとりくみに継続して関わらせていただいている。

自治会の役員や民生委員さんたちの橋渡しで、子どもたちは地域の高齢者宅を数回訪問する。社協職員さんの力を借り、十分な準備をして、人間健康学部の入学以来培ってきている人と関わる力、チームビルディング、アイスブレイク、ファシリテーションスキルなどを大いに発揮する。活動後のふりかえりは、子どもたち、大人たち（学校、地域の役員、民生委員、社協、関大生）で行うが、これまでも子どもたちのふりかえり用のシートを開発し、大人のふりかえりのファシリテーションを担うなどしてきた。報告書の作成と子どもたちや学校、地域への伝達もいろいろな形で工夫して毎年学びながら進めている。

こどもカフェでは、高齢者宅訪問でいっしょだった子どもたちが主体的にカフェを運営し、小さな子どもからお年寄りまで、多くの地域の方のおもてなしをする。子どもたちの成長ぶりに感動する。カフェでは関大企画の時間を持たせて頂き、例えばカフェにお越しのみなさんたちとゲームやクイズを通じて、赤い羽根募金など地域福祉に関わることを楽しく知ることができるようにしている。

コロナ禍にあって

さて新型コロナウイルスのパンデミックは、直接対面で行う活動に様々な制約をもたらした。2020年度、私たちは一度も有田に訪問できていない。しかし、オンライン授業で培った経験は、つながり続けたい、何かできることはしたいという思いの力で生かされることとなった。今年ははじめて有田市の箕島高校の生徒さんたちと、そして宮原小学校の6年生ともオンラインで、交流を行った。かなり準備をしてとりくんだ成果は、のちに届く子どもたちからの声や大人たちからの評価で明らかであった。



子どもカフェ みんなで握手



子どもカフェ 子どもたちといっしょ

顔の見える関係性や直接ふれあうことの多い地域福祉活動は、この感染症のもとでは大きな打撃をうけた。ストップさせないよう、孤立してしまう人たちを何とか支えようとする人たちの静かだが根気あるとりくみ。私たちが学びのテーマとしている福祉教育においても感染した人や感染と最前線で戦っている人々へのいわれなき差別の状況などから、今だからこそ必要なことについても考えた。

舞踊不選人

人間健康学部 教授
原田 純子

『舞踊不選人（ダンスは人を選ばず）』とは、ダンスの経験がなかったゼミ3期生が、舞台に立って堂々と踊る自分たちを誇らしく思い掲げた標語である。

それにしても、人はなぜ踊るのだろうか？ Dance（ダンス）の語源は“Desire of Life”と言われており、われわれが踊るのは生命（いのち）の欲求であると考えられている。また、アフリカのアシャンティ族の人々は、なぜ踊るのかを問われ、“石ではないから”と答えたそうだ¹⁾。「人は皆、踊りたい欲求を持ち、石ではないから踊るのだ！」—そう言って、ゼミに入った学生の多くが生まれて初めて舞台に立ち、“踊る”経験をする。ゼミ生にとっては“まさか大学生になって、舞台上でダンスを踊るなんて…”というのが正直な感想だろう。

私のゼミー身体表現ゼミは、“共創と協同”を掲げ、2013年度（1期生の卒業年度）より卒業研究として「創作舞踊公演」の制作に取り組んでいる。専門演習（3年次）はその準備期間と考え、自己アピールや書籍紹介のプレゼンテーションから始まり、グループでのダンス創作、ゼミ・イベントの企画等、表現力や創造力を磨くことに注力する。3年次の後半になると、公演での作品創作に向けてテーマ探しを始める。新聞や書物、各自が気になる身の周りの出来事や社会問題に目を向け、それぞれの感性で捉えたテーマを深めていく。これまでに上げられたテーマは、自分たちの関係性や社会における人と人との繋がりを問うものが多かったように思う。例えば、『NOWADAYS-現在（いま）が「今」でない現在（いま）』（3期生）、『築くべきもの』（5期生）、『わ・和・輪－確かな・つながりを・探す・僕ら』（6期生）などの作品はいずれも、昨今希薄になってきたわれわれの関係性を問い、彼らなりに答えを出して20分程度の群舞に仕上げたものだ。これらのテーマを通して学生たちは、自他と対峙し、自らが生きる社会について考える。また練習の過程においては、本音で仲間と意見を戦わせ涙することもしばしばである。それでも本番は晴れやかに、自信に満ちた顔で舞台に立つ。皆の気持ちが一つになり、“魔法の空間”が生まれる。おそらくこれは、経験した者にしか分からない感覚であろう。

このような舞台制作の共創を通して学生たちが学び、得ることは何であろう。物事をイメージして深める力、動きや空間構成を生み出す創造性、仲間を慮る心、慣れない動きを繰り返し練習する我慢と根気、自己主張と協調のさじ加減、学内外の人々との多様なコミュニケーション、テーマと自己を表現する力、やり遂げる強い精神力と体力、ひとつのことを仲間と達成する喜び、そして自信から生まれる最高の笑顔等々…。『舞踊不選人』が実感として彼ら・彼女らの心身に刻まれる。

舞台公演は2017年度から地域の高齢者を巻き込み、よりインクルーシブなものへと深化し、踊る人々の裾野を広げている。



『NOWADAYS-現在（いま）が「今」でない現在（いま）』（3期生/2015）より

1) ジェラルド・ジョナス、田中祥子・山口順子訳（2000）. 世界のダンス—民族の踊り、その歴史と文化—, 大修館書店：p.33.

実践的視点から福祉問題を読み解く

人間健康学部 准教授
福田 公教

本ゼミは、2014年度に私が人間健康学部に着任してから募集されたことにより、ゼミ1期生は、人間健康学部3期生であった。どのような教員が担当するのか詳しくわからないゼミに23人のゼミ生が集まってくれて、驚きとともに嬉しさと責任を感じたのを思い出す。今振り返ると学部草創期のメンバーらしく、何でも挑戦して楽しんでやろうという雰囲気を持った学生たちで、彼らと作ったゼミの姿がその後の本ゼミの基調になったと思う。

とりわけ彼らの挑戦で大きな経験となったのは、インドネシア・バリ島の児童養護施設でのワークキャンプである。これは、現在の国際健康福祉実習（インドネシア）の原型ともいえる活動で、多様な個性を持つゼミ生が力を合わせて、インドネシアの子どものために活動することができた。

このようにみんなで力を合わせて、誰かのために活動する精神は、ゼミの2期生以降にも受け継が



れ、また、3年次生と4年次生が協力して、活動することが多くなることとなったと思われる。また、自分の世界を広げるために海外へのエクスカージョンを毎年行ってきた。インドネシア、台湾、韓国を訪問し、それぞれの国の大学生と交流したり、福祉問題を実地で見たりすることを重視してきたのである。

その他の活動のうち、主なものを以下に挙げてみた。

- ・オープンキャンパスにおける体験学習コーナー担当
- ・韓国、慶南大学の学生との交流会の企画・実施
- ・第12回ファミリーホーム全国研究大会 in OsakaにおけるYouth Programの企画・実施
- ・「自由研究フェスティバル in 関西大学」の企画・実施
- ・堺シティマラソンでの里親募集の啓発活動

これらの事業の実施に当たっては、普段関わることのない人たちとの交流、事業の企画・実施の準備、人前に立つことや関係者との交渉など、多様なコミュニケーションの機会を得ることとなる。そのプロセスでは、偶然集まったゼミ生が交流し、お互いの持ち味を理解し、ゼミのメンバー間の仲が深まり、チームとなり課題を達成していくこととなる。

ゼミの募集に当たっては、研究対象を特に限定せずに、私も一緒に彼らと研究を深めていくこととしている。最終的には、多様な実践活動を契機として浮かびあがってくるそれぞれの研究課題を卒業論文にまとめていくのである。これらの一連の経験が、ゼミ生が社会で活躍する土台となることを願っている。



グローバルな視点とローカルな活動で実践知を育む

人間健康学部 教授

村川 治彦

村川ゼミではこれまで、熊野本宮子どもエコツアーや、堺での子どもの遊び場づくり、国際運動会、防災運動会、浅香山のコミュニティづくりなどに取り組んできた。ゼミの学生たちは、高校時代や大学に入ってから様々な経験を積んでいるが、それらを通して培ってきた能力を、卒業後社会のいろいろな分野で生かせる実践知あるいは社会人基礎力へと一般化することを目標に掲げ、これらの活動に取り組んでいる。



これらの活動は、身体を動かすことが大好きな人間健康学部の学生の特徴を生かしながら、彼らの興味関心と社会の課題を結びつけるところから生まれた。例えば、子どもたちとの関わりを求める教職志望の学生たちは、空き地や広場で遊ぶことが減ってしまった子どもたちのために、身体を動かして遊ぶ楽しさを体験してもらおうと「新しい遊びの場」を始めた。消防士を目指す学生たちは、地域で防災訓練への参加率が低いことを知って、地域の人々が楽しく参加できるように防災の要素を取り入れたユニークな防災運動会を作り上げた。また異文化交流に関心のある学生たちは、千里山と離れた



た堺キャンパスでは留学生との交流の機会が少ないことから、言葉が通じなくても仲良くなれることを実感できる国際交流運動会を毎年実施している。これといって目標のない学生は、毎夏ゼミの総力をあげて取り組んでいる熊野本宮子どもエコツアーに参加し、子どもたちと3泊4日と一緒に過ごすことで、自分たちのあり方が子どもたちの成長につながることを実感し、自らも成長していく。

いずれの活動も、学生たちが企画の発案から、大学や行政、地域の方々との交渉、参加者の募集まで自主的に取り組むことで、プロジェクトを実践する経験を積んでいく。PDCAサイクルを回し、KPTシートで振り返りを重ねることで、失敗や課題を次の実践の糧に結びつける。もちろん最初からうまくいくわけではない。子どもが思うように集まらず苦勞したこともあった。自分たちの代で上手くいかない時には次の世代に引き継ぐことで、継続的に地域の人たちに提供できるプロジェクトに作り込んでいった。

2018年からはこれらの取り組みにSDGsの学びを取り入れることで、それぞれが関心をもつ課題が互いに結びつくことに気づくようになった。このコロナの時代にも自分たちができることを求めて、熊野で学んだ畑作りを堺キャンパスでも始め、NPO法人kokoimaのメンバーさんなど地域の方々と一緒に作物を育てることを通して、新たなつながりを経験している。そこから米国カリフォルニア州のバークレー市で始まった食と農を通じた新たな教育方法「エディブル・スクール・ヤード」を取り入れようとしている。グローバルに繋がりながら地域の子どものや障がい者の方々と一緒に持続可能な地球のあり方を学ぶ新たな場作りを模索する学生たちは、コロナの時代にも学びを止めることはない。



合言葉はイノベーション!

人間健康学部 教授
森 仁志

本ゼミでは、イノベーションを合言葉に、デザイン・シンキングの手法を用いて実社会の課題に取り組んできた。これまでの10年を振り返って、卒業生たちの活動成果をいくつか紹介してみたい。

まず1期生は、ゼミに岡山県出身の学生がいたことをきっかけに、地域活性化の企画力を競う「岡山まちの夢学生アイデアコンテスト」に参加した。学生たちは現地で地元の商店主や同県を訪れる観光客を対象に調査を行い、地域が抱える課題や潜在的なニーズを発見・分析し、解決策を考えて企画書を応募した。一次審査を通過した入賞者は、公開プレゼンテーションにのぞみ、大勢の聴衆を前に自分たちのアイデアを披露したり、岡山県知事らとのトークセッションに参加したりする機会を与えられた。公開プレゼンテーションに挑んだゼミ生が極度の緊張と達成感のなかで、「高校の部活以来、久しぶりに青春した」とつぶやいていたことが印象に残っている。同コンテストは2012年から2014年にかけて三回開催され、本ゼミ生は2012年に優秀賞（オーディエンス賞）、2013年に入選、2014年には応募総数94件のなかから最優秀賞を獲得した。

これ以降もいくつかのアイデアコンテストに参加し、「大学生観光まちづくりコンテスト」（2017年）では和歌山市加太でのフィールドワークをもとに企画書を作成し、ポスター発表部門に選出されて埼玉県の会場でアイデアを披露したり、「OAC学生アイデアで社会をよりよくするコンテスト」ではソーシャルデザインをテーマにポスターを制作して、2015年から三度の準入賞以上の評価を受け、2018年には325件の応募のなかから「ブロンズ宣伝会議賞」（第三位）を受賞したりした。

また、2010年に学部が新設されて以降、卒業生が多面で活躍するようになると、ゼミ出身者の就職先の企業と連携してProject Based Learning型の授業も展開するようになった。とりわけコクヨ株式会社とは2016年から継続的に連携し、例えば「小学生の学びを快適にするユニバーサルデザイン商品の企画」をテーマに、小学校での観察や聞き取り調査を行ってユニバーサルデザイン商品の試作品を作成・提案するなどの活動を行ってきた。社会人目線からの厳しい指摘にひるむことなく、研究室に連日やってきて夜遅くまで試作品の作成に取り組むなど、学生たちの頑張りには感心させられた。連携がはじまって四年目の2019年に、同社に就職したゼミの卒業生（三期生・五期生）が最終プレゼンテーションの審査員として後輩の現役生たちを指導してくれた際には、その成長した姿に教員として感慨深いものがあった。



岡山県で実施したフィールドワークでの集合写真



コンテストでの学生のプレゼン

学部創設以来、社会的課題が山積する時代のなかで「誰かに任せて批判する人でなく、自ら課題を引き受けて考え行動できる人になってほしい」という願いをもって学生と共にさまざまなゼミ活動に取り組んできた。卒業生には、本学が教育理念として掲げる「考動力」と「革新力」を体現する存在としてこれからも多方面で活躍してもらいたい。

体験を基盤とした学びの場づくり

人間健康学部 教授
安田 忠典

基盤づくり

キーワードは「体験」、とにかく自らの身体を通そう、現場で本物に触れようと、小さなキャンパスを飛び出して、地域社会を教場とするイメージを大切にしている。

ゼミに入った学生たちには、まずアドベンチャー・プログラムを通して自分たちのチームづくりを体験してもらう。この過程を丁寧にやることで、それぞれが自分自身と向き合い、仲間たちと向き合い、さまざまな気づきを得ていく。そして、それを仲間たちとシェアしあう。一緒に同じ活動をして、その経験の意味は人によって違うことを実感する。そのような気づきを大切にしながらチームとして活動するなかで、異なる感性や考え方が共存していることの価値を目の当たりにする。それらが等価に扱われることによる実りの豊かさを実感する。知識や技術ではなく、みんなが居心地よく、互いのことを愛しあっていると感じているときの「ええ感じ」を体感する。このような経験がすべての活動の基盤となるのである。



まちが学びの場

そこから先は、地域社会というフィールドに学生たちを解き放つだけだ。若くてかわいい「まちの人」として、様々な「まちの人」たちとともに課題をみつめ、関係をつむぎ、大切な人生的一幕を共有する。すべての仕事は一期一会だから、いかなるときも互いを尊重することを忘れるわけにはいかない。

幸いにも大学生なので、必要な知識にアクセスする自由度は高く、若くて機知に富むことで重宝がられる人もいるし、ゆっくりしたペースで和やかさを醸し出せるような人もいる。間違いなく言えることは、受け入れられる経験ほど人を成長させてくれることはないということである。

活動例

熊野本宮子どもエコツアー、関大・さかいECOベンチャークラブ、大和川水辺の楽校、かんだい食堂（地域の子ども食堂）、移動版かんだい食堂（キッチンカー）、田辺市扇ヶ浜海水浴場海の家運営、扇ヶ浜ビーチサッカーフェスティバル運営、祭り参加〔大魚夜市（堺市）、八咫の火祭、田辺祭り、扇ヶ浜祭り、ヤーヤー祭り（以上田辺市）等〕、PA（プロジェクト・アドベンチャー）を用いた各種研修会（堺市教育委員会、大阪市教員研修等多数）、浅香山GENKIプロジェクト、ハートピア堺最後の夢かなえますプロジェクト、夏休み自由研究フェスティバル、フルバリューキャンプ、熊野本宮関大の森プロジェクトほか多数

受賞

平成28年度「子供と家族・若者応援団表彰」内閣府特命担当大臣表彰（子供・若者育成支援 部門）
平成28年度 堺市環境活動表彰

◆研究

健康グッズの産学共同開発

人間健康学部 教授
小田 伸午

筆者の専門分野はスポーツ科学、運動制御論である。五体治療院代表、小山田良治氏（スポーツマッサージ）の協力を得て、健康グッズを開発・商品化する（株）ドリームとの産学共同研究によって、O脚矯正スパイラルソックス（平成31年度～令和元年度）と下肢機能向上拇趾リング（平成25年度）の開発を手掛けてきた。研究成果の一部を、ここに報告する。

1) O脚矯正スパイラルソックス

筆者は、走歩行運動における股関節の伸展、屈曲運動に伴う外旋運動と内旋運動について研究・著作活動を共同研究者の小山田良治氏と共に進めてきた（小田、2005）。その研究過程において、走歩行中、常時股関節が外旋位置で固定されるO脚の矯正を施す必要がある人が多いことが分かり、下腿を通じて股関節を内旋方向に力を掛けるスパイラルソックス（ドリーム社製）の開発に着手した。ソックスの装着前と装着後において、左右の膝蓋骨の最突出部の間隔を測定し、スパイラルソックスの装着によってその間隔が狭くなれば、このソックスは、O脚の矯正効果があるという仮説を立ててその検証を試みた。被験者は20歳台から50歳台の健康女性13名である。



O脚矯正スパイラルソックス商品チラシ（案）

スパイラルソックスの装着によって、左右の膝蓋骨の最突出部の間隔（左写真の←→の距離）が13名の全被験者において短くなり、最大で35.7%、最小で5%の減少が見られ、13名の平均で17.3%（14.1cmから11.5cm、）の減少（ $p<0.001$ ）がみられた。したがって、開発したソックスには、O脚の矯正効果があることが明らかとなった。立位で重心を支えることにより、接地面から股関節にかけての外旋方向にかかる回旋力が抑制され、膝蓋骨の向きが内側に補整されたことにより、立位時の膝蓋骨の最突出部の間隔が狭くなったと推察される。

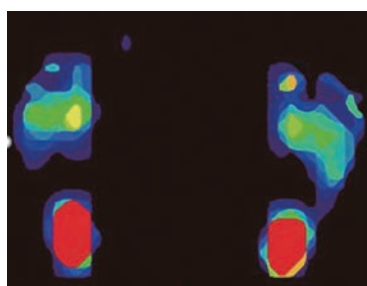
O脚の矯正ソックスは、立位時、歩行時の動作の美しさに貢献し、人々の気分を快適にする。さらに、足関節、膝関節、股関節の正しい配列（アライメント）をもたらすこのソックスには、立位姿勢維持能力、歩行能力、走行能力、スポーツの種々の移動能力（サイドステップなどの下肢の素早い動きなど）の向上に貢献する可能性がある（現在商品化段階）。装着することでヒトの下肢の姿勢が整い、走歩行など生活動作の質の向上に寄与するスパイラルソックスの社会貢献度は低くない。

2) 拇趾リング

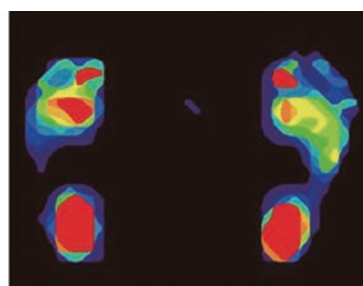
足の拇趾で靴底を押さえる機能（把持（はじ）機能）が走歩行能力に与える研究（小田、2007）を推進してきた小田と小山田は、拇趾の把持機能を促進する拇趾リングをドリーム社と共同で開発、商

品化（スタブリング）に成功した。効果検証は、1秒でしゃがみ1秒で立つスクワット反復中の足圧中心（COP）の10秒間動揺軌跡距離（軌跡長）を、拇趾リング装着「なし」と「あり」の二条件で比較した。被験者は20歳台から50歳台の健常女性10名である。結果は、リングを装着すると、スクワット動作中の足圧中心の動揺軌跡長が有意（ $P<0.001$ ）に減少した。ちなみに、下肢の筋肉に強い負荷がかからない立位姿勢では、装着してもしなくても、COP軌跡長の傾向は見られなかった。拇趾リングの装着は、自重負荷をかけて行う日常生活やスポーツにおけるしゃがみ立ち動作などの安定度をアシストすることがわかった。

スクワットにおいて安定度が増大する要因として、足圧分布にその一因を求めることができる。1) 拇趾リングの装着で、前足部を広く床を押さえることができるようになった。2) 拇趾の先端部（拇趾の腹）が床から浮いていたのが、リングの装着で、拇趾の腹で床を押さえることができるようになった。下図の赤の部分が足圧が高いところである。



拇趾リング無し（拇趾で床を抑えていない）



拇趾リング有り（拇趾で床を押さえている）

関西大学×ラボネッツ 共同研究 10秒間静的スクワット時の足圧中心動揺軌跡長および足圧分布を測定



商品チラシの一部 提供：(株) ドリーム

リング装着により、拇趾・小趾・かかとの「3点接地」が実現し、日常の歩行運動や階段昇降時にスムーズな体重移動や足趾を使った蹴出しをサポートすることで、動作安定度は高まる。3点接地の実現は、足の縦横のアーチをサポートし、足趾機能を再生させることで、外反母趾・開帳（かいちょう）足（そく）・扁平（へんぺい）足（そく）等の防止・対策効果も期待できる。

最後に、関西大学人間健康学部の創立理念の一つである人のくらしに役に立つ体の研究が、産学共同研究を通じて健康グッズの開発に繋がり、人の健康（健幸）に貢献できた喜びと感謝をこめて短稿を閉じたい。

参考文献

- 小田伸午 スポーツ選手なら知っておきたい「からだ」のこと 大修館書店、2005.
小田伸午 運動科学 実践編 二軸動作がスポーツを変える 丸善、2007.

動ク故ニ我アリ；moto ergo sum

人間健康学部 教授
河端 隆志

平成25年3月25日、関西大学人間健康学部と信州大学大学院医学系研究科は、スポーツ医科学分野における「高齢者の健康長寿のための個別運動処方」の全国展開をめざした教育・研究・社会貢献活動などで連携および協力することを目的とした学術連携の協定を、人間健康学部 小田 伸午 副学部長（当時）と信州大学大学院医学系研究科 福嶋 義光 科長（当時）により締結しました。福嶋氏は「今までの医学では治療研究が主流だったが、目指すべきは疾患予防の研究である。平成24年度から疾患予防医科学専攻を設け、その中核を担っているスポーツ医科学の取り組みを全国に広げ、関西方面の学問大系に広く利用されるのを大変嬉しく思う。」と述べました。



人間健康学部では様々な領域における研究が展開されていますが、その根底は「人」をその中心に置いた「暮らし」における健康と健幸とそれを支える「個別の健体康心」の在り方を考えるものであると云えます。

この学術連携により展開されている健康支援事業の特徴は、インターバル形式で速歩を取り入れた歩行運動様式（インターバル速歩）、携帯型カロリー計の開発による個別運動の管理とそのデータベース構築により多人数の個別運動処方の実践とその管理を少数の専門家で網羅できるシステム化にあります。そして、それを支える科学的根拠は、これまで15年以上に及ぶ7000名以上のデータベースの構築を基とした研究成果及び国外の有力医療機関であるメイヨー・クリニック（米国）、コペンハーゲン大学（デンマーク）、イェール大学（米国）での検証による研究報告（肥満疾患・糖尿病疾患等）など国際的に高い評価を得ており、世界の先端に行く実践的研究と云えるところです。

人間健康学部で展開している事業では、堺市（85万人）及び吹田市（35万人）においてこの事業を導入し、単に関西大学の地域連携事業とするだけではなく、本学部が既に持つ学際的な知的リソースと融合することで、新たな健康増進プログラムの開発とそれを担う人材の育成により同事業が全国的に展開することを目指したいと考えています。

インターバル速歩を考案した 能勢 博 教授は、「生活習慣病は同じ食物、同じ生活パターンを通じて集団発生するので、その予防には地域に根ざした予防体制をとらないと解決できない。今後の医療は社会学・民俗学等、人文科学を含んだ総合的で学際的な取り組みが必要であり、関西大学であればそれを実現していただける」と連携協定に大きな期待を寄せています。

我々はこれからも「学の実化」をめざして、ヒトの健体康心に関するwhole bodyでの研究を進め、さらに科学的根拠に基づく健康支援事業に繋がりたいと考えています。

持続可能な部活動に向けた企業との共同研究

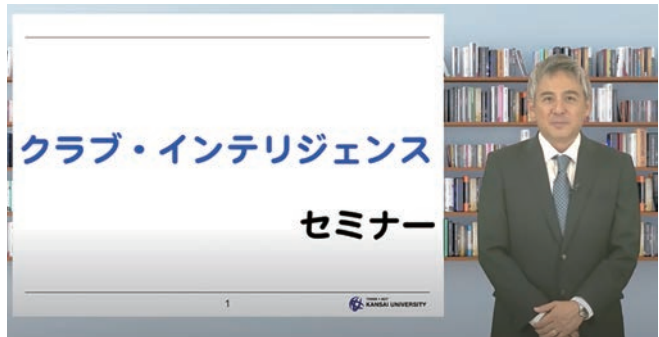
人間健康学部 教授
神谷 拓

私が本学部で仕事を始めたのは2019年4月であり、それ以前は宮城教育大学という国立大学に所属していた。前任校は東北地区の教員養成を使命としていたこともあり、各自治体の教育委員会、教員が組織する教育団体、そして附属学校・園と関わる仕事が多かった。私は日本でも数少ない部活動の研究者であり、研修や講演の機会にも恵まれ、教育現場の先生や教育委員会との共同研究にも積極的に取り組んできた。

とりわけ、この10年において、部活動は「教育問題」として議論されることが多くなった。教師の超過勤務の元凶であり、体罰・暴力の温床であり、諸外国のような地域スポーツクラブを広げるうえでの障害であり、科学的な指導を拒絶する根性主義の

場であり、組合と学校設置者・管理者の軋轢の要因であり……。SNSの広がりとともに、これらの部活動問題が拡散し、今や「ブラック部活」と呼ばれるようになった。私自身は、これまでの部活動の問題を批判するだけでなく、学校で実施する条件を整えながら教育的に再生していく立場である。そのため、各種団体の講演や研修においても現状の研究成果を伝えるとともに、今後の実践上の課題を提示してきた。しかし一方で、このような通常のアプローチだけでは、現状の部活動問題に十分に対応できないのではないかと考えていた。

そのような問題意識を基盤にして、私が本学に異動してから最初に取り組んだのが、表題にある「持続可能な部活動に向けた企業との共同研究」である。この共同研究では、①「生徒が自分たちで部活動の課題を解決する」ことをサポートするワークシートや動画コンテンツの作成と、②実践の成果を感想・レポートに記してポートフォリオに蓄積していくシステムの構築をめざしている。これらの取り組みによって、できるだけ生徒が自分たちで部活動を運営する状態にしていくことで、現状の部活動問題が改善へと進んでいくのではないかと考えた。まだ、実践研究の途中ではあるが、私たちが作成したワークシートや動画コンテンツは、生徒による課題解決や自治的な運営を促す成果が見られるため、今後、さらに検証を続けていく予定である。なお、この共同研究は、動画コンテンツやポートフォリオに関するノウハウを有する（株）ベネッセコーポレーションとClassiと取り組んだものであるが、関西大学は産学連携を重視してきた経緯があり、契約などの際には的確な助言をいただき、スムーズに実践研究へと移行できた。今後も、このような環境を生かして、学校や地域の課題解決に貢献していきたいと考えている。



企業からのサポートを受けて・・・

人間健康学部 教授
弘原海 剛

私のゼミでは、自分と同じ興味のあるテーマごとにグループを作り、卒業研究に取り組むが、それ以外にも一つ、ゼミ生全員で取り組む共通の研究テーマがある。共通テーマは、「スペシャルドリンクの開発」。すなわち、運動パフォーマンスの向上に有効な飲料を開発研究することである。これは、ゼミ1期生の頃から始め、今もなお（9期生）継続中である。その年の実験が終われば翌年に新しく入ったゼミ生のデータを追加したり、次のステップに進めた実験を始めたり、接ぎ木・挿し木を繰り返しながら10年が経ち、気が付けば、大樹に育っていた。

これまでの10年を振り返り、ゼミ生たちと一緒に進めた研究を紹介する。2012年、1期生が3年次生の時に、実験で用いる運動プロトコル（実験名称：ロング）を完成させた。これはフルマラソン（42.195Km）完走を想定し、生体のエネルギー枯渇状態を実験室内で作り上げるもので、1人につき約5時間も掛かる過酷な運動プロトコルである。フルマラソン経験者は一様に30Kmもしくは35Kmの壁という言葉を使う。これは、走行距離がその辺りになるとエネルギーが枯渇し急に脚が棒のようになって走れなくなることを指す。この壁をなくすには何を飲めば有効なのかを明らかにするため、このロング実験を幾度となく（試行飲料の数+飲まない時）試し、「スペシャルドリンク」の開発を目指した。そして、今もなお、ロング実験は健在である。

①株式会社 ブルボン（※1期生から～）

ブルボン（BOURBON）WINGRAM開発の基礎研究の一部に携わった。1期生2期生のデータを基に2017年8月に商品として発売になった。私達のデータが初めて商品になった思い出のドリンクである。現在日本で市販されているスポーツ飲料で、持久力の維持には一番効果的だと思っている。



②株式会社 林原（※3期生から～）

原材料としてトレハロースの特徴を生かしたスペシャルドリンク開発の基礎研究に取り組んでいる。現在も継続中である。



③江崎グリコ 株式会社（※5期生～）

江崎グリコの協力を得て、パブリカキサントフィル摂取による持久力向上効果についての研究発表を行った。また、このパブリカキサントフィル栄養素の機能性を生かした他の研究について現在も継続中である。



御礼・・・仮説や理想論を語り「いつかきっと・・・」、私達のそんな夢の詰まった研究に賛同し協力をくださる企業の皆様に、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

振り返って・・・文系学部でありながら理系の実験研究を進めるうえで、様々な制約がある中、学生達と一緒にひしめき合って今日まで来れた。在学中は日々の実験に追われ、自分が何をしているのか分からないまま卒業していったゼミOB、OGも少なからずいたと思う・・・。この度の10周年記念誌のお陰で自分達の研究成果が具現化されたことを皆に伝えられる機会となり嬉しく思っている。

◆社会貢献（地域連携）

地域連携にご協力いただいている皆様からのご祝辞

堺区長 西本 秀司

関西大学人間健康学部創設10周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

「関大防災Day」の実施や子どもの居場所としての「かんだい食堂」の開設など、さまざまな面から地域にご貢献を賜り、深く感謝いたします。

この10年間、改めて区内に高等教育機関が立地することによる堺区政に対する計り知れない大きな効果を強く実感しております。

最後に、私事ではございますが、母校であります貴大学の今後のさらなるご発展、そして人間健康学部と堺区とのご縁が末永く続きますことを祈念し、祝辞とさせていただきます。

浅香山校区自治連合会 会長 中島 良治

関西大学、人間健康学部創設10周年誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。さて浅香山校区に関西大学が開校されてから、水辺の楽校、防災訓練などのイベントに学生さんが参加協力していただけるようになり、地域の活性化にも寄与していると感じています。また昨年の10月31日にはコロナ禍の中、浅香山ハロウィン2020を開催し沢山の学生さんに協力していただき、子どもたちや町会の人達とも触れ合う事が出来ました。ありがとうございます。このような繋がりを大切にして、これからも引続き関西大学が発展していけます様に祈念し、祝辞とさせていただきます。

関西大学校友会 堺支部長 草川 大造

学部創設10周年を心からお慶び申し上げます。この間、学術的な業績の積み重ねはもとより、有為な人材を数多く世に送り出されるなど、法人や教職員の皆様の熱き想いとなみなみなならぬご努力に心から敬意を表します。

また、堺市との地域連携事業や住吉祭神輿渡御への奉仕など地元貢献のほか、大魚夜市への出店支援などわが支部活動に対するご協力にも感謝いたしております。

今や貴学部は堺の誇りであり、地球規模で「健幸」に注目が集まる中、堺からわが国をそして世界を牽引していく学問の府として、更なるご発展を祈念してやみません。

住吉大社 宮司 高井 道弘

関西大学人間健康学部創設10周年に当たり、衷心よりお慶び申し上げます。

住吉大社は約1800年の歴史を有し、夏には住吉祭が行われ、8月1日に総重量2トンの大神輿を担い住吉大社から大和川の中を練り堺宿院頓宮まで渡御祭が行われます。この神輿の担い手として貴大学の学生のご奉仕により地域社会の活性に貢献されていることに感謝しております。

令和7年には関西大阪万博が開催されます。今回のテーマは『いのち輝く未来社会のデザイン』です。貴学部が万博を通じて大阪の成長に寄与し、貴大学の益々のご隆昌となることをご祈念申し上げます。

地域連携事業10年のあゆみ

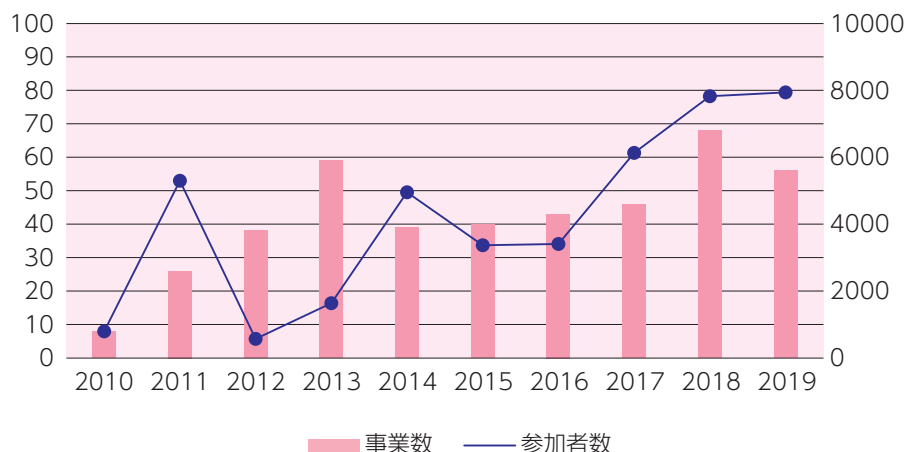
関西大学では、2010年度の人間健康学部の創設以来、堺市と連携協定を締結し、歴史的・文化的資源の活用及び知的・人的資源の交流を図り、まちづくり、文化、産業、教育等の様々な分野において、地域の発展と充実に寄与することを目的として、地域連携を推進してまいりました。特に、人間健康学部では「地域社会との連携による『ささえあい』『かかわりあい』の文化を学ぶ実践教育を重視する。」ことを特色として掲げ、教育・研究成果を地域に還元できるよう多様な取り組みを行っています。

本学の連携事業は、本学部・研究科が主体的に取り組む「堺キャンパス枠」、堺市企画部から提案いただく「堺市枠」、本学の全学的な成果を生かして地域課題に取り組む「全学枠」で構成されています。

事業数は設置時の8事業から60事業を超えるまでに発展し、実施日数は年間延べ350日となっています。

これら事業の実施を通じて、堺市の重点課題の解決に寄与できるよう、引き続き取り組んでまいります。

経年事業数と参加者数



◆事業数の推移

年度	地域連携事業数			地域連携参加者数
	堺キャンパス・堺市企画	全学枠	合計	
2010年度	8	—	8	796
2011年度	26	—	26	5,297
2012年度	36	2	38	572
2013年度	55	4	59	1,639
2014年度	36	3	39	4,954
2015年度	35	5	40	3,368
2016年度	41	2	43	3,408
2017年度	45	1	46	6,128
2018年度	62	6	68	7,822
2019年度	48	8	56	7,940

※全学枠は2012年度より実施。初年度は1学年のみの参加。2019年度は、コロナ禍での実施。

地域連携事業の活動紹介



みんなで踊ろう

(地域の高齢者と本学部生によるダンス公演の開催を目的とした
ダンス・ワークショップ)



- 📍 **実施年度**
2017年度～継続中
- 📍 **主な連携先・メンバー**
堺市／関西大学人間健康学部
原田純子ゼミ／Performance
Theater KAYMO (学生サークル)
- 📍 **活動地域**
大阪府堺市／関西大学
堺キャンパス

📍 活動の目的 /

- ・公演のためのダンス創作過程において高齢者と学生とが共創活動を行い、その経験を学びとする
- ・公演の開催は、堺市民に対する身体表現芸術・文化の啓蒙と普及を目的とする

📍 連携にいたる経緯 /

堺市と関西大学との地域連携事業として企画・運営。2011～2016年度は“ダンス・ワークショップ”、2017年度から“みんなで踊ろう”というテーマで、年に一度本学部学生と共に創る公演を開催。



📍 活動内容 /

2011～2016年度の“ダンス・ワークショップ”では、堺市在住の高齢者を対象に健康のための身体ほぐしとダンス創作・表現活動を実施。参加者の表現力と活動への取組みが向上してきたことを機に、2017年度より舞台発表を目標とする“みんなで踊ろう”を企画。参加者の7割程度はリピーターだが、新規受講者と15名程の学生・卒業生も参加し、総勢40名程度で11月に公演を実施している。

公演における作品は、地域の参加者と学生がグループを組み、ダンス創作はもちろんのこと、衣裳のデザイン・制作なども一緒に作り、「共創」を実現している。また、公演の鑑賞者が、次年度は自分も参加したいと思うような活動に成長しており、実際に数名が次年度の活動に参加して舞台上に立っている。

📍 活動の成果 /

- 1 地域の参加者（高齢者）にとっては、参加者同士、または若い学生たちと共に活動に取り組むことによって、互いに影響を及ぼし合い、身体的、精神的、感性的に活性化されている
- 2 学生にとっては、年の離れた参加者をリードして意見をまとめ、活動面で具体的なサポートをすることにより、実践的・経験的に自己実現や社会貢献に向けて行動する力を身につけている
- 3 地域の参加者と学生が学外でも交流を深めている

📍 今後の課題・目標 /

- 1 地域の参加者が、より主体的に関わる活動へと成長する
- 2 2週間に一度の活動であるので、体力を落とさないための手立て（運動アドヒアランス）を考える
- 3 地域の中その他団体（例えば、他の高齢者グループや障がい者）との交流をもって、互いを高め合う

👤 教員紹介

人間健康学部教授 原田 純子（はらだ じゅんこ）

「舞踊不運人（ダンスは人を選ばず）」を掲げ、人間教育としての創作ダンス・身体表現活動を研究・実践。地域の高齢者との活動のほかに、小・中・高校の先生方とのダンス授業研究会等も実施している。専門は舞踊教育学。



事業
領域

堺市推進事業

健康づくり・
地域福祉の推進

人間健康学部推進事業

教員の専門分野・
学生活力の活用



参加者のコメント

- 大変素敵な時を過ごせました。このような機会を与えていただき幸いです。
- 学生さんや若い人達とお話して楽しかったです。また、同じ趣味の仲間を作って頂き、ありがとうございました。
- 先生にはもちろんのこと、学生さん、OB・OGの方にとってもお世話になり、普通の主婦では体験できない舞台出演ができました。ありがとうございました。お友達が来て、すごく良かったです。
- 若い人達と踊れて楽しい。みなさんの頑張りが励みになります。
- 年齢も体のしなやかさも各々皆違いますが、踊りの楽しさは上手下手だけではないと思います。講座に参加すると元気になれるのが、一番ありがたいと思います。



住吉祭神輿渡御ボランティア



実施年度

2013年度～継続中

主な連携先・メンバー

浅香山校区自治連合会／住吉大社宿院頓宮／堺みこし会／関西大学人間健康学部学生

活動地域

大和川～住吉大社頓宮

活動の目的

- ・ 堺市に密着した形で地域貢献の達成および関西大学堺キャンパスの認知度向上
- ・ 地域貢献活動に参加した学生に対する教育的効果

連携にいたる経緯

堺キャンパス付近の地域住民から、担ぎ手が著しく少なくなった住吉祭の神輿渡御にボランティアとして学生を派遣してほしい旨の要請を受け、地域貢献の一環として学生を派遣した。



活動内容

住吉祭の神輿渡御ボランティア

住吉祭は、生玉夏祭り（生國魂神社）、天神祭（大阪天満宮）、住吉祭（住吉大社）と続く大阪三大夏祭りのひとつで、8月1日に行われる神輿渡御は夏祭りの最後を締めくくる神事であり、大阪市の住吉大社から住吉大神の神霊をお遷した重さ約2トンの大神輿を大阪市と堺市を隔てる大和川で受け取り、ここから学生たちが宿院頓宮まで勇壮に練り回る。



活動の成果

- 1 人間健康学部学生が地域貢献活動に参加することによる、堺キャンパスの認知度向上
- 2 学生の活力を地域へ還元し、同時に日頃の取り組みが地域活性化に貢献できることを学生に認識させること

今後の課題・目標

- 1 ボランティアに参加する学生は体育会の学生が中心であったため、それ以外の学生にも積極的な参加を促していきたい
- 2 申込者数が減少傾向にあるため、学生への周知および広報の方法を再検討したい

教員紹介

人間健康学部教授 村川 治彦（むらかわ はるひこ）

東京大学文学部（宗教学宗教学科）を卒業後、米国に留学しCalifornia Institute of Integral Studiesで東西の身体技法と比較思想を学ぶ。博士論文で取り上げた「氣」の研究をきっかけに、言語による体験の深化に関心をもつ。キルケゴールの「人生は振り返らなければ理解できないが、前を向かなければ進んで行かない」をモットーに、日常の様々な実践活動で経験したことを言語化し、反省し、共有するプロセスを教育活動に取り入れる試みを続けている。



事業領域

堺市推進事業

地域協働型事業の推進

人間健康学部推進事業

教育の専門分野・学生活力の活用





「楽しんやさかい 大和川水辺の楽校」との連携



活動の目的

河川の水辺を利用して、子どもたちの自然体験や生活体験、環境学習の場をつくり、その成長を支援する

連携にいたる経緯

国交省が推進するプログラムとして2007年にスタートした「大和川水辺の楽校」は、2010年に開設された関西大学堺キャンパスから至近の大和川河川公園を会場に展開していた。そこで関西大学は地域への貢献活動として、開設年度から運営委員、学生ボランティアを派遣し、会場場所の提供等も含めて全面的に参画。一昨年には浅香山浄水場近辺のつつじ祭りとジョイントして独自のプログラムを推進している。

活動内容

毎年5月に「大和川水辺の楽校祭り」を開催。子どもたちに水辺体験を提供する「水辺の楽校教室」、関連団体が総出でつくる緑日、各種体験テントブース、ミニコンサートなど来場者1000名規模のイベント。9月には単独で公募型「水辺の楽校教室」も開催。学生が「教室」における子どもたちの案内、安全管理等に当たるほか、緑日出店、イベント出演等で祭りを盛り上げている。

実施年度

2013年度～継続中

主な連携先・メンバー

大和川水辺の楽校協議会…企画・運営
大和川線沿線連絡協議会（三宝／錦西／錦綾／浅香山／東浅香山／新浅香山／五箇荘東の7校区）…企画・運営
国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所堺出張所…企画・運営・施設貸与
堺市教育委員会学校教育部学校企画課…企画・運営・参加者募集
堺市建設局土木部河川水路課…事務局
関西大学人間健康学部安田忠典ゼミ、村川治彦ゼミ、瀬英世ゼミ…企画・運営・学生ボランティア派遣ほか

活動地域

大和川（大阪府堺市）／関西大学堺キャンパス



活動の成果

- 1 「水辺の楽校」の継続、発展
- 2 安定した運営の基盤形成
2017年1月、大和川水辺の楽校協議会が国土交通省近畿地方整備局より「河川協力団体」の指定を受ける。
- 3 子どもたちやボランティア学生の学び
- 4 地域住民の運営による関係機関間の連帯感醸成
- 5 5月の水辺の楽校祭りが1000名超と大盛況

今後の課題・目標

- 1 独自のプログラム作成
運営基盤（事務局、物品、会場場所等）の整備
プログラム参加者の発掘
広報体制の強化
地域との連携強化
- 2 プログラムをさらに洗練していく
市民、とくに地域住民へのさらなる定着
大学としての参加をさらにアピール
学生の参加をさらに促進する
成果も含めた広報の強化
地域住民による自主的運営基盤の安定化をさらなるものにし、画期的な地域活動に成長してきた成果を各方面に発表、周知していく。

教員紹介

人間健康学部教授 安田 忠典（やすだ ただのり）

人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めており、そんな若い力を求めている現場とコラボが可能！



事業
領域

堺市推進事業

地域協働型事業
の推進

人間健康学部推進事業

学生の
学び力向上

教員の専門分野・
学生活力の活用





子ども虐待への対策と地域連携




実施年度
2016年度～継続中

主な連携先・メンバー
堺市子ども青少年局子ども相談所／堺市子ども青少年局子ども家庭課／青少年希望の家「土井ホーム」代表 土井高德氏／浜松学院大学短期大学部幼児教育科准教授 志村浩二氏

活動地域
関西大学堺キャンパス

活動の目的

- 子ども虐待対策の啓発
- 子ども虐待と地域連携のあり方について、関係する専門家のこども相談に関する技術や知識の向上を図る

連携にいたる経緯

事業代表者の専門分野である子ども家庭福祉領域では、子ども虐待対策が課題となっており、堺市子ども相談所と連携してその対策を推進することとなった。

活動内容

子ども虐待への対策と地域連携のあり方について、堺市子ども相談所と協議のうえ本課題に関するシンポジウムを開催することとなった。

2019年度は、堺市民、学校・児童相談所・保健センター等の関係者やスクールソーシャルワーカー・社会福祉士等を対象にシンポジウムを開催。第1回目は土井高德氏（青少年希望の家「土井ホーム」代表）を招き、発達障がい、非行、貧困、不登校等多くの困難を抱えた子ども達が自らの力で社会の中で生きていくための交渉術や、ものの考え方、とらえ方のスキルを子育ての中でどのように身に付けていくかを講演いただいた。そのなかで地域の中で子どもの成長をどのように見守り育てていくことができるのか、支援者のあり方も含めて考察することができた。第2回目は志村浩二氏（浜松学院大学短期大学部幼児教育科准教授）を招き、児童相談所における児童福祉司および児童心理司や自治体での子育て支援の担当者としての経験を踏まえ、精神疾患を抱えた保護者との信頼関係の築き方、家族アセスメントの重要性について講演いただいた。ごみ屋敷・ネグレクト・アルコール依存症・DV・母子心中未遂といった精神疾患のある親の病理によって、子どもが受けるダメージをいかに防ぐことができるのか。精神疾患を抱えた保護者の理解とその支援のあり方について、子ども虐待に関わる専門職、地域のボランティア、関係者の理解を深めることができた。

活動の成果

- 一般市民などの非専門家にとって、子ども虐待を地域でいかに受け止め防止していくのかについて検討する素材を提供することができた

今後の課題・目標

- 子ども虐待への対策は、一朝一夕に形作られるものではないため、今回の講演会を起点として継続的な学習や啓発が今後の課題となる
- 一人でも多くの方に子ども虐待対策への関心を、講演を通じて持ってもらう

教員紹介

人間健康学部准教授 福田 公教（ふくだ きみのり）

専門は社会福祉学、子ども家庭福祉論。社会的養護の普及・啓発および社会的養護下にある子どもの自立支援のあり方について研究を進めている。妻とともにほぐみホーム（養育里親）をつとめている。



事業領域

堺市推進事業

健康づくり・地域福祉の推進

人間健康学部推進事業

教育研究の地域還元



参加者のコメント

- 子どもにとって愛着形成がいかに大切か、信頼できる大人がいること、その環境がいかに大切かということがよくわかりました。貴重なお話をありがとうございました。
- 看護学生としても、人としても、とても大切な事を学ぶことができて良かったです。ありがとうございました。
- 増加している虐待を減らすには、育児をしている親への支援など、社会で何かできないか（社会で何とかしないとイケない）と日々思う中、今日の講演はとても貴重でした。ありがとうございました。
- 虐待について、こんなに深く考えたことがなかったため、いろいろなことを考え、学ばせていただきました。虐待する親も寄り添う対象という言葉がとても心に残っています。
- 虐待の入口の知識を学ばせていただきました。今後に生かしたいです。



社会的養護の普及・啓発および 社会的養護下にある子どもの自立支援事業



実施年度

2016年度～継続中

主な連携先・メンバー

堺市子ども家庭課／堺市子ども相談所／堺児童養護施設部会／堺市里親支援機関

活動地域

大阪府堺市／関西大学堺キャンパス

活動の目的

- ・堺市民に対して人間健康学部の教育研究内容の広報を行う。
- ・堺市民に対する社会的養護に関する啓発を行う。
- ・堺における子ども家庭福祉領域の研究に関する関係機関との連携を強化する。
- ・社会的養護下にある子どもの自立の一助となるとともに本学学生の社会的養護への理解を深める。

連携にいたる経緯

事業代表者の専門分野である子ども家庭福祉の課題である社会的養護の普及・啓発および社会的養護下にある子どもの自立支援を堺市の関連機関と連携して推進する。

活動内容

- 1 社会的養護に関する公開講座およびワークショップの開催
- 2 里親制度の普及促進を図るためのイベント等の実施
 - ・堺シティマラソンにおいて啓発
 - ・関西大学堺キャンパス祭において啓発
- 3 社会的養護のもとにある子どもの学習支援や自立支援の促進
 - ・社会的養護に関するワーキンググループ
 - ・児童養護施設の子どもの体験学習
 - ・学生が施設を訪問して学習指導・スポーツ指導を行う、および、報告・情報共有のための集会
 - ・児童養護施設の子どもの大学を訪問してスポーツ指導を受ける
- 4 社会的養護のもとにある子どもの生活を支援する職員の研修
- 5 社会的養護の現状を伝えるDVD制作の研究会



活動の成果

社会的養護の抱える課題などについて、社会に発信していくと共に、人間健康学部の特徴を生かした学習支援やスポーツ指導などは、社会的養護下にある子どもへの一定の支援を届けることができたと評価することができた。また、公開講座や啓発イベントを通して、地域社会に対する社会的養護の理解を醸成することができた。

今後の課題・目標

社会的養護の問題でもとりわけ施設養護における当事者の視点から啓発活動を行った。社会的養育ビジョンが示しているように、里親委託が推進されているが、社会的養護の主な担い手である施設養護のあり方を社会的養護経験者の視点から再検討することができたと考えられるが、社会的養護の課題には、息の長い事業展開が求められている。また、事業の一部については、関係機関との調整がつかず、未実施であったものがある。今後の課題として、事前の調整を密にしておく必要がある。

教員紹介

人間健康学部准教授 福田 公教（ふくだ きみのり）

専門は社会福祉学、子ども家庭福祉論。社会的養護の普及・啓発および社会的養護下にある子どもの自立支援のあり方について研究を進めている。妻とともに「ぐくみホーム（養育里親）」をつとめている。



事業
領域

堺市推進事業

子どもの体力・
元気力向上の推進

健康づくり・
地域福祉の推進

地域協働型事業
の推進

まちな
にぎわいづくり

人間健康学部推進事業

学生の
学び力向上

教育研究の
地域還元

教員の専門分野・
学生活力の活用





かんだい子ども食堂



実施年度

2018年度～継続中

主な連携先・メンバー

堺市/関西大学人間健康学部
安田ゼミ／

活動地域

大阪府堺市/関西大学
堺キャンパス

活動の目的

堺キャンパスの食堂を使って子どもたちを中心に地域の人々が集える「子ども食堂」を開催する。大学を地域の人々に使っていただくことで、地域での認知度が向上し、地域の課題を共有し、新たな事業の開発につなげることができる。また、様々な課題を抱える子どもたちや家庭を見つけ、福祉の支援につなげることができる。地域の小中高等学校と連携し、駅前というキャンパスの立地条件をフル活用して、新しい大学の機能を創出する。

連携にいたる経緯

それまでの堺市との連携事業を通して知己を得ていた堺区役所企画課、堺区社会福祉協議会、NPO法人ふーどばんく大阪などの関連団体との交流を経て、安田ゼミ7期生が独自の企画として立ち上げた。以来、学生たちの手によって運営されている。



活動内容

2018年度は2回開催。2019年度は11回開催した。

2020年度はコロナ禍の影響もあり、通常の「かんだい食堂」の開催が困難であったため、フードバンクからフードロスを防ぐために提供頂いた食材を配付する「おすそわけ食マーケット」を開催した。

活動の成果

- 1 校区小学校をはじめとする地域との連携の重要性、具体的な関係者の顔が見えてきた。
- 2 市役所各部署をはじめとした公的機関、堺市子ども食堂連絡協議会、NPO法人ふーどばんく大阪等との連携が確立された。
- 3 学生たち（3年次生が企画運営）のスキルアップと動機づけの強化。自律的に運営ができる基盤が構築された。同時に、キャンパス事務局と学生たちが協働・連携の関係を強化することができた。

今後の課題・目標

- 1 コロナウイルスの影響で中止を余儀なくされたが、そのような災害時にもじつはこうした活動は貴重であり、様々な社会の動きに柔軟に対応できるようにしていきたい。
- 2 子ども中心でここまでできたが、今後は街のすべての人に開かれた事業になるように工夫を重ねたい。

教員紹介

人間健康学部教授 安田 忠典（やすだ ただのり）

人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めており、そんな若い力を求めている現場とコラボが可能！



事業
領域

堺市推進事業

子どもの体力・
元気力向上の推進

健康づくり・
地域福祉の推進

地域協働型事業
の推進

人間健康学部推進事業

学生の
学び力向上

教員の専門分野・
学生活力の活用



参加者のコメント

- 子どもは、大学生のお兄さんやお姉さんたちがとても優しく、とても楽しいと大変喜んでいました。うちは、一人っ子なのでたくさんの人たちと一緒に食事したりできる事が本当に嬉しいみたいです。
- 大学生のお兄さんお姉さんに遊んでもらって、いつも大変喜んでおります。出来れば、ずっと続けて欲しいです。
- いつもチラシを頂いて来ては「行きたい!! 行きたい」と言います。子どもたちにはお兄さんお姉さんとの時間がとても楽しいようです。いつもありがとうございます。
- 浅香山（地域）の自慢のひとつとなっています。本当に親子共々感謝です。できれば…もう少し人数を増やしてほしいと思います。
- いつも優しく相手してもらい大変楽しく参加させてもらっています。普段は入れない大学内に入らせて頂き大学生のお兄さんお姉さんと触れ合い、刺激を貰って、それが記憶に残ると思うので、今後の進路はもとより自分のなりたい大人像や子どもに対しての接し方など、体験した事が今後の成長過程で目標や理想になってくれれば良いなあと考えています。いつもありがとうございます。



福祉と介護の事例発表会



- 📍 **実施年度**
2018年度～継続中
- 📍 **主な連携先・メンバー**
堺市健康福祉局長寿社会部地域包括ケア推進課／堺市老人福祉施設部会
- 📍 **活動地域**
大阪府堺市

👏 活動の目的

- ・事業参加学生が福祉職、介護職の取組みから高齢者福祉の現場を学ぶ。
- ・堺市内の福祉及び介護に従事する職員が他施設の事例を学ぶ。
- ・福祉及び介護の仕事へのイメージがよくなり、福祉及び介護の仕事に従事する人が増える。
- ・参加した職員、発表した職員双方の介護技術向上につながり、福祉と介護の質が向上する。

🤝 連携にいたる経緯

高齢化の進展に伴い、要介護等高齢者が増加する一方で、介護従事者の入職率は伸び悩んでおり、2016年度に堺市が実施した高齢者等実態調査においては、職員数が不足していると感じている介護事業者が半数以上を占めている。福祉及び介護の人材確保のため、教育機関と行政が連携し、福祉職及び介護職の魅力発信を行う。

👏 活動内容

「さかいの街で高齢者の『やりたい』を応援する」をテーマに、市内介護事業所の活動発表会及び就職相談会を行う。

- ・2019年度堺市働きやすく魅力あふれる介護事業所等表彰 表彰式
事業所表彰 5法人6事業所
さくらめき職員表彰 5法人6事業所13人
- ・実践発表会（口述発表）
口述発表20演題
講演会及び講評
- ・実践発表内容のポスター掲示及び就職相談会 27法人

👏 活動の成果

参加者の5割の方が、介護のイメージが良くなったと回答した。また、「発表や展示によって他の事業所における取組を知ることができてよかった」「日ごろの取組を発表でき、やりがいを感じた」といった答えもあり、他の様々な施設の発表を聴くことや、普段の取組について発表する場があることによって、介護の可能性を感じてもらえるイベントとなった。

👏 今後の課題・目標

参加者のほとんどが介護の関係者で学生の参加が少なかったことについて、「開催日であった9月は、学生にとって長期休暇中であつたり実習の時期であるため参加が難しい」などの意見があつたため、次年度以降の開催時期について検討する必要がある。また、学校との連携を深め、学生の参加を増やしていきたい。

👤 教員紹介

人間健康学部教授 岡田 忠克（おかだ ただかつ）
大阪府堺市生まれ。大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程単位取得後退学。
現在、関西大学人間健康学部教授。博士（学術）。専門は社会福祉政策で、主著は、『社会福祉の理論と政策』（中央法規出版）、『よくわかる社会福祉』（ミネルヴァ書房）、『転換期における福祉国家』（関西大学出版部）、ほか多数。



事業
領域

堺市推進事業

健康づくり・
地域福祉の推進

人間健康学部推進事業

教員の専門分野・
学生活力の活用



参加者のコメント

- 参加したことで、他社の良さが観れた。発表の参考になった。
- 色々勉強になりました。今後介護の仕事に役立ちます。
- 堺の事業所のお話が聞け勉強になった。
- 他の事業所について詳しく知れた。色々なテーマの発表で勉強になった。
- 介護についての内容を再度確認できた。



香ヶ丘商店街を中心とした浅香山地区のまちづくり



実施年度

2017年度～継続中

主な連携先・メンバー

堺市堺区教育・健全育成会議
（2020年4月1日廃止）/NPO法人
kokoima

活動地域

大阪府堺市／関西大学
堺キャンパス

活動の目的

大学と地域のつながりを商店街のみならず浅香山地区全体へとひろげ、地域活性化に寄与する。

連携にいたる経緯

2017年から浅香山地区で精神病患者の居場所作りを目指すNPO法人kokoimaと連携し、浅香山商店街の活性化に取り組んでいる。これまで、地域コミュニティとの夏祭り共催、学生が運営する子供スポーツ教室、学習支援をきっかけにした子供の居場所づくりなど学生による子ども支援を中心に実施してきた。これらの成果をさらに発展させるとともに、近年喫緊の課題となっているコミュニティでの共助を促す防災活動などにも取り組んでいる。

活動内容

【あたらしいあそびの場】

通常のスポーツ教室とは異なり、小学校低学年から高学年まで異なる年齢の子供たちが、楽しく遊びながら体力向上をはかる機会を設ける。スポーツが得意な子どもも苦手な子どもも遊びながら自由にからだを動かす楽しさを体験することで、心身の成長につながる。

【関大防災運動会】

地域住民の災害対応能力を向上することを目的に、地域連携型防災イベントとして実施。これまでの防災行事は、防災訓練や救急安全講座など「防災」というイメージを前面に押し出したものが多く、子どもや防災に関心がない人が気軽に参加できるものではなかった。学生が企画運営を行うこの関大防災運動会では、「防災」だけではなく「スポーツ」というアクティビティ要素を追加したことで、家族で楽しみながら防災に関する知識を身に付けてもらうことができた。

【浅香山てらこや】

堺市内の小学生を対象に、放課後の学童保育に行くことができない子どもや家庭で居場所がない子どもの居場所作りとして、NPO法人kokoimaのスペースを借り、大学生と一緒に学校の宿題や塾の課題を勉強し学習支援を行っている。

活動の成果

- 【あたらしいあそびの場】身体を動かす楽しさを体験してもらえた。異なる年代の子ども同士が関わることで、精神面での成長に繋がり、人間関係を円滑に進める上で必要なコミュニケーション能力を身に付けてもらうことができた。
- 【関大防災運動会】地域の多様な人たちが主体的に参加することで、防災活動の重要性について認識するようになり、防災に対する意識も変化し前向きに取り組もうという姿勢がうかがえた。

今後の課題・目標

- 【あたらしいあそびの場】保護者から、子どもの成長が目に見えて実感できたという意見をいただいている。今後も子どもたちに身体を動かす楽しさを知ってもらう活動を続けていく。
- 【関大防災運動会】スポーツ×防災のイベントは参加者の自助・共助を高めることに繋がり全国でも例のないユニークな取り組みなので、今後もより多くの参加者を募って継続していきたい。
- 【浅香山てらこや】こうした場所を必要としている子どもたちを募ることは難しいため、子どもたちが気軽に訪れることができるよう工夫していく。

教員紹介

人間健康学部教授 村川 治彦（むらかわ はるひこ）

東京大学文学部（宗教学宗教史学科）を卒業後、米国に留学しCalifornia Institute of Integral Studiesで東西の身体技法と比較思想を学ぶ。博士論文で取り上げた「氣」の研究をきっかけに、言語による体験の深化に関心をもつ。キルケゴールの「人生は振り返らなければ理解できないが、前を向かなければ進んで行かない」をモットーに、日常の様々な実践活動で経験したことを言語化し、反省し、共有するプロセスを教育活動に取り入れる試みを続けている。



事業領域

堺市推進事業

子どもの体力・元気力向上の推進

健康づくり・地域福祉の推進

地域協働型事業の推進

まちのにぎわいづくり

人間健康学部推進事業

学生の学び力向上

教育研究の地域還元

教員の専門分野・学生生活力の活用



参加者のコメント

- 子どもがのびのびと遊んでいる様子が見られて良かったです。近所の公園はあまり広くなく、フリスビーがなかなかできないので、また取り入れていただけるとありがたいです。
- 子どもは、とても楽しかったので、また参加したいと言っていました。
- 大学生の皆さんと仲良く遊べて楽しそうでした。
- 2時間いろいろなプログラムを考えていただき、あっという間に時間が過ぎ、とても楽しそうでした。大学生の皆様ありがとうございました。
- チームに分かれてチームワークでがんばっている姿が見られました。ゲームの説明もしてもらって、1年生ですが、お兄さん、お姉さんたちといっしょに楽しく遊べました。学校から、お手紙をもらったら次回も参加したいです。



鉄砲鍛冶屋敷共同研究調査成果普及事業



活動の目的

- ・関西大学と堺市がおこなった鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家資料の共同研究調査の成果を広く公開するとともに、文化・ものづくりを核とした堺の魅力や、関西大学が取り組んでいる大阪・堺に関する歴史研究の成果について、市民に普及を図る。
- ・2023年度に「(仮)堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアム」の開館を目指して、保存整備事業を進めている。今後、これらの保存整備事業についても、関西大学とさらなる連携が期待できる。

連携にいたる経緯

- ・2015～2018年度の4年間、関西大学なわ大阪研究センターとの共同研究として「鉄砲鍛冶屋敷井上家資料調査研究」を実施した。同家の鉄砲関係資料を中心とした調査により、近世堺における鉄砲生産の実態のみならず、日本の鉄砲生産史にとっても大変価値の高い成果をあげることができた。
- ・2018年1月に関西大学堺キャンパスで資料調査報告会を実施し、初めて調査の内容を公開した。
- ・その後も、共同研究が進行するにつれ、研究の成果を一般の人びとに理解しやすいよう公開する手段として、パネル展示や講演会、展覧会などをおこなった。これによって、関西大学が取り組んでいる「なにわ・大阪」に関する歴史的研究を進めるとともに、近世以来の堺のものづくりの歴史を市民にも広く周知し、文化財への親しみを持ていただくことができる。

活動内容

- ・関西大学堺キャンパスで、鉄砲鍛冶屋敷資料調査報告会（2017年度）
- ・鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家住宅で、鉄砲鍛冶屋敷共同研究調査成果パネル展・資料展示（2018・2019年度）
- ・関西大学東京センターで、鉄砲鍛冶屋敷共同研究調査成果講演会・資料展示（2019年度）
- ・さかい利品の杜で、鉄砲鍛冶屋敷共同研究調査成果展覧会（2020年度）
- ・堺市役所高層館1階ロビーで、鉄砲鍛冶屋敷共同研究調査成果パネル展（2020年度）

活動の成果

- ・パネル展は、堺文化財特別公開にあわせて実施し、堺の歴史に関心のある方や観光客などに、堺と鉄砲生産の歴史や鉄砲鍛冶屋敷資料調査の研究成果についてPRをおこない、3,000人以上の入場者数となった。
- ・東京講演会では、関東地方の人びとに、鉄砲鍛冶屋敷資料調査の成果を広く発信することができた。
- ・展覧会は、コロナ禍の最中ではあったが、来館者約1,700人に、鉄砲鍛冶屋敷資料調査の研究成果を周知できた。また、関連企画として講演会や展示解説、ワークショップをおこなった。

今後の課題・目標

- ・2019年度までは、パネルや講演によって鉄砲鍛冶屋敷についての発信をおこなってきたが、2020年度には実物資料を数多く展示した展覧会を初めて開催することができた。これからも、ミュージアム開館に向けてさまざまな企画をおこない、その機運を高めていきたい。
- ・鉄砲鍛冶屋敷の資料調査及び研究の成果を活かし、堺の歴史や文化、文化財保護に関する普及啓発活動を、関西大学と堺市が連携して推し進めていきたい。

教員紹介

文学部教授 黒田 一充（くろだ かずみつ）

日本に古くから伝わる生活文化や民間信仰、祭り、民俗芸能などを研究しています。現地調査に加え、文書や記録などの歴史資料も参照しながら、過去から現代まで世代を越えて伝わっている民俗行事の分析を試みています。



事業
領域

堺市推進事業

地域協働型事業
の推進

人間健康学部推進事業

学生の
学び力向上

教育研究の
地域還元

教員の専門分野・
学生活力の活用





堺コッカラ体操の普及による地域のつながりづくり



実施年度

2013年度～継続中

主な連携先・メンバー

堺市健康福祉局長寿社会部高齢施策推進課・・・介護予防の体操教室等の実施運営

関西大学人間健康学部弘原海剛ゼミ・・・「堺コッカラ体操」の指導、体操教室の運営及びサポート、「堺コッカラ体操」の生理学的な意義付け、地域での指導者（リーダー）養成

活動地域

大阪府堺市全域／関西大学堺キャンパス

活動の目的

堺市版介護予防体操「堺コッカラ体操」を普及させ、高齢者の認知症予防及び身体機能の向上を図る

連携にいたる経緯

厚生労働省の発表によると、全国の認知症を有している65歳以上の高齢者は約439万人であり、今後ますます深刻化することが予想されている。人間健康学部と堺市は、高齢者の認知症予防及び身体機能の向上に効果的な独自の体操の開発・普及に取り組むこととなった。

活動内容

弘原海剛ゼミでは、堺市との地域連携事業として、高齢者の認知症予防及び身体機能の向上に効果的な新たな介護予防体操として「堺コッカラ体操」を開発し、2015年3月に発表した。

「堺コッカラ体操」は、楽しく身体を動かしながら脳を活性化させるよう、以下のような工夫のもと、製作された。

・一つ一つは簡単な動作でも、組み合わせることによってさまざまな難易度を設定することができる。

・認知症予防に効果があるとされるデュアル・タスク（2つ以上の動作を同時に行う）の動作を取り入れている。

・一人でも行うことができるが、隣の人と合わせたり、向かい合ったり、円になって行う等、複数人でも楽しむことができる。

このように「堺コッカラ体操」は幅広い目的や年齢の方に活用していただける体操であり、今後、堺市全域に普及させるためには、活動対象を高齢者だけに限定するのではなく、子どもの世代に浸透させることが必要であると考えている。また、弘原海剛ゼミでは、体操の指導のみならず「堺コッカラ体操」の生理学的な意義付けについての研究を進めるとともに、そのエビデンスを用いての普及活動や「堺コッカラ体操」のバージョンアップDVD制作、地域での指導者（リーダー）養成にも継続して取り組んでいく。

・コロナ禍により対面活動が困難になったため、YouTubeを利用した動画配信を行う予定である。

活動の成果

- 1 「堺コッカラ体操」が完成し、DVDおよびYouTubeなどで発表を行った
- 2 堺市内の各所で体操教室を実施し「堺コッカラ体操」の生理学的意義を伝えるとともに実技指導を行った
- 3 体操指導を行えるリーダーが地域で活動し体操が根付き始めた

今後の課題・目標

- 1 認知症の予防と身体機能の向上に効果的な「堺市版介護予防体操」の開発
・体操普及に関わる専門的な知識や技術の不足
- 2 「堺コッカラ体操」のバージョンアップDVD制作
・「堺コッカラ体操」を堺市全域に普及させるため、高齢者世代だけでなく、子どもの世代にも浸透させる
・堺市各地域でのリーダー養成と、リーダーへのフォローアップ研修などの実施

教員紹介

人間健康学部教授 弘原海 剛（わだづみ つよし）

専門は運動生理学、運動処方。運動生理学の知識をベースに、唄って踊れるエンターティナーな運動指導者を育てることが夢。学生達と一緒に地域の健康づくり活動に貢献したいと思っている。



事業領域

堺市推進事業

健康づくり・地域福祉の推進

人間健康学部推進事業

教員の専門分野・学生生活力の活用





体力向上推進事業



実施年度

2013年度～継続中

主な連携先・メンバー

堺市教育委員会学校教育部
生徒指導課／堺市立神石小
学校／堺市立東陶器小
学校／堺市立上神谷小
学校／堺市立津久野小
学校／堺市立津久野中
学校

活動地域

大阪府堺市／関西大学
堺キャンパス

活動の目的

- ・堺市の児童生徒の体力向上を目的とした研究を行う
- ・学部学生を体力向上サポーターとして派遣し、実践研究を実施、その効果を検証する

連携にいたる経緯

全国的に体力低下が小中学校の課題になっている中、2013年に堺市から児童生徒の体力向上のための研究と実践をしてほしいという依頼があった。そこで、単なる体力向上ではなく、それに伴う、子どもたちの業間での外遊びの推進や体育の授業の改善を通して、運動が好きな状況をつくり、その効果を研究することとなった。

活動内容

児童生徒が主体的に運動に取り組む態度を養うために、研究校5校（小学校4校、中学校1校）を設定し、人間健康学部の学生を体力向上サポーターとして派遣し、実践研究を行った。また、体力向上検討委員会（各学校の校長と体育主任、教育委員会担当職員、指導助言者）を開催し、研究校における実践研究の効果検証を行った。その他、教員を対象とした研究発表会や研修会を開催したり、児童の運動習慣の確立及び体力向上を図ることを目的に、堺キャンパス体育館で小学3・4年生を対象に堺スポーツランキング（縄跳び大会等）の交流大会を開催し、その中で、学部学生のサークル等が模範演技を披露する場を設けたりした。

活動の成果

- 1 本事業を通し、体力向上研究校では、休み時間におけるスポーツ教室の開催や体育の授業における指導支援の充実により、児童生徒が「できる」喜びを実感するなど、児童生徒の運動意欲促進につながった
- 2 「令和元年度 堺市児童・生徒体力・運動能力調査報告書」として成果をまとめた

今後の課題・目標

- 1 学生サポーターが休み時間の外遊びに関わっているが、外で遊ぶことが苦手の児童にどのようにして外遊びに興味をもたせるのかについての検討
- 2 児童生徒の生活習慣が大きく変化する中、体力向上研究校の取組だけでは、堺市の小中学校生全体の体力を向上させることが難しく、多くの学校において、地域と連携した取組が必要
- 3 学生サポーターと学校との時間調整の都合上、学生サポーターの派遣に限界があるため、教育委員会と大学が連携し、推進校に定期的に学生を配置できるようなシステムづくりが必要

教員紹介

人間健康学部教授 神谷 拓（かみや たく）

筑波大学大学院人間総合科学研究科を修了後、岐阜経済大学、宮城教育大学准教授を経て、2019年より現職。専門は体育科教育学・スポーツ教育学。日本体育科教育学会理事、日本部活動学会会長（2020年7月現在）。体育授業だけでなく、運動会（体育行事）や運動部活動まで視野に入れた、体育の教育課程・カリキュラム研究に従事。



事業
領域

堺市推進事業

子どもの体力・
元気力向上の推進

人間健康学部推進事業

学生の
学び力向上

教員の専門分野・
学生活力の活用





自由研究フェスティバルin 関西大学




📍実施年度
2017年度～2020年度

📍主な連携先・メンバー
各関係企業・団体

📍活動地域
関西大学堺キャンパス

👉活動の目的 /

地域における子育てネットワークの構築や子どもの貧困問題へのアプローチを推進すること

👉連携にいたる経緯 /

事業代表者の専門分野である子ども家庭福祉領域では、地域における子育てネットワークの構築や子どもの貧困問題へのアプローチが課題となっており、堺市および関係機関、関係団体と連携して推進することとなった。

👉活動内容 /

本学堺キャンパス近隣の小学校や子ども食堂に通う小学生たちと、福祉や健康を学ぶ人間健康学部の学生らが、夏休みの自由研究や遊びを通じて交流する「自由研究フェスティバル」。子育てネットワークの構築、子どもの貧困問題への啓発、関係機関との連携強化および活動推進に加え、さまざまな家庭環境の子どもの豊かな活動体験を目的として、関係企業・団体の協力を得て開催している。当日は、約350人の子どもたちと約150人の大学生ボランティアが、「自由研究教室」「遊びブース」「食べ物ブース」を一緒に回りながら交流を深めた。

2017年度、2018年度実施の際、フェスティバル当日に子どもがキャンパスや大学生に馴染めないことが課題としてあげられたため、2019年度には企画として「お出かけ子ども食堂」を実施。フェスティバルに参加予定の子ども食堂に通っている子どもを対象に、遊びやアクティビティ、昼食などを学生と共にすることで、子どもと学生の関係づくりを行いフェスティバル当日への不安を払拭することを目指した。

👉活動の成果 /

- 1 「お出かけ子ども食堂」の実施により、普段子ども食堂に通っている友達と一緒に参加してもらうことができた
- 2 子ども達には、普段できない体験や普段会う機会の少ない友達・学生たちとの交流を通じて楽しい夏休みの思い出を作ってもらえることができた
- 3 学生を中心とした組織作りを行ったため、学生達の成長にも繋がった

👉今後の課題・目標 /

- 1 事業運営の効率化
- 2 フェスティバルの内容のテーマ化
- 3 関係団体との連携

👤教員紹介

人間健康学部准教授 福田 公教（ふくだ きみのり）
専門は社会福祉学、子ども家庭福祉論。社会的養護の普及・啓発および社会的養護下にある子どもの自立支援のあり方について研究を進めている。妻とともにほぐみホーム（養育里親）をつとめている。



事業領域

堺市推進事業

子どもの体力・元気力向上の推進

健康づくり・地域福祉の推進

地域協働型事業の推進

まちのにぎわいづくり



人間健康学部推進事業

学生の学び力向上

教育研究の地域還元

教員の専門分野・学生生活力の活用

参加者のコメント

- 6年生なので次回は参加できないと思うけど、また来年も来たいです。ボランティアの人がやさしくしてくれました。自由研究以外にも「遊び」や「食べ物」があったので楽しかったです。今日、来てすごく良かったです。（小学校6年男子）
- 今日の自由研究でべん強になりました。こんなにおもしろい遊びがあるということがわかりました。（小学校3年男子）
- すごく楽しくてまた来たいです。（小学校4年男子）
- 自由研究をいっぱいしておもしろかった。フリスビーに「カービー」をかくのがきんちょうした。また夏休みにやってほしいと思った。（小学校3年男子）



ソーシャルフットボール講習会を通じた 地域共生の促進



実施年度

2017年度～継続中

主な連携先・メンバー

インクルーシブフットボールクラブ Half Time (代表：田淵 誠 平山 悠一) / 堺市 精神保健課/大阪ソーシャルフットボール協会

活動地域

堺市 / 関西大学堺キャンパス

活動の目的

- ・堺市域で活動している精神障がい者の団体等に呼びかけて、ソーシャルフットボール参加希望者を募り、参加者が楽しめる講習会を通じ、精神障がい者の地域での活動の場づくりを行う
- ・精神障がいに対する地域の理解の促進をめざす

連携にいたる経緯

人間健康学部では、精神保健福祉論及び初級障がい者スポーツ指導員等の資格取得に関連した講義を提供している。そこで精神障がいをもつ人が自由に参加するインクルーシブフットボールチーム (Half Time)、大阪ソーシャルフットボール協会と連携し、本事業を企画した。



活動内容

堺市域で活動している精神保健福祉分野の医療機関や関連団体等に呼びかけて参加希望者を募り、半日単位の講習会を7月と翌年3月に開催した。障がい者福祉・障がい者スポーツに関心をもつ本学の学生にもボランティアとして参加を促した。講習会は堺キャンパスアリーナで開催。開会のあいさつ、オリエンテーション、ルール説明、準備体操・アイスブレイキング、ウォーミングアップ、パス・ドリブル・シュート練習、ミニゲーム、整理体操、懇親会、閉会のあいさつ、アンケート記入、といった内容で行った。講習会には、精神障がい者当事者、Half Time等関係団体スタッフ、関西大学関係者（学生ボランティア等）が30名余り参加。

活動の成果

- 1 参加者のアンケートでは「楽しかった」「交流になった」という意見が多く、講習会の継続を望む意見が多くを占めた
- 2 ボランティアとして参加した学生から、「障がい者の全然ちがう側面が見えて、その人の理解ができて良かった」「みんなうまくて楽しませてもらいました」という声が聞かれた

今後の課題・目標

- 1 2018年度に引き続き、同様の事業を継続することで、ソーシャルフットボールの定着と普及を図る
- 2 こうした障がい者スポーツの普及とともに、その意義の確認と事業の評価を継続する

教員紹介

人間健康学部教授 浦井 忠昭（わくい ただあき）
人間健康学部では、レクリエーション支援論、福祉レクリエーション論等の授業を担当している。
現在、堺市障害者スポーツ大会運営委員会委員長、2014年から全国障害者スポーツ大会堺市選手団長を務めている。



事業
領域

堺市推進事業

健康づくり・
地域福祉の推進

人間健康学部推進事業

教育研究の
地域還元

教員の専門分野・
学生活力の活用



参加者のコメント

- 分かりやすく教えて頂いて、できるようになって嬉しかったです。楽しくフットサル出来て、笑顔も見れて良かったです。
- 講習会は2回目の参加となりました。前回に引き続いて楽しませて頂きました。ありがとうございました！
- 色々な人と交流できたりして良かった。もっとたくさん学びたいです。
- とても楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。
- 子どもが楽しんでくれて良かったです。ありがとうございました。



関大・さかいECOベンチャークラブ



実施年度

2017年度～2020年度

主な連携先・メンバー

堺市環境部／田辺市企画課／本宮行政局／熊野ツーリズムビューロー

活動地域

和歌山県田辺市本宮地区／大塔地区／扇ヶ浜地域／堺キャンパス

活動の目的

- ・異なった年代の若者たちが、野外活動を通してかわりを結びあい、自然の恵みや美しさを味わいながら、互いの成長を支えあうこと
- ・市民の自主性と協働による環境行動を通して持続可能な社会の実現を目指す

連携にいたる経緯

2012年度より開始された堺市・田辺市・関西大学連携「熊野本宮子どもエコツアー」は5回にわたって成功を収め、一定の成果をあげてきた。そこで、その発展形態としてクラブ組織を創設し、さらに活動を充実させることとした。



活動内容

最終回となった2019年度は、従来の田辺市でのキャンプに加えて、堺市の友好都市である鹿児島県種子島ヘスケールの大きな3泊4日にキャンプツアーを催行。都市間の交流促進にも貢献した。期間を通してユニークな企画にチャレンジしてきたが、2020年度をもって廃止。ここで得られた知見は「みんなで夏の思い出を！関大・さかいフルバリュー・キャンプ」に継承される。

活動の成果

- 1 クラブとしたことで、多彩な活動を通して学びがより深まった
- 2 例会数が多いことで、メンバー間の関係からの学びも深まった
- 3 学生側の経験値も高まり、両市の職員の交流も深まった

今後の課題・目標

- 1 活動の成果を市民と共有できる方法を開発したい
- 2 継続的に活動する参加者を増やす
- 3 活動の枠を拡張し、より多彩な体験学習を展開する

教員紹介

人間健康学部教授 安田 忠典（やすだ ただのり）
人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めています。そんな若い力を求めている現場とコラボできます！



事業領域

堺市推進事業

地域協働型事業の推進

まちのにぎわいづくり

人間健康学部推進事業

学生の学び力向上

教育研究の地域還元

教員の専門分野・学生生活力の活用



参加者のコメント

- 今回クラブに参加できることになり、とても幸運でした。大学生のお兄さんやお姉さん達との関わりが刺激的で楽しかったようです。ありがとうございます。また、普段出来ないようなキャンプでの体験など、またしたいと興味を持って参加できました。ステキな学生さんや先生方、関係者の皆さんのおかげで楽しい一年になりました。こちらこそありがとうございました。
- 夏休み終わってすぐの宿泊や、学校行事、運動会などと日にちが重なってしまったのは残念でした。また行きたいから絶対応募して！と、言うくらいまた行きたいらしいです。それくらい楽しかったようです。毎回、新しい発見があり、その話を聞くのも楽しかったです！ありがとうございました。
- 一年間、怪我も無く、安全に活動できてよかったです。子どもは第1回目からすごく楽しかったと帰ってきました。自然環境や日常活動を親のいない場で体験したことで、たくましくなりました。家や学校とはまた違った、環境とメンバーでの活動はとても良い経験になったようです。間違いなく大切な思い出のひとつになりました。CD-Rを頂いたことで、子どもに教えてもらいながら楽しく一緒に見ることが出来ました。人間健康学部についても、初めて知りました。学生さんたちの楽しそうな活動姿を見て、興味を持ちました。子どもにも、皆さんのように、楽しく一生懸命になれる道を見つけて欲しいと思います。本当にありがとうございました。
- この一年間、子どもがこんなに毎回参加日を楽しみにするとは思いませんでした。本当にありがとうございました。内容は思春期の男の子なので詳しくは話してくれませんが、宿泊の準備などを自分からしていたので、それだけ彼には魅力的なクラブだったのだと思います。感謝の気持ちでいっぱいです。

各界で活躍する人間健康学部生・卒業生

世界を舞台に活躍する学生

2016年リオデジャネイロオリンピック セーリング日本代表
オリンピック東京2020大会 セーリング日本代表内定

高野 芹奈

在学中（7期生）



<デンマークでの練習風景>

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

私は本学部で、セーリング競技だけでは学ぶ事が出来ない、スポーツや人間の健康に関する事象を沢山学んでいます。学問としてスポーツを学ぶ事は、アスリートである私にとって大きな強みになっています。

現在は新型コロナウイルス感染症による影響で様々な困難が立ちはだかっていますが、日々模索しながらオリンピックに向けて練習を続けております。今後も、後輩たちの良い刺激になるよう、そして世界で輝くアスリートになれるように努めていきたいと思います。

最後に、人間健康学部の益々の発展を祈念してお祝いのメッセージとさせていただきます。

世界の舞台で活躍した卒業生

2012年ロンドンオリンピック
陸上男子4×400mリレー日本代表
学校法人 関西大学 勤務

東 佳弘

2014年3月卒業（1期生）



<ロンドンオリンピック選考会時（右）>

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

高校では出場できなかった全国大会に大学では必ず出場するという決意を持って、人間健康学部へ1期生として入学しました。鍛錬期には、通常のメニューの2倍以上の距離を走り抜き、誰よりも練習に打ち込みました。入学後から順調に記録が伸び、3年次生時には、第30回オリンピック競技大会の4×400mリレーメンバーに選出されました。アスリートとして最高の舞台に立つことができ、その時の興奮は忘れることができません。

また、ゼミ活動では、陸上競技者として、競技中に感じる感覚と腕振りや歩幅などの映像からわかるデータとを比較し、最適なランニングフォームを追求しました。その中で学んだ、主観的な感覚に客観的な知識・情報を加えていく研究方法は、アスリートとしての自身の糧になっています。

このような人生の大きな出来事を支えてくださった先生方に感謝し、10年後、20年後、そして40年後の50周年へ向け、人間健康学部の益々の発展を祈念してお祝いのメッセージとさせていただきます。

スポーツトップリーグで活躍する卒業生

プロサッカー選手 ヴィッセル神戸所属

前川 黛也

2017年3月卒業（4期生）



<中央キーパー>

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

私の在学時の目標はプロサッカー選手になることでした。その目標を達成するために必要だったのは、スポーツ選手に必要な「心技体」を高いレベルで高めることでした。心技体はそのどれもが一つも欠かすことのできない要素であり、この人間健康学部には、心技体を追求されてきたエキスパートの先生方がたくさんいらっしゃいます。その先生方から学ぶことができ、学ぶための環境も揃っています。そして、夢や目標は違えど、高め合える仲間がいます。先生方にご指導いただきながら仲間達と切磋琢磨し、学びたいことを追求した日々は忘れ得ません。

私はこの人間健康学部で学びを追求し、心技体を高め、目標であったプロサッカー選手になることが出来ました。

後輩のみなさんが夢を持って人間健康学部で学ばれることを期待し、お祝いのメッセージとさせていただきます。

教員として活躍する卒業生

香川県中学校教員

岡 雄大

2016年3月卒業（3期生）



このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

私は学部の3期生で、7期生の弟と合わせると、兄弟で8年間お世話になりました。人間健康学部で過ごした4年間は私にとって、とても貴重な経験です。

人間健康学部は、1つのキャンパスに1学部のため、同じ学部の人と過ごす時間が長く、男女・学年・ゼミ・サークル・部活動の枠を超えて多くの人と交流することができます。いつもエネルギーでお互いを高め合おうとする学部の雰囲気には何度も元気づけられました。

今、私は香川県の中学校で体育の教員をしています。卒業してから、採用試験になかなか合格できず、悩みや苦しむ時期もありましたが、同じゼミや、学部で同じように教師の道に進み、頑張っている「友」の存在に何度も救われました。この学部での友人・先生方との出会いがなければ今の自分はありません。

後輩の皆様へ。人間健康学部の先生方は個性豊かで、その道のプロフェッショナルばかりです。ぜひ先生の元へ足を運んで、多くの知識を吸収してください。きっと今後の人生に役立ちます。そして、ここで出会った仲間を大切にしてください。一生の財産になります。今当たり前前に過ごしている日々にもいつか終わりが来ます。4年間は長いようであつという間です。どうか1日1日を大切に過ごしてください。

10周年という節目にこのような機会をいただけたことを大変嬉しく思います。これからも、人間健康学部が益々発展し、さらに素敵な学部であり続けることを願ってお祝いの言葉とさせていただきます。

教員として活躍する卒業生

堺市小学校教員

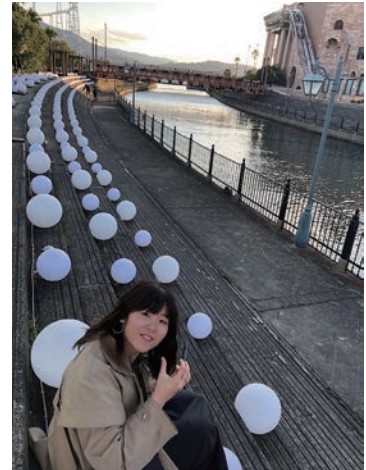
芝野 知咲

2018年3月卒業（5期生）

このたびは人間健康学部創設10周年、誠におめでとうございます。

人間健康学部には他の学部にはない大きな魅力があります。それは「人との繋がり」がどれほど大事か「体感」できることです。さまざまな授業で、人に対するアプローチの方法、自分の思いの表し方、協働する大切さ、個性を尊重することなどを学び、今の子どもたちにこの学びを生かしたい、伝えたいと思い現在の仕事についています。この学部は人の温かみを「体感」できる素敵な学部です。そんな学部で学んだことを生かし、これからも今の子どもたちのために精進致します。

最後に一卒業生として人間健康学部が今後より一層発展することを祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



社会福祉士として活躍する卒業生

社会福祉法人 寝屋川市社会福祉協議会勤務

杉谷 嘉紀

2015年3月卒業（2期生）

このたびは、人間健康学部創設10周年、誠におめでとうございます。

高校生の時にリハビリなどの理学療法と高齢者福祉に関心があり、人間健康学部へ進学しました。入学後は1年次で学んだ運動学の授業での学びを体育会自転車部（サイクルサッカー）での活動に大いに生かすことができ、インカレ優勝などを成し遂げることができました。

また「福祉と健康コース」では、専門職を招いた講義でも自身の将来像を想像でき、今の「地域福祉」というフィールドでの仕事に巡り合うこともできました。現在は、寝屋川市社会福祉協議会でCSW（コミュニティソーシャルワーカー）の役割を担い、制度のはざまに陥ってしまっている方などに二人三脚で寄り添いながら、地域の最前線で「ふだんのくらしのしあわせ」づくりに尽力してくださっている住民の方々とともに、日々活動をさせて頂いています。

人間健康学部は、事務室、福祉実習担当室、キャリアセンターとの“心の距離”が非常に近く、充実した学びができる恵まれた環境であったことを、今改めて思います。これから大きな期待を胸に膨らませて入学してくる学生の皆様、現学部生の皆様、教職員の皆様の益々のご活躍と「御『健幸』」を祈念して、お祝いのメッセージとさせていただきます。



社会福祉士として活躍する卒業生

箕面市役所勤務

神吉 美穂

2017年3月卒業（4期生）

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

4期生となる私たちが入学した2013年度には、4学年が全て揃い、大学らしさ、人間健康学部らしさが見えてくる頃でした。

賑やかさが増す堺キャンパスにおいて、私は福祉と健康コースで特色あるカリキュラムに触れ、山縣先生のゼミでの活動、児童養護施設への実習などを通して、児童福祉の学びに力を注ぎました。その経験は全て現在に生きていますと感じます。今は箕面市で児童相談・児童虐待対応を行う部署に配属され、子どもたちと保護者の普段のくらしが「健康」に、そして「健幸」に送れるよう、日々奮闘しています。

学部生だけでなく先生方、事務職員の方々まで距離が近くアットホームな人間健康学部で過ごせた4年間は、いつまでも色褪せない宝物です。これからも人間健康学部らしく、益々ご発展されることをお祈り申し上げ、お祝いのメッセージとさせていただきます。



社会福祉士として活躍する卒業生

堺市役所勤務

小篠 佳之

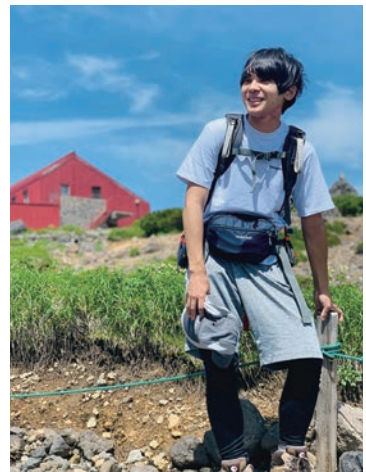
2017年3月卒業（4期生）

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

私が人間健康学部に入學したのは、幅広く福祉について学ぶことができると思ったことがきっかけでした。人間健康学部の福祉と健康コースでは、少人数制の講義が多く、グループワーク等を通じて、知識の定着だけでなく、福祉の現場を想定しての学びに繋げることができました。

大学卒業後は、堺市の福祉事務所で「障害福祉」、「高齢者福祉」に関する仕事をしています。福祉の最前線ということで、大学で学んだことを基とし、堺市職員として、社会福祉士として、日々、福祉に関する知識をアップデートしています。

最後に、人間健康学部創設10周年という節目の年に、お祝いの言葉を送る機会をいただき、大変嬉しく思っています。これからも、学部より福祉分野で活躍されるたくさんの方々が巣立られることを心から願っております。



学部の学びを生かし活躍する卒業生

吉本興業株式会社勤務

吉岡 潤喜

2018年3月卒業（5期生）

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

関西人の「ユーモア」を求め千葉県から入学を決意した私にとって、人間健康学部での4年間は夢のような時間でした。講義中に飛び交う関西弁、教授とのやり取りで生まれるボケ・ツッコミなど、普段の会話が漫才であるかのごとく日常生活で繰り広げられていたのを覚えております。専攻したユーモア学プログラムでは、お笑いに大切な「間合い（間）」の取り方について研究をしました。現在はその研究の成果を生かし、吉本興業のマネージャーとしてタレントマネジメントやイベント運営を行っております。

誇り高き我が母校の卒業生として、人間健康学部の今後の益々の発展を祈念してお祝いのメッセージとさせていただきます。



芸術の世界で活躍する卒業生

劇団四季 俳優

山田 祐里子

2015年3月卒業（2期生）

このたびは人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

私は出来たばかりの学部に心躍らせながら2期生として入学しました。

人間健康学部で学んだアスリートの食事方法やトレーニング法、心理的コンディショニングを整えるための知識などが、現在劇団四季での俳優生活に生かされています。

現在は、『キャッツ』のカッサンドラ役のひとりとして舞台に立っており、他にもこれまで子ども達をご招待する全国ツアーにも参加させて頂きました。最高の舞台をお届けできるよう切磋琢磨しながら日々の稽古や公演に励んでいます。

こうした世界に飛び込めたのは、親身に相談に乗って頂いたゼミの村川先生や、スポーツに打ち込む友人との出会いのおかげです。素晴らしい環境でこれからも学生の皆さんが色々な経験ができますようお祈りしています。



姉弟で学んだ卒業生

堺市中学校教員

坂井 美穂

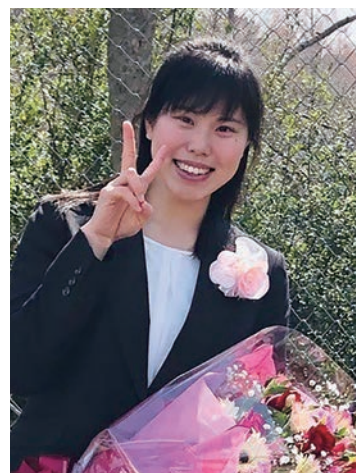
2016年3月卒業（3期生）

学部創設10周年おめでとうございます。

私は4年間、教員免許取得と健康運動実践指導者の資格取得を目指して、楽しく充実した学生生活を過ごしました。私の在学中は、堺キャンパスでの授業だけでなく、陸上競技やサッカーの授業で千里山キャンパスに通ったこともあり、今では懐かしく感じます。また、ゼミ活動で堺市版の介護予防体操である「堺市コッカラ体操」の制作に携われたことは大変貴重な経験になりました。

現在は入学時からの夢を叶え堺市の中学校で保健体育教員として勤務し、日々生徒たちと向き合い、学級指導や部活動指導に励んでいます。

人間健康学部みなさんが、それぞれの目標に向かって実りある大学生生活を送られることを祈念し、お祝いのメッセージとさせていただきます。



株式会社アシックス勤務

坂井 貴博

2017年3月卒業（4期生）

人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

充実した大学時代を思い出すと、またあの場で学びたい気持ちが湧いてきます。2017年に大学を卒業し、現在の会社に就職して早4年になろうとしています。学生時代に培った協調性や積極性は今でも仕事の役に立っています。改めて、母校がわくわくできる魅力的な大学であることを誇りに思います。

これからも堺キャンパスが人間健康学部生にとって素敵な場所であるよう、益々のご発展をお祈りしております。



学びを生かし起業した卒業生

Local Context株式会社 代表取締役CEO
一般社団法人kumano.co 代表理事

森岡 雅勝

2015年3月学部卒業（2期生）
2017年3月人間健康研究科修了

このたびは、人間健康学部創設10周年おめでとうございます。

人間健康学部10周年とお聞きし、ふと私自身の過去を振り返ってみると、高校生の時、何となくスポーツに関わることがしたいというだけの理由で、人間健康学部への進学を決めたことを思い出しました。そんな私に対し人間健康学部での4年間は、スポーツについて学べるだけでなく、それまで視野の狭かった私に様々な視点から物事を考え、実行することの大切さを教えてくれました。幅広い専門性を持たれた先生方、エネルギーに溢れる「人健生」たち、人間健康学部で出会ったたくさんの人々との思い出が、今の私の挑戦の原動力になっています。現役生の皆様におかれましても、益々エネルギーッシュに、夢中になって何かに取り組み、卒業後は同じ「人健卒生」として、社会で活躍できる仲間になれることを祈っています。このたびは誠におめでとうございます。



留学生

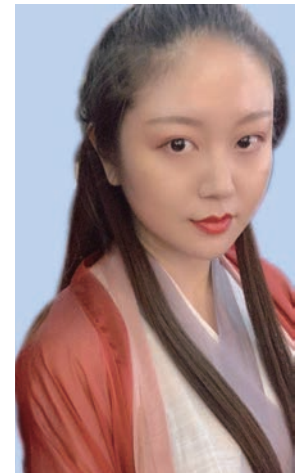
李 晨曦

2020年3月学部卒業（7期生）
大学院人間健康研究科在学中

このたびは、学部創設10周年おめでとうございます。

入学前、私は自分が学年唯一の留学生であるとは夢にも思っていませんでした。不安と緊張感を抱きながら、皆と一緒に大学生活を始めましたが、真っ先にぶつかった壁は『大阪弁』で、毎日、「苦勞して獲得したN1（日本語能力試験の最難関レベル）は何だったんだろう」と思いながら、授業を受けていました。ようやく大阪弁に慣れて授業内容を理解できるようになった頃、次は日本の福祉制度や社会背景が分からないため、放課後はリサーチに没頭する日々が始まりました。一つひとつ難関を突破していく自分の姿は、まるでゲームの主人公のように思っていました。やがて、このような私も、福祉と健康コースに入り、認知症ケアについて研究し始めました。特に特別養護老人ホームでの実習は、私にとっては何より大切な経験となりました。日本の高齢者介護の現場に入り込んで学んだ知識を確かめ、卒業論文だけにとどまらず、大学院での研究テーマも得ることができました。

私は現在大学院人間健康研究科で学び、これからも認知症ケアに関するテーマを研究し続けたいと思っています。今いらっしゃるみなさんが、同じように人間健康学部で素晴らしい研究テーマと出会うことを願い、お祝いの言葉とさせていただきます。



<中国の伝統衣装 漢服にて>

資料

人間健康学部・大学院人間健康研究科・堺キャンパスのあゆみ

2009年度	人間健康学部設置認可(12月24日)
2010年度	堺キャンパスを開設 堺キャンパスに人間健康学部を設置 プロジェクトアドベンチャー(体験学習エリア)を設置 人間健康学部3つのポリシー (アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー) を策定 人間健康学部開設記念シンポジウム 『生きることと向き合う いのちと向き合う』を開催 堺キャンパスB棟を竣工(3月)
2011年度	第1回堺キャンパス祭 『Hop Step Jump～みんなを笑顔に～』を開催
2012年度	シャトルバス(堺キャンパス～千里山キャンパス間)の運行開始 『関西大学人間健康学部と信州大学大学院医学系研究科との 学術連携に関する協定書』を締結
2013年度	大学院人間健康研究科修士課程設置認可(10月31日)
2014年度	大学院人間健康研究科修士課程を設置 (現: 大学院人間健康研究科博士課程前期課程) 大学院人間健康研究科3つのポリシー (アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー) を策定 大学院人間健康研究科修士課程開設記念事業 スポーツフォーラム2014 『今、スポーツ女子、輝く瞬間～育て、健気さ そして2020年へ～』 を開催 人間健康学部入学定員を300名から330名へ変更
2015年度	大学院人間健康研究科博士課程後期課程設置にかかる課程変更 認可(8月31日) 大学院人間健康研究科博士課程後期課程開設記念 スポーツフォーラム2016 『ラグビー日本代表にわれわれは何を学ぶのか?』を開催 ハワイ大学マノア校スチューデントレクリエーションサービス局および ハワイ大学マノア校ソーシャルワーク学部と部局間協定を締結 これに伴い専門科目「国際健康福祉実習(ハワイ)」を開講
2016年度	大学院人間健康研究科博士課程後期課程を設置 A棟3階にラーニング・コモンズを設置 『Kandai Vision 150』において人間健康学部・人間健康研究科 におけるビジョン・政策目標(10年)を策定 ディアナ・プラ大学と部局間協定を締結 これに伴い専門科目「国際健康福祉実習(インドネシア)」を開講
2018年度	人間健康学部・大学院人間健康研究科 カリキュラムマップ・カリキュラムツリーを策定 人間健康学部・大学院人間健康研究科将来構想検討委員会を発足
2020年度	新型コロナウイルス感染症対策の実施(遠隔授業実施等)

※教育・研究活動の一部を抜粋



オリエンテーション・キャンプ

新しい環境で充実した学生生活を送るためのオリエンテーション(方向づけ)を目的に実施する1泊2日のオリエンテーション・キャンプ。

寝食を共にし、意見交換しながら互いに支えあう仲間づくりに寄与しています。



堺キャンパス祭

2011年度に1期生が始めた堺キャンパス祭。毎年たくさんの地域の方々が参加してくださっています。

模擬店やステージ発表だけでなく、課外活動を行う学生が小学生にスポーツ教室を開催するなど、地域に開かれた堺キャンパスらしい企画が盛りだくさんです。



ボランティア活動・地域連携事業など

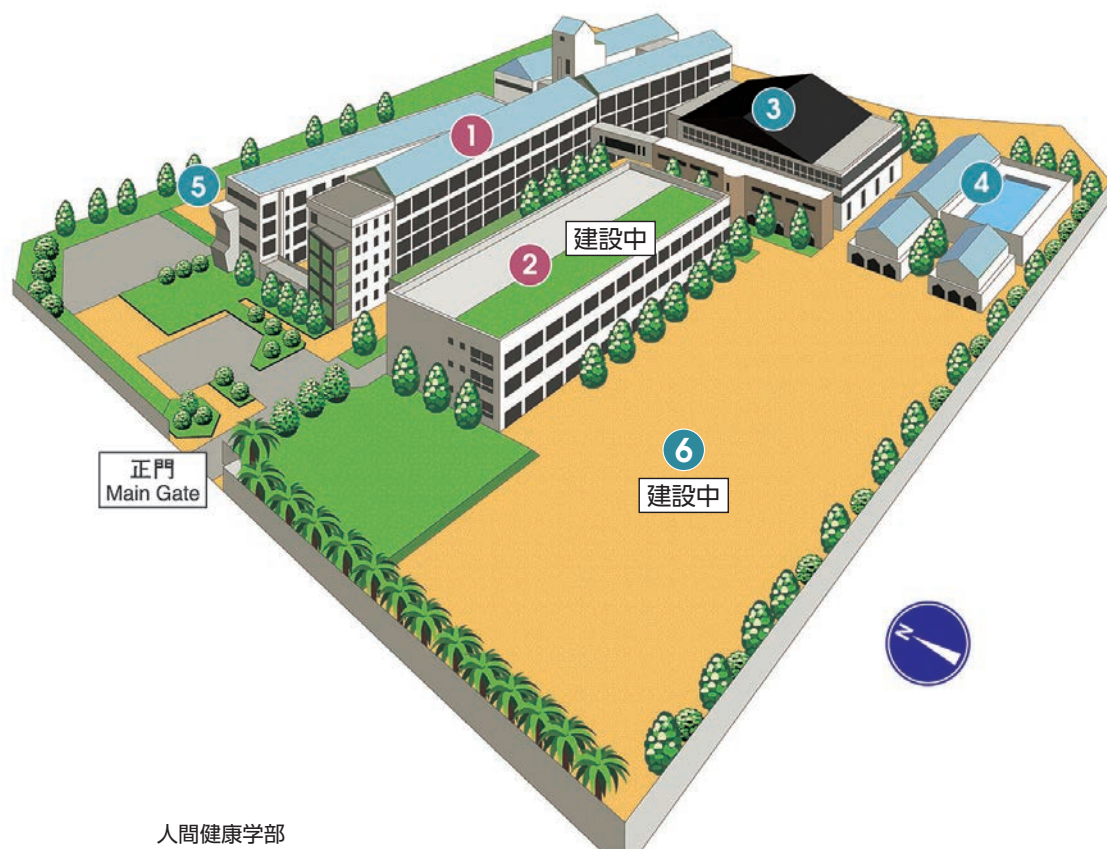
堺市大仙公園にて実施される「堺シティマラソン」には毎年多くの学生ボランティアが参加し、住吉祭神輿渡御では神輿を担ぐ学生の姿が恒例となっています。

また、堺市と関西大学との地域連携事業では、学生たちが企画立案、実施を行う企画が年々増え、学生たちはキャンパスの内外で学びを深めています。



キャンパスマップ

2010年度 | 開設当時の堺キャンパス。
B棟やEvergreenが建設中でした。



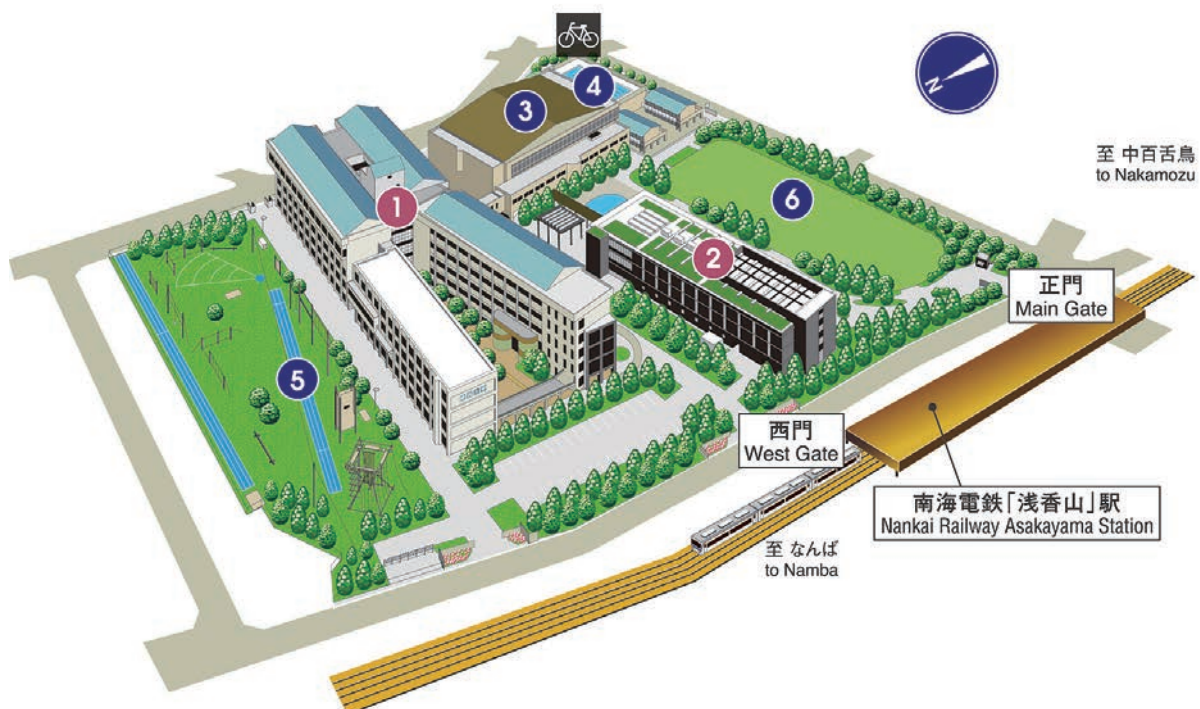
人間健康学部

- ① A棟(学舎、キャリアセンター)
- ② B棟(学舎) ※2011年3月完成予定
- ③ 体育館
- ④ プール
- ⑤ 体験学習エリア
- ⑥ 広場・Evergreen
※2011年3月完成予定

- ① Classrooms, Faculty Office, Career Center
- ② Classrooms ※Due for completion in March 2011
- ③ Gymnasium
- ④ Swimming Pool
- ⑤ Facility for Experiential Learning Activities
- ⑥ Evergreen (Open Space)
※Due for completion in March 2011

2020年度

創設10周年を迎えた堺キャンパス
地域貢献や産官学連携等を推進するための教育研究環境を備えています。



人間健康学部・人間健康研究科

- ① A棟(教室、キャリアセンター、堺キャンパス事務室、保健室)
- ② B棟(教室、堺キャンパス図書館、カフェテリア、購買店)
- ③ 体育館(アリーナ、格技・実習教室、トレーニングルーム)
- ④ プール
- ⑤ 体験学習エリア
- ⑥ 広場・Evergreen

Faculty of Health & Well-being

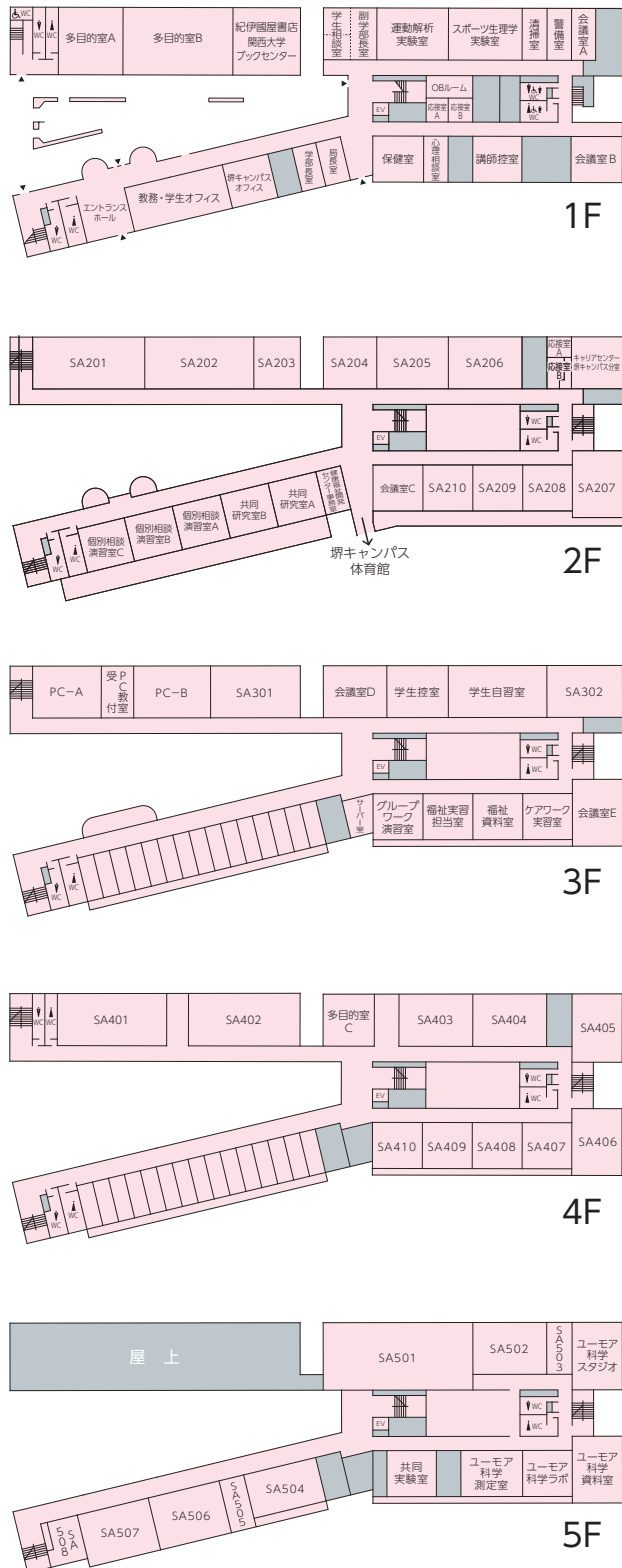
Graduate School of Health & Well-being

- ① Bldg.A (Classrooms, Center for Career Development, Office, Health Room)
- ② Bldg.B (Classrooms, Library, Cafeteria, Store)
- ③ Gymnasium (Arena, Budo & Fitness Gym, Training Room)
- ④ Swimming Pool
- ⑤ Facility for Experiential Learning Activities
- ⑥ Evergreen (Open Space)

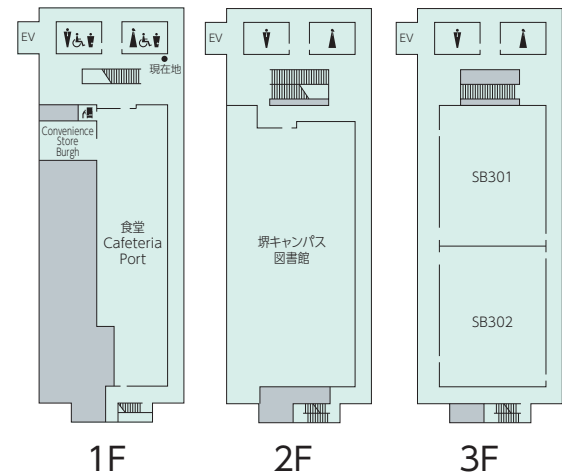
キャンパス見取り図

2010年度 開設当時

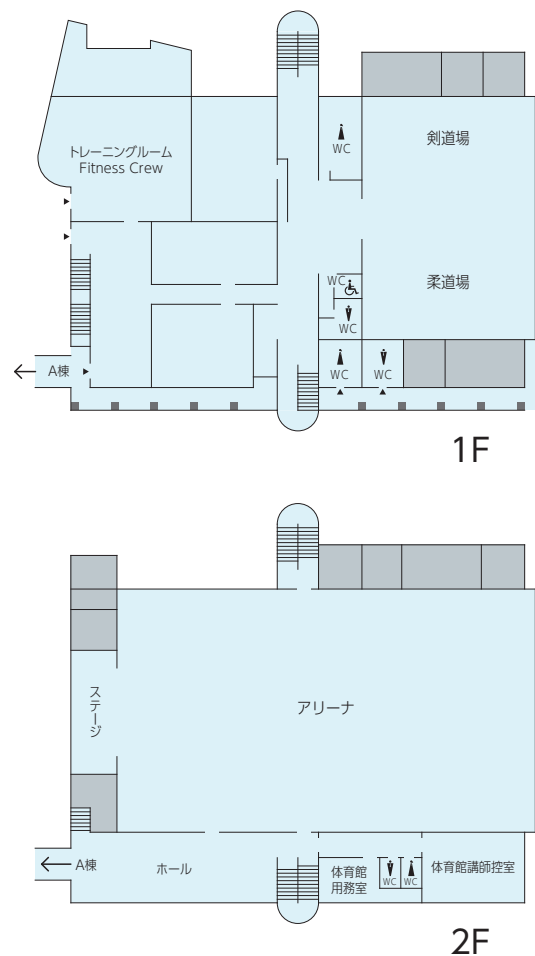
A棟



B棟

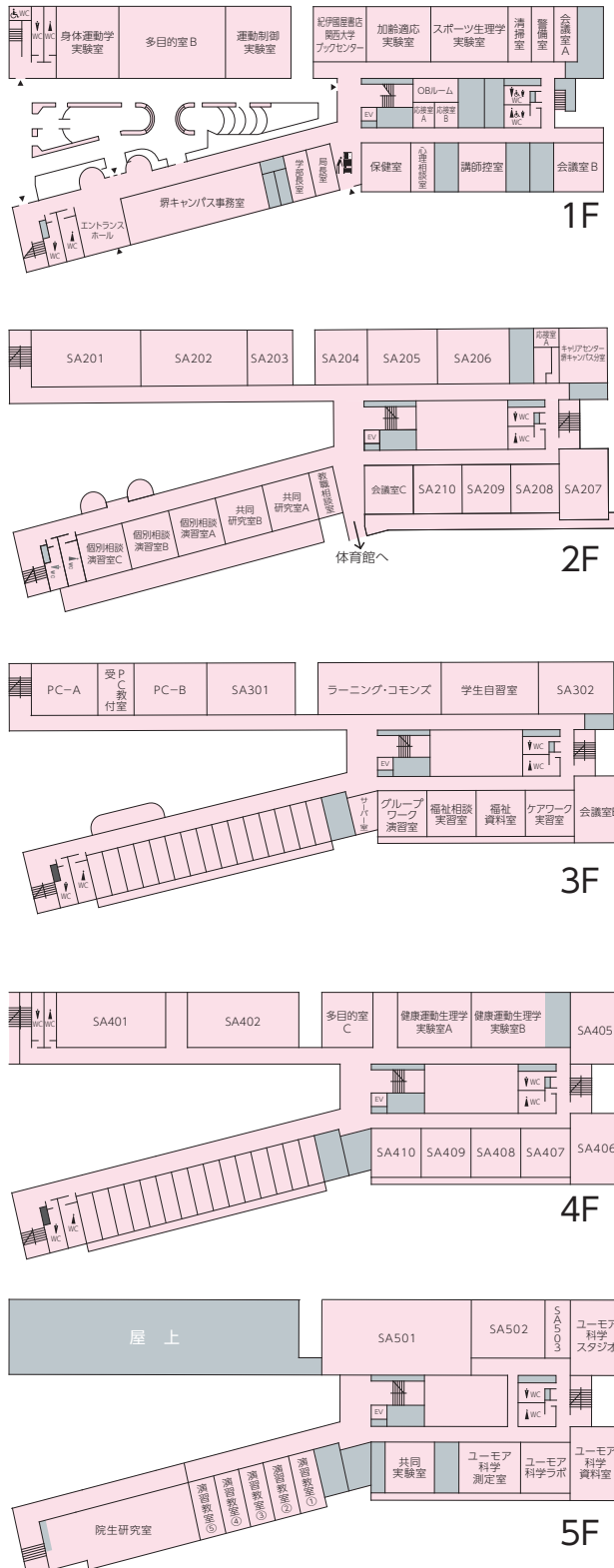


體育館

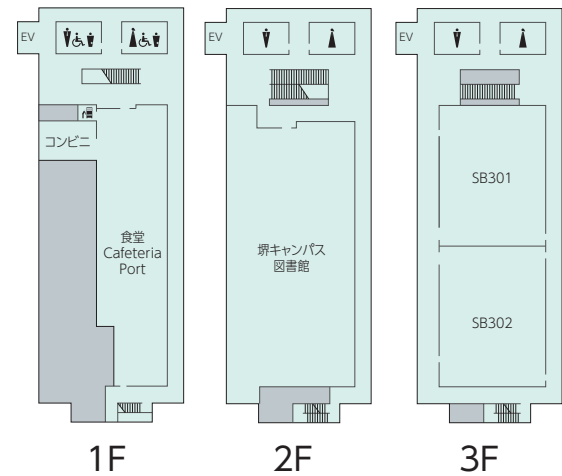


2020年度 | 創設10周年現在

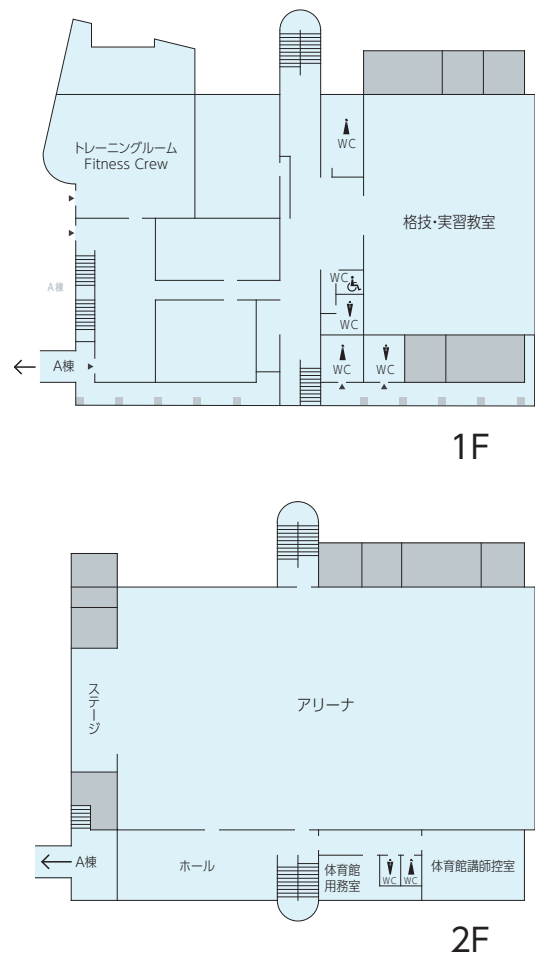
A棟



B棟



体育館



基礎データ

◆志願者数・合格者数・入学者数

年度	志願者	合格者	入学者
2010	3,169	692	362
2011	5,158	746	347
2012	3,786	892	387
2013	4,218	680	343
2014	4,309	699	337
2015	3,808	717	364
2016	4,299	725	337
2017	3,572	741	349
2018	4,200	761	337
2019	4,367	758	367
2020	4,488	672	329

◆在籍者数

年度	定員	在籍者数					備考
		総数	1年次	2年次	3年次	4年次	
2010	300	362	362	—	—	—	開設年度
2011	300	705	347	358	—	—	
2012	300	1,089	387	347	355	—	
2013	300	1,417	343	382	342	350	
2014	330	1,426	337	343	382	364	
2015	330	1,460	364	333	340	423	
2016	330	1,411	337	362	331	381	
2017	330	1,402	349	336	358	359	
2018	330	1,406	337	348	332	389	
2019	330	1,414	367	336	344	367	
2020	330	1,408	329	366	334	379	

◆卒業者数・就職者数・就職率

年度		2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
卒業者数	男	185	183	217	208	195	221	192
	女	139	133	156	131	128	126	134
	計	324	316	373	339	323	347	326
就職活動者数 (a)	男	132	161	158	166	171	193	166
	女	125	106	129	107	122	112	116
	計	257	267	287	273	293	305	282
就職決定者数 (b)	男	128	159	156	162	171	192	165
	女	124	105	128	105	121	112	116
	計	252	264	284	267	292	304	281
就職率	男	97.0	98.8	98.7	97.6	100.0	99.5	99.4
	女	99.2	99.1	99.2	98.1	99.2	100.0	100.0
	計	98.1	98.9	99.0	97.8	99.7	99.7	99.6
大学院進学者	男	15	7	6	5	3	4	7
	女	4	5	4	3	0	2	2
	計	19	12	10	8	3	6	9

◆進路内訳

年 度		2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
就 職	民間企業	215	221	249	235	254	272	248
	官 公 庁	23	23	24	22	28	22	21
	公立学校教員	14	20	11	10	10	10	12
進 学	自大学院	15	12	8	5	1	1	4
	他大学院	4	0	2	3	2	5	5
そ の 他		53	40	79	64	28	37	36
合 計		324	316	373	339	323	347	326

◆資格の取得状況

	教員免許			健康運動指導士			健康運動実践指導者		
	高校	中学校	小学校	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
2013年度	122 (*1)	105	4	6	4	66.7%	7	7	100.0%
2014年度	109 (*2)	78	5	5	3	60.0%	27	13	48.1%
2015年度	114	79	3	6	1	16.7%	13	13	100.0%
2016年度	81	66	4	3	2	66.7%	27	22	81.5%
2017年度	82	66	1	4	3	75.0%	7	4	57.1%
2018年度	89	71	0	5	5	100.0%	2	1	50.0%
2019年度	77	62	3	1	1	100.0%	3	3	100.0%

	公認スポーツ指導者 (免除適応コース修了証明書等)			公認スポーツ指導者 (アシスタントマネージャー)	
	共通 I + II	共通 I + II + III	スポーツリーダー	受験者数	合格者数
2013年度	26	66	3	5	3
2014年度	7	48	1	2	2
2015年度	10	49	0	0	0
2016年度	16	12	2	0	0
2017年度	6	9	2	1	1
2018年度	9	9	1	0	0
2019年度	6	10	0	0	0

	レクリエーション・インストラクター (*3)	初級障がい者スポーツ指導員 (*4)	社会福祉士		
	取得者数	取得者数	受験者数	合格者数	合格率
2013年度	—	—	35	17	48.6%
2014年度	—	—	28	11	39.3%
2015年度	0	—	29	24	82.8%
2016年度	5	3	34	26	76.5%
2017年度	10	7	18	13	72.2%
2018年度	6	5	23	18	78.3%
2019年度	9	7	33	27	81.8%

(*1) 福祉 (高一種免) 1名含む

(*2) 福祉 (高一種免) 2名含む

(*3) 資格取得は2014年度入学生の2年次より可能

(*4) 資格取得は2014年度入学生の3年次より可能

◆歴代執行部一覧

	2010.4～ 2010.10	2010.10～ 2012.9	2012.10～ 2014.9	2014.10～ 2016.9	2016.10～ 2018.9	2018.10～ 2020.9	2020.10～ 2022.9
学部長	竹内 洋	竹内 洋 (～2012.3)	狭間 香代子 (2012.4～)	森下 伸也	山縣 文治	涌井 忠昭	村川 治彦
副学部長 (学部担当)	狭間 香代子	狭間 香代子 (～2012.3) 岡田 忠克 (2012.4～)	小田 伸午	岡田 忠克	原田 純子	所 めぐみ	福田 公教
副学部長 (大学院担当)			森下 伸也 (2014.4～)	涌井 忠昭	西山 哲郎	弘原海 剛	涌井 忠昭
教学主任	杉本 厚夫	杉本 厚夫	岡田 忠克	弘原海 剛	谷所 慶	谷所 慶	安田 忠典
教学主任	岡田 忠克	岡田 忠克	弘原海 剛	山縣 文治	所 めぐみ	西川 知亨	種橋 征子
入試主任	村川 治彦	村川 治彦	涌井 忠昭	西山 哲郎	福田 公教	森 仁志	森 仁志
学生主任	安田 忠典	安田 忠典	灘 英世	森 仁志	灘 英世	村川 治彦	神谷 拓
学生相談主事	三浦 敏弘	三浦 敏弘	原田 純子	小室 弘毅	三浦 敏弘	原田 純子	原田 純子

◆人間健康学部 専任教員一覧

2010	2011	2012	2013	2014	2015
杉本 厚夫 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授
竹内 洋 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //
西山 哲郎 //	黒田 研二 //	河端 隆志 //	河端 隆志 //	河端 隆志 //	河端 隆志 //
狭間 香代子 //	杉本 厚夫 //	黒田 研二 //	黒田 研二 //	黒田 研二 //	黒田 研二 //
三浦 敏弘 //	竹内 洋 //	杉本 厚夫 //	杉本 厚夫 //	雑古 哲夫 //	雑古 哲夫 //
森下 伸也 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //	杉本 厚夫 //	杉本 厚夫 //
岡田 忠克 准教授	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //
志岐 幸子 //	三浦 敏弘 //	三浦 敏弘 //	三浦 敏弘 //	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //
原田 純子 //	森下 伸也 //	森下 伸也 //	森下 伸也 //	三浦 敏弘 //	原田 純子 //
村川 治彦 //	涌井 忠昭 //	山縣 文治 //	山縣 文治 //	村川 治彦 //	三浦 敏弘 //
森 仁志 //	弘原海 剛 //	涌井 忠昭 //	涌井 忠昭 //	森下 伸也 //	村川 治彦 //
安田 忠典 //	志岐 幸子 准教授	弘原海 剛 //	弘原海 剛 //	山縣 文治 //	森下 伸也 //
石田 慎二 助教	原田 純子 //	志岐 幸子 准教授	志岐 幸子 准教授	涌井 忠昭 //	山縣 文治 //
金子 絵里乃 //	村川 治彦 //	灘 英世 //	灘 英世 //	弘原海 剛 //	涌井 忠昭 //
小室 弘毅 //	森 仁志 //	原田 純子 //	原田 純子 //	小室 弘毅 准教授	弘原海 剛 //
窄山 太 //	安田 忠典 //	村川 治彦 //	村川 治彦 //	志岐 幸子 //	浦 和男 准教授
澤田 有希子 //	石田 慎二 助教	森 仁志 //	森 仁志 //	灘 英世 //	小室 弘毅 //
灘 英世 //	金子 絵里乃 //	安田 忠典 //	安田 忠典 //	原田 純子 //	志岐 幸子 //
広崎 真弓 //	小室 弘毅 //	石田 慎二 助教	小室 弘毅 助教	福田 公教 //	谷所 慶 //
松阪 崇久 //	窄山 太 //	金子 絵里乃 //	窄山 太 //	森 仁志 //	所 めぐみ //
森田 亜矢子 //	澤田 有希子 //	小室 弘毅 //	澤田 有希子 //	安田 忠典 //	灘 英世 //
	灘 英世 //	窄山 太 //	広崎 真弓 //	澤田 有希子 助教	西川 知亨 //
	広崎 真弓 //	澤田 有希子 //	松阪 崇久 //	広崎 真弓 //	福田 公教 //
	松阪 崇久 //	広崎 真弓 //	森田 亜矢子 //	松阪 崇久 //	森 仁志 //
	森田 亜矢子 //	松阪 崇久 //		森田 亜矢子 //	安田 忠典 //
		森田 亜矢子 //			森田 亜矢子 助教

2016	2017	2018	2019	2020
岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授	岡田 忠克 教授
小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //	小田 伸午 //
河端 隆志 //	河端 隆志 //	河端 隆志 //	神谷 拓 //	神谷 拓 //
黒田 研二 //	黒田 研二 //	黒田 研二 //	河端 隆志 //	河端 隆志 //
雑古 哲夫 //	雑古 哲夫 //	雑古 哲夫 //	黒田 研二 //	雑古 哲夫 //
杉本 厚夫 //	志岐 幸子 //	志岐 幸子 //	雑古 哲夫 //	志岐 幸子 //
所 めぐみ //	杉本 厚夫 //	杉本 厚夫 //	志岐 幸子 //	所 めぐみ //
西山 哲郎 //	所 めぐみ //	所 めぐみ //	所 めぐみ //	灘 英世 //
狭間 香代子 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //	西山 哲郎 //
原田 純子 //	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //	狭間 香代子 //
三浦 敏弘 //	原田 純子 //	原田 純子 //	原田 純子 //	原田 純子 //
村川 治彦 //	三浦 敏弘 //	三浦 敏弘 //	三浦 敏弘 //	三浦 敏弘 //
森下 伸也 //	村川 治彦 //	村川 治彦 //	村川 治彦 //	村川 治彦 //
山縣 文治 //	森下 伸也 //	森下 伸也 //	森 仁志 //	森 仁志 //
涌井 忠昭 //	山縣 文治 //	安田 忠典 //	森下 伸也 //	森下 伸也 //
弘原海 剛 //	涌井 忠昭 //	山縣 文治 //	安田 忠典 //	安田 忠典 //
浦 和男 准教授	弘原海 剛 //	涌井 忠昭 //	山縣 文治 //	山縣 文治 //
小室 弘毅 //	浦 和男 准教授	弘原海 剛 //	涌井 忠昭 //	涌井 忠昭 //
志岐 幸子 //	小室 弘毅 //	浦 和男 准教授	弘原海 剛 //	弘原海 剛 //
谷所 慶 //	谷所 慶 //	小室 弘毅 //	浦 和男 准教授	浦 和男 准教授
灘 英世 //	灘 英世 //	谷所 慶 //	小室 弘毅 //	小室 弘毅 //
西川 知亨 //	西川 知亨 //	灘 英世 //	谷所 慶 //	谷所 慶 //
福田 公教 //	福田 公教 //	西川 知亨 //	灘 英世 //	種橋 征子 //
森 仁志 //	森 仁志 //	福田 公教 //	西川 知亨 //	西川 知亨 //
安田 忠典 //	安田 忠典 //	森 仁志 //	福田 公教 //	福田 公教 //
森田 亜矢子 助教	森田 亜矢子 助教	森田 亜矢子 助教	森田 亜矢子 助教	森田 亜矢子 //

◆歴代客員教授一覧

氏 名 (敬称略)	職務	現職 (委嘱当時)	委嘱期間
井上 俊	文化社会学 (春学期・2時間)	大阪大学名誉教授	2010年度～2011年度
梶本 徳彦	公的扶助論 (秋学期・2時間)	大阪府社会福祉協議会 会長	2010年度～2012年度
ヨーコ・ゼッターランド	講演	日本バレーボール協会理事 スポーツコメンテーター	2010年度～2011年度
近藤 良平	講演	舞台俳優・舞踏家	2010年度～2012年度
大棟 耕介	講演	特定非営利活動法人 日本ホスピタル・クラウン 協会 理事長	2011年度～2016年度
平尾 誠二	講演	神戸製鋼コベルコ スティーラーズ総監督・ジェ ネラルマネージャー	2012年度～2016年度
桂 文枝	講演	社団法人上方落語協会 会長	2012年度～2015年度
岡本 栄一	講演	大阪ボランティア協会顧問 兼ボランティアリズム研究所長	2013年度～2014年度
飯室 巨起	講演	マイム俳優・演出家	2013年度～2016年度
津崎 哲郎	講演	大阪児童虐待防止協会 理事長	2015年度～2017年度
祖母井 秀隆	講演	元サッカー選手・サッカー指導者	2017年度
赤星 憲広	講演	元プロ野球選手・野球評論家	2017年度～2018年度
大前 光市	講演	プロダンサー	2017年度～2018年度
仲岡 しゅん	講演	弁護士	2018年度～(継続)
桂 米團治	講演	落語家	2018年度～(継続)
田口 一成	講演	株式会社ボーダレスジャパン 代表取締役	2020年度
スティーブン・マーフィー重松	講演	Stanford University, School of Medicine, Health and Human Performance Program	2020年度～(継続)
森 優貴	講演	演出家・振付家・ダンサー	2020年度～(継続)

*委嘱年度順

卒業式集合写真

2014年3月卒業式

2014年3月20日
卒業生 324名



2015年3月卒業式

2015年3月20日
卒業生 316名



2016年3月卒業式

2016年3月19日
卒業生 373名



2017年3月卒業式

2017年3月18日
卒業生 339名



2018年3月卒業式

2018年3月20日
卒業生 323名



2019年3月卒業式

2019年3月20日
卒業生 347名



2020年3月の卒業式については、新型コロナウイルス感染症対策のため、残念ながら撮影が出来ませんでした。

◆基本協定書

基 本 協 定 書

堺市（以下「甲」という。）と学校法人関西大学（以下「乙」という。）は、「関西大学健康文化学部」（以下「健康文化学部」という。）の設置について次のとおり確認し、協定する。

（目的）
第1条 この協定は、甲及び乙が相互に協力し、乙の大学運営を円滑に実施することにより、教育研究の充実、大学の活性化を図るとともに、研究成果を地域に還元することで、地域の発展・活性化に大きく寄与することを目的とする。

（信義誠実の原則）
第2条 甲及び乙は、信義を重んじ誠実に本協定書を遵守しなければならない。

（学部の設置）
第3条 乙は、甲と協力して、堺市堺区香ヶ丘町1丁目1番1号に所在する「堺市立商業高等学校・第二商業高等学校校地」に平成22年4月より健康文化学部を設置する。

（学部の運営等）
第4条 乙は、市内での進学機会を拡大、地域企業をはじめとして世界に貢献できる人材の育成等の重要な役割を担うとともに、都市ブランドの向上にも寄与するため、健康文化学部の運営に当たり、平成19年12月13日付け提出の「堺市立商業高等学校・第二商業高等学校校地における大学等高等教育機関設置企画提案 提案書」の内容を誠実に実現するように努めるものとする。
2 乙は、健康文化学部を設置後、乙の責任において運営するものとする。
3 乙は、乙の設置する学部が地域とともに発展し、地域における高等教育機能と研究機能の集積を図るため、第1項の取組みの他、甲と協力して諸条件の整備に努め、さらなる地域貢献、教育内容の向上、学部拡充等に取組むものとする。

（学部の規模）
第5条 乙は、健康文化学部の規模を入学定員300名、収容定員1,200名とするように努めるものとする。

（土地建物の賃借）
第6条 甲は、乙に対し「堺市堺区香ヶ丘町1丁目1番1号」の土地及び建物を、別途取り決める契約に基づき、平成22年4月1日から20年間無償貸与するものとする。ただし、貸与期間満了に際し、甲乙協議のうえ、貸与期間を更新できるものとする。

（連携協力）
第7条 甲及び乙は、歴史的・文化的資源の活用及び知的・人的資源の交流を回り、まちづくり、文化、産業、教育等様々な分野において、地域の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的として、次に掲げる分野について連携・協力する。
（1）健康、福祉、産業及び環境に関する分野
（2）教育・研究及び科学技術に関する分野
（3）まちづくり、市民生活の向上に関する分野
（4）文化、歴史及び国際交流に関する分野
（5）その他、双方が有益にして必要と認める分野

（地域連携協議会の設置）
第8条 甲及び乙は、前条に掲げた目的を実現するために、連携協力に関する協議会を設置するものとする。
2 乙は、地域貢献協力資金として総額5億円を負担するものとする。
3 第1項の規定による協議会に関する事項については別に定める。

（効力）
第9条 この協定書中、甲の議会又は乙の理事会の議決等を要する事項については、それぞれが議決されたときに効力が生ずるものとする。

（運営状況の報告）
第10条 乙は、甲の求めに対して、運営状況に関し必要な報告を甲に行うものとする。

（基本協定上の権利義務の譲渡の禁止）
第11条 甲及び乙は、他の当事者の承諾なくこの基本協定上の権利義務につき、自己以外の第三者への譲渡又は担保権の設定をしてはならない。

（義務の不履行等）
第12条 この基本協定の各当事者は、この基本協定上の義務を履行しないことにより他の当事者に損害を与えた場合、その損害を賠償しなければならない。

（定めのない事項）
第13条 この基本協定に定めのない事項又は双方に疑義の生じた事項については、甲及び乙が別途協議して定めることとする。

本協定締結の証として本協定書を2通作成し、署名捺印の上、各々1通を所持する。

平成20年 3 月 17 日

甲 大阪府堺市堺区南瓦町3番1号
堺市
堺市長 木原 敬介

乙 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
学校法人関西大学
理事長 森本靖一郎

◆基本協定書の一部を変更する協定書

基本協定書の一部を変更する協定書

平成20年8月7日付け、堺市（以下「甲」という。）と学校法人関西大学（以下「乙」という。）との間で締結した基本協定書（以下「原協定書」という。）の一部を次のように変更する協定を締結する。

原協定書文中、「健康文化学部」を「人間健康学部」に変更する。

本協定締結の証として本協定書を2通作成し、記名捺印の上、各々1通を所持する。

平成21年5月25日

甲 大阪府堺市堺区南瓦町3番1号
堺市
堺市長 木原 敬介

乙 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
学校法人関西大学
理事長 上原 洋

◆堺市と関西大学との地域連携協議会に関する覚書

堺市と関西大学との地域連携協議会に関する覚書

堺市（以下「甲」という。）と学校法人関西大学（以下「乙」という。）は、平成20（2008）年8月7日付け基本協定書（以下「基本協定書」という。）第8条第1項に基づき、地域連携協議会（以下「協議会」という。）の設置及び運営について次のとおり覚書（以下「本覚書」という。）を締結する。なお、平成29（2017）年8月3日付け堺市と関西大学との地域連携協議会に関する覚書は、本覚書の締結と同時に失効する。

（目的）
第1条 協議会は、歴史的・文化的資源の活用及び知的・人的資源の交流を図り、まちづくり、文化・産業、教育等様々な分野において、甲の地域及び乙の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的とする。

（協議内容）
第2条 協議会は、次の分野に係る連携事業等について協議する。
(1) 健康、福祉、産業及び環境に関する分野
(2) 教育・研究及び科学技術に関する分野
(3) まちづくり、市民生活の向上に関する分野
(4) 文化、歴史及び国際交流に関する分野
(5) その他双方が有益にして必要と認める分野

（組織）
第3条 協議会は、別表に掲げる委員をもって組織する。
2 協議会に議長及び副議長を置き、開催場所に応じ、その職を充てる。
3 堺市開催時は、議長は堺市市長を、副議長は議長が指名した者とする。
4 関西大学開催時は、議長は学校法人関西大学専務理事を、副議長は議長が指名した者をもって充てる。

（議長及び副議長の職務）
第4条 議長は、協議会の事務を総括する。
2 副議長は、議長を補佐し、議長が不在のときはその職務を代理する。

（作業部会）
第5条 協議会は、具体的な事項について検討するため、作業部会を設けることができる。

（説明時の聴取）
第6条 議長が必要と認めるときは、協議会に関係者の出席を求め、その説明又は意見を聴くことができ、併せて資料の提供を求めることができる。

（会議）
第7条 協議会は、次に掲げる月に会議を開催する。
(1) 定例会を7月及び3月に開催する。ただし、定例会の実施が困難な場合は甲乙双方協議の上、開催月を変更することができる。
(2) 前号の規定にかかわらず、甲乙双方が必要と認めた場合は開催することができる。

（業務）
第8条 協議会は、次に掲げる業務を行う。
(1) 毎年度の連携事業計画及び予算を協議し、決定すること。
(2) 毎年度の連携事業実績報告及び決算を承認すること。
(3) その他連携の推進に関すること。
2 連携事業を推進するにあたっては、基本協定書第8条第2項に規定する地域貢献協力資金等を財源として充当する。

（窓口の設置）
第9条 協議会を円滑かつ効果的に進めるため、双方に連絡調整等の窓口を設置する。
(1) 堺市は政策企画部、関西大学は堺キャンパス事務室を連絡等の窓口とする。
(2) 変更が生じた場合は、速やかに報告する。

（その他）
第10条 この覚書に定める事項に関する細目については、別途協議して定めることとする。
2 この覚書に定める事項について協議が生じた場合及びこの覚書に定めのない事項については、双方が誠意をもって協議して定めることとする。

本覚書締結の証として本覚書2通を作成し、各々1通を所持する。

令和3（2021）年1月26日

甲 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市



堺市長 永藤 英樹

乙 吹田市山手町3丁目3番2号
学校法人 関西大学



理事長

別表（委員）

堺市	関西大学
副市長	専務理事
市民人権局長	副学長
文化観光局長	人間健康学部長
健康福祉局長	地域連携センター長
産業振興局長	堺事務局長
教育次長	

地域連携協議会日程・歴代委員一覧

		2010年8月27日	2011年3月23日	2011年7月29日	2012年3月26日	2012年7月30日	2013年3月22日
堺市	副市長	五嶋 青也	五嶋 青也	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一
	市民人権局長	西 正博	西 正博	西 正博	西 正博	中野 博文	中野 博文
	文化観光局長	—	—	志摩 哲也	志摩 哲也	志摩 哲也	志摩 哲也
	健康福祉局長	西出 茂春	西出 茂春	早川 泰史	早川 泰史	早川 泰史	早川 泰史
	産業振興局長	戎野 隆	戎野 隆	米澤 博隆	米澤 博隆	米澤 博隆	米澤 博隆
	教育次長(2017年度まで(指導担当))	石井 雅彦	石井 雅彦	石井 雅彦	石井 雅彦	木谷 博	木谷 博
	企画部長	吉田 功	吉田 功	—	—	—	—
関西大学	専務理事	池内 啓三	池内 啓三	池内 啓三	池内 啓三	池内 啓三	—
	常務理事	増地 英一	増地 英一	増地 英一	増地 英一	増地 英一	永田 眞三郎
	副学長	廣瀬 幹好	廣瀬 幹好	廣瀬 幹好	廣瀬 幹好	廣瀬 幹好	前田 裕
	人間健康学部長	竹内 洋	竹内 洋	竹内 洋	竹内 洋	狭間 香代子	狭間 香代子
	地域連携センター長	林 宏昭	本西 泰三	本西 泰三	本西 泰三	西村 枝美	西村 枝美
	大学本部長	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行
	堺事務局長	—	—	—	—	—	小上 廣之

		2013年7月22日	2014年3月28日	2014年7月31日	2015年3月30日	2015年7月29日	2016年3月28日
堺市	副市長	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一
	市民人権局長	中野 博文	中野 博文	谷口 裕子	谷口 裕子	谷口 裕子	谷口 裕子
	文化観光局長	志摩 哲也	志摩 哲也	笠谷 実	笠谷 実	笠谷 実	笠谷 実
	健康福祉局長	早川 泰史	早川 泰史	中野 博文	中野 博文	中野 博文	中野 博文
	産業振興局長	野口 徹	野口 徹	野口 徹	野口 徹	野口 徹	野口 徹
	教育次長(2017年度まで(指導担当))	木谷 博	木谷 博	登り山 正嗣	登り山 正嗣	登り山 正嗣	登り山 正嗣
	常務理事	永田 眞三郎	永田 眞三郎	永田 眞三郎	永田 眞三郎	永田 眞三郎	永田 眞三郎
関西大学	副学長	前田 裕	前田 裕	前田 裕	吉田 栄司	吉田 栄司	吉田 栄司
	人間健康学部長	狭間 香代子	狭間 香代子	狭間 香代子	森下 伸也	森下 伸也	森下 伸也
	地域連携センター長	西村 枝美	西村 枝美	西村 枝美	西村 枝美	西村 枝美	西村 枝美
	大学本部長	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行	岡田 弘行
	堺事務局長	森 茂実	森 茂実	森 茂実	森 茂実	森 茂実	森 茂実

		2016年7月22日	2017年3月29日	2017年8月3日	2018年3月26日	2018年8月3日	2019年3月27日
堺市	副市長	田村 恒一	田村 恒一	田村 恒一	中條 良一	中條 良一	中條 良一
	市民人権局長	河村 寛之	河村 寛之	河村 寛之	河村 寛之	河村 寛之	河村 寛之
	文化観光局長	笠谷 実	笠谷 実	笠谷 実	笠谷 実	宮前 誠	宮前 誠
	健康福祉局長	小椋 啓子	小椋 啓子	小椋 啓子	小椋 啓子	小椋 啓子	小椋 啓子
	産業振興局長	花野 健治	花野 健治	花野 健治	花野 健治	花野 健治	花野 健治
	教育次長(2017年度まで(指導担当))	山之口 公一	山之口 公一	山之口 公一	山之口 公一	田所 和之	田所 和之
	常務理事	永田 眞三郎	安部 善博	安部 善博	安部 善博	安部 善博	安部 善博
関西大学	副学長	吉田 栄司	奥 和義	奥 和義	奥 和義	奥 和義	奥 和義
	人間健康学部長	森下 伸也	山縣 文治	山縣 文治	山縣 文治	山縣 文治	涌井 忠昭
	地域連携センター長	西村 枝美	品川 哲彦	品川 哲彦	品川 哲彦	品川 哲彦	品川 哲彦
	大学本部長	岡田 弘行	岡田 弘行	—	—	—	—
	堺事務局長	森 茂実	森 茂実	村上 隆志	村上 隆志	島貫 未来夫	島貫 未来夫

		2019年8月2日	2020年3月27日	2020年8月7日
堺市	副市長	中野 時浩	中野 時浩	中野 時浩
	市民人権局長	光齋 かおり	光齋 かおり	光齋 かおり
	文化観光局長	宮前 誠	宮前 誠	宮前 誠
	健康福祉局長	隅野 巧	隅野 巧	隅野 巧
	産業振興局長	花野 健治	花野 健治	奈良 和典
	教育次長(2017年度まで(指導担当))	田所 和之	田所 和之	田所 和之
	常務理事	安部 善博	安部 善博	安部 善博
関西大学	副学長	奥 和義	奥 和義	奥 和義
	人間健康学部長	涌井 忠昭	涌井 忠昭	涌井 忠昭
	地域連携センター長	品川 哲彦	品川 哲彦	品川 哲彦
	大学本部長	—	—	—
	堺事務局長	島貫 未来夫	島貫 未来夫	島貫 未来夫

あとがき

人間健康学部は2010年4月、堺市のご支援の下、堺キャンパスに設置され、2020年3月末でまる10周年を迎えた。この間、2014年4月に大学院人間健康研究科修士課程（現在の大学院人間健康研究科博士課程前期課程）、2016年4月には大学院人間健康研究科博士課程後期課程を設置し、着実に発展を遂げてきた。

2019年7月に教員と事務職員で人間健康学部創設10周年記念事業実行委員会（以下、「実行委員会」と略す。）を発足させた。当初の企画は、2020年6月に卒業生と在学生の交流の場としてのホームカミングデー、9月に記念式典、記念講演および交流祝賀会、加えて、本学部の特色である「地域連携事業10年のあゆみ」の可視化であった。しかし、2020年に全世界に蔓延した新型コロナウイルス（COVID-19）の感染症拡大により、ホームカミングデー、記念式典、記念講演および交流祝賀会は中止を余儀なくされた。そこで、2020年6月の第8回実行委員会において、改めてこの10年間の教育・研究活動および地域連携事業をとりまとめた「人間健康学部創設10周年記念誌」を製作することとした。

本誌の発行に際し、創設10周年のご祝辞をお寄せいただいた永藤堺市長はじめ日頃ご高配いただいております皆様、芝井理事長、前田学長をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げたい。また、創設以来、地元本学校友会堺支部には物心両面にわたりご支援をいただいている。ここに記して感謝申し上げたい。

むすびに、人間健康学部における10年間の教育・研究活動および地域連携事業を写真やデータから記念誌として発行できたのは、実行委員会の皆様をはじめ、事務職員の方々のご努力によるものである。

心から感謝申し上げたい。

人間健康学部創設10周年記念事業実行委員会
記念誌担当 涌井 忠昭

人間健康学部創設10周年記念誌「10年のあゆみ」

発行日 2021年3月31日
発行所 関西大学 人間健康学部
〒590-8515
大阪府堺市堺区香ヶ丘町1丁11番1号
TEL 072-229-5022
E-mail sakail@ml.kandai.jp
URL https://www.kansai-u.ac.jp/Fc_hw/

教育研究促進基金として、本学部創設10周年記念についてご寄付を賜りましたことにお礼申し上げます。



〈2011年3月撮影〉



関西大学
人間健康学部